

別添 1

厚生労働科学研究費補助金

統計情報総合 研究事業

## 適切な原死因記載のための教育コンテンツの開発

平成29年度 総括・分担研究報告書

研究代表者 木下 博之

平成 30 ( 2018 ) 年 5 月

別添 2

目 次

I . 総括研究報告	
適切な原死因記載のための教育コンテンツの開発	----- 1
木下博之	
( 資料 ) 適切な原死因記載のための e-ラーニングシステム	
II . 分担研究報告	
1 . 適切な原死因記載のための教育コンテンツの開発	----- 81
池松和哉	
2 . 適切な原死因記載のための教育コンテンツの開発	----- 83
横田順一郎	
3 . 適切な原死因記載のための教育コンテンツの開発	----- 85
加藤稲子	
4 . 適切な原死因記載のための教育コンテンツの開発	----- 87
鷲見幸彦	
5 . 適切な原死因記載のための教育コンテンツの開発	----- 89
横井英人	
6 . 適切な原死因記載のための教育コンテンツの開発	----- 91
宮武伸行	
III . 研究成果の刊行に関する一覧表	----- 93

平成29年度厚生労働科学研究費補助金（統計情報総合 研究事業）  
（総括）研究報告書

適切な原死因記載のための教育コンテンツの開発

研究代表者 木下 博之 香川大学医学部 教授

研究要旨

本研究では、医師が作成する死亡診断書・死体検案書の標準的な記載例集を作成し、原死因を適切に記載するための教育コンテンツの開発と普及・啓発を目的とする。

本年度は、昨年度に作成した e-ラーニング用模擬事例に加え、原死因選択ルールに基づいた模範記載例（標準的記載例）の内容の充実を図った。特に、e-ラーニングでのクイズ形式の学習のみならず、多数の事例ベースの具体的記載例を作成した。コンテンツを活用・理解することで、死亡診断書・死体検案書の適切な記載は、直接的・間接的に死因統計の精度向上につながり、国民の健康増進や福祉の向上に寄与することが期待される。

研究分担者氏名・所属研究機関名及び所属研究機関における職名

池松 和哉・長崎大学大学院医歯薬学総合研究科・法医学分野 教授

横田順一郎・独立行政法人 堺市立病院機構 副理事長

加藤 稲子・三重大学大学院周産期発達障害予防学講座・小児科学 教授

鷲見 幸彦・国立長寿医療研究センター・神経内科 副院長

横井 英人・香川大学医学部附属病院・医療情報部 教授

宮武 伸行・香川大学医学部人間社会環境医学講座・衛生学 准教授

A．研究目的

死亡診断書・死体検案書の標準的な記載例を作成し、その普及・啓発のための教育コンテンツの開発を目的とする。

B．研究方法

研究開発としては、事例と標準的記載例を中心とするコンテンツを作成する。特に、原死因を適切に記載・選択する事を主要な目的としており、選択方法の考え方を重点にした記載例を作成する。

様々な領域の専門家から構成される各分担研究者、研究協力者の協力の下、過去の経験、学会や検討会、カンファレンスなどで伝聞した情報も含め、それぞれの領域における比較的典型的な事例を収集する。死亡診断書・死体検案書等を作成する上で問題となる点や課題を抽出し、それらを基に、ICD-10 の原死因選択ルールに基づいた模範記載例（標準的記載例）を作成し、e-ラーニングのシステムとした。さらに、今年度は特に、模範記載例についての幅広い想定事例を作成し、充実を図る。記載例については、研究班員全員でのブラッシュアップを行い、様式の統一を図る。

（倫理面への配慮）

例示の作成に際しては、個人情報や個人が特定できるような内容は含まない。

C．研究結果

死亡診断書・死体検案書作成の際に、因果関係の記載が困難な例、特に、内因（疾病によるもの）と外因（外傷や中毒、温度環境など）の両者が関与する事例などを中心に、60例余りの事例を設定し、それぞれについて模範記載例（標準的記載例）を作成した。

D．考察

死亡診断書、死体検案書は人間の死亡を医

学的・法律的に証明することのみならず、わが国の死因統計を作成する際の資料となる。その記載内容のうち、死因欄に記載された傷病から選択された原死因が死因統計の分類を行う上での基礎となる。

死因統計は、わが国の保健衛生行政や社会的にも広く活用されており、保健衛生政策を実施していく上での基盤データのひとつである。そのため、死亡診断書・死体検案書の作成にあたり、どのような形で記載内容が統計作成に利用されているかを熟知しておく必要があるが、現状の重要性についての意識・認識は必ずしも十分ではない。医学部の学部教育においても、これら死亡診断書、死体検案書の作成に関する授業は行われているものの、現場で診療や死体検案に従事する医師を対象として、医師会等の研修会での普及・啓発も不可欠である。

本研究では実際の事例に即した形での教育コンテンツを作成した。このコンテンツについては、e-ラーニングによる自習のみならず、講義や研修会等でも活用できるように、標準記載例についての幅広い事例を充実させた。

死亡診断書・死体検案書の適切な記載は、直接的・間接的に死因統計の精度向上につながるものと考えられる。さらには死因統計の精度向上を介して、国民の健康増進や福祉の向上に大きく寄与することが期待される。

## E．結論

死亡診断書・死体検案書作成の際の、記載に困難を感じる例について、因果関係の記載が困難な例、あるいは記載方法の判断に迷う例について、適切な記載についての内容例示を充実させた。具体的な事例を用いた学習に関しては、適切な記載例の増加により、死因統計の精度向上、ひいては国民の健康増進・福祉の向上に大きく寄与することが期待される。

## F．健康危険情報

該当なし。

## G．研究発表

### 1. 論文発表

木下博之：死亡診断書・死体検案書作成の留意点．香川県医師会雑誌．2017； 70： 80-82．

Kinoshita H, Tanaka N, Takakura A, Kumihashi M, Jamal M, Ito A, Tsutsui K, Kimura S, Matsubara S, Ameno K. Flunitrazepam in stomach contents may be a good indicator of its massive ingestion. Rom J Leg Med. 2017; 25: 193-195.

Takakura A, Tanaka N, Omyia T, Omori H, Hirasaki A, Jamal M, Ito A, Ishimoto S, Tsutsui K, Kimura S, Ameno K, Kinoshita H. Spectrophotometric measurement of boric acid in a case of accidental ingestion. The Albanian Journal of Medical and Health Sciences. 2017; 48: 49-53.

Kinoshita H, Tanaka N, Takakura A, Abe H, Kumihashi M, Shibayama T, Jamal M, Ito A, Tsutsui K, Kimura S, Iwase H, Ameno K. An autopsy case of death by combined use of benzodiazepines and diphenidine. Soud Lek. 2017; 62: 40-43.

Yamamoto Y, Miyatake N, Kinoshita H, Tanaka N, Kuratou R, Katayama A, Fukunaga T. Changes in asphyxia death classified by month in the 23 wards of Tokyo. Curr Study Environ Med Sci 2017; 10: 3-9.

宮武伸行, 田中直子, 木下博之, 福永龍繁: 東京 23 区における凍死者数と気温指標との関連および凍死者数の月別比較．地域環境保健福祉研究．2017, ; 20: 27-30.

横田順一郎: 救急医療におけるメディカルコントロール．日本救急医学会メディカルコントロール体制検討委員会・日本臨床救急医学会メディカルコントロール検討委員会監修．救急医療におけるメディカルコントロール．へるす出版．東京； pp 3-5, 2017.

横田順一郎: 救急医療体制の歴史．日本救急医学会メディカルコントロール体制検討委員会・日本臨床救急医学会メディカルコントロール検討委員会監修．救急医療におけるメディカルコントロール．へるす出版．東京； pp 6-18, 2017.

### 2. 学会発表

木下博之：死体検案・剖検の現状とこれから．岡山県医師会警察医部会．2017年4月22日．岡山市．岡山県医師会館



木下博之：死亡診断書・死体検案書作成の留意点．香川県警察医会総会．2017年9月16日．高松市．香川県医師会館

3. 関連した実務活動

木下博之：「異常環境死」「内因性急死」．日本医師会死体検案研修会（上級）．2017年9月17,18日．東京都．日本医師会館

木下博之：日本医師会死体検案研修会（上級）の企画、運営．2017年9,10月．東京都、福岡県

H .知的財産権の出願・登録状況( 予定を含む )  
該当なし。



## はじめに

死亡診断書（死体検案書）は、人の死亡に関する医学的・法律的な証明であり、その作成は「最後の医療」に位置づけられます。

書類作成にあたっては、死者の死亡に至るまでの過程を可能な限り詳細に・論理的に記載しますが、多くの例では、直接の死因とおおもとの疾患・傷害が必ずしも1対1ではなく、様々な病態や状態が複雑に絡み合っています。そのため、死亡診断書（死体検案書）の作成に当たっては、特に死因の記載に関して悩まれることも多いと思います。

今回、研究班では、厚生労働省発行の「死亡診断書（死体検案書）記入マニュアル」に従って、代表的な事例についての記載の方法や選択方法を例示しました。また、自己学習のためのe-ラーニングもごございます。ご活用いただき、記載の方法に悩んだ際の一助となれば幸いです。

## この学習システムの構成

このシステムは次のように構成されています。

- 01. 例示編
- 02. e-ラーニング編
- 03. 確認問題

死亡診断書（死体検案書）作成の参考の一助になれば幸いです。なお、提示する事例はすべて架空のもので

# 目次

## [はじめに](#)

## 目次

### [例示集1](#)

- E1 誤嚥性肺炎
- E2 在宅
- E3 食物誤嚥
- E4 独居高齢者の死亡
- E5 覚せい剤によるクモ膜下出血
- E6 ヘリウム吸引
- E7 漂流死体
- E8 独居高齢者の死亡2
- E9 独居者の死亡
- E10 交通事故

### [例示集2](#)

- E11 縊死
- E12 溺水後の低酸素脳症
- E13 自転車の転落
- E14 火災
- E15 火災による一酸化炭素中毒
- E16 転落
- E17 横隔膜ヘルニア
- E18 溺水
- E19 異物の誤嚥
- E20 死後変化が著明

### [例示集3](#)

- E21 熱中症
- E22 パラコート中毒
- E23 泥酔
- E24 自宅での死亡
- E25 熱傷
- E26 遊泳中の死亡
- E27 肺炎
- E28 地震による家屋倒壊
- E29 癌
- E30 上位頸髄損傷
- E31 複数の要因が考えられる例
- E32 高度損傷

#### 例示集4

- E33 胃潰瘍穿孔
- E34 肝硬変
- E35 胃癌
- E36 脳塞栓
- E37 詳細検査中
- E38 破傷風
- E39 急性膀胱炎
- E40 アルコールおよびウイルスによる肝硬変

#### 例示集5

- E41 多系統萎縮症
- E42 白血病による多発性脳出血
- E43 慢性腎不全
- E44 アルコール性心筋症
- E45 癌患者の肺炎
- E46 関節リウマチ患者の間質性肺炎急性増悪
- E47 間質性肺炎のある関節リウマチ患者の脳出血
- E48 原発不明癌
- E49 感染性心内膜炎
- E50 外因の関与が疑われる感染性心内膜炎

#### 例示集6

- E51 珪肺
- E52 飛び降り自殺後のPTE
- E53 脂肪塞栓症
- E54 気管支喘息重積発作
- E55 誤嚥性肺炎
- E56 転倒
- E57 アルツハイマー病
- E58 髄膜炎
- E59 癌性腹膜炎

## E1 誤嚥性肺炎

82歳の男性。約10年前の脳梗塞のため、左半身の麻痺と嚥下障害がある。食事の際にしばしば誤嚥する。自宅では妻が介護し、ほとんど外出はしない。

しばしば肺炎を繰り返しているが、かかりつけ医の診察、治療で軽快していた。

数日前から発熱が持続、呼吸困難も出現してきたため入院した。胸部X線写真では下肺野を中心に広汎な陰影がみられ、治療を受けるも呼吸状態は改善せず、死亡した。

死因は誤嚥性肺炎と推測された。

この場合に発行する書類、「死亡の原因」「死因の種類」の記載例を示します。

### 【適切な記載】

(14)	死亡の原因	施設の名 称		発病（発症） 又は受傷から死亡までの期間	数日（推定）
		(ア) 直接死因	誤嚥性肺炎		
		(イ) (ア) の原因	嚥下障害		
		(ウ) (イ) の原因	脳梗塞		
		(エ) (ウ) の原因			
◆1欄では、最も死亡に影響を与えた傷病名を医学的因果関係の順番で書いてください	◆1欄の傷病名の記載は各欄一つにししてください	◆1欄の傷病名は、最も死亡に影響を与えた傷病名を医学的因果関係の順番で書いてください	◆1欄の傷病名は、最も死亡に影響を与えた傷病名を医学的因果関係の順番で書いてください	◆年、月、日等の単位で書いてください。ただし、1日未満の場合は、時、分等の単位で書いてください（例：1年3か月、5時間20分）	約10年
(15)	死 因 の 種 類	① 病死及び自然死	不慮の外因死 { 2 交通事故 3 転倒・転落 4 溺水 5 煙、火災及び火焔による傷害 }		
			外因死 { 6 窒息 7 中毒 8 その他 }		
(16)	外 因 死 の 追 加 事 項	その他の死 { 9 自殺 10 他殺 11 その他及び不詳の外因 }			
		12 不詳の死			
		傷害が発生したとき	平成・昭和 年 月 日 午前・午後 時 分	傷害が発生したところ	都道府県 市 区 町村
◆伝聞又は確定情報の場合でも書いてください	◆伝聞又は確定情報の場合でも書いてください	傷害が発生したところの種別			
		1 住居 2 工場及び建築現場 3 道路 4 その他 ( )			
		手段及び状況			

### 【解説】

本文からは、直接死因（ア）は誤嚥性肺炎が考えられます。

ただ、脳梗塞の後遺症による嚥下障害があり、誤嚥性肺炎と脳梗塞後の状態には関連があると思いますので、単に「誤嚥性肺炎」とするのではなく、（イ）には「脳梗塞後状態」（あるいは脳梗塞による嚥下障害）を追加し、脳梗塞に起因する肺炎、と考えたほうがよいと思われます。

## E2 在宅

78歳の男性。1年前に膵臓癌の診断を受け、治療を受けていたが、癌はすでに進行しており、積極的治療を行わない方針となった。本人の希望で自宅での療養となり、2日に1度、かかりつけ医の診察を受けている。

数日前から病状が悪化し、昨日から意識レベルが低下してきた。かかりつけ医の最終診察を受けた翌々日の午前5時30分に、家族に見取られ死亡した。朝、連絡を受けたかかりつけ医が死後の診察を行い、異状はないと判断し、死因は膵臓癌の進行によるものと診断した。

この場合に発行する書類、「死亡の原因」「死因の種類」の記載例を示します。

【適切な記載】

### 発行する書類：死亡診断書

		施設 の 名 称			
(14)	死亡の原因	◆1欄、2欄ともに疾患の終末期の状態としての心不全、呼吸不全等は書かないでください	Ⅰ	(ア) 直接死因	膵臓癌
		◆1欄では、最も死亡に影響を与えた傷病名を医学的因果関係の順番で書いてください	(イ) (ア) の原因		発病（発症）又は受傷から死亡までの期間
		◆1欄の傷病名の記載は各欄一つにししてください	(ウ) (イ) の原因		◆年、月、日等の単位で書いてください。ただし、1日未満の場合は、時、分等の単位で書いてください（例：1年3か月、5時間20分）
		◆1欄の傷病名の記載は各欄一つにししてください	(エ) (ウ) の原因		
		◆1欄の傷病名の記載は各欄一つにししてください	Ⅱ	直接には死因に関係しないが1欄の傷病経過に影響を及ぼした傷病名等	
(15)	死因の種類	手術	①所 2有	部位及び主要所見	手術年月日 平成 年 月 日 昭和 年 月 日
		解剖	①所 2有	主要所見	
(16)	外因死の追加事項	①病死及び自然死	不慮の外因死 { 2 交通事故 3 転倒・転落 4 溺水 5 煙、火災及び火焔による傷害 }		
		外因死	6 窒息 7 中毒 8 その他		
		その他及び不詳の外因死	9 自殺 10 他殺 11 その他及び不詳の外因		
◆伝聞又は確定情報の場合でも書いてください	傷害が発生したとき	平成・昭和 年 月 日 午前・午後 時 分	傷害が発生したところ	都道府県 市 区 町村	
	傷害が発生したところの種類	1 住居 2 工場及び建築現場 3 道路 4 その他 ( )			
	手段及び状況				

#### 【解説1】

在宅での看取りの際に、医師の立ち会いがなく、翌朝死後の診察を受けた事例です。

医師法第20条の規程により、最終診察から24時間を経過している場合でも、死後あらためて診察を行い、生前に診察していた傷病に関連する死亡であると判定できる場合には、死亡診断書が交付できます。

死後診察を行い、生前に診察していた傷病に関連する死亡であると判定できない場合には、死体の検案を行い、異状があると判断した時にはまず警察署に届けることとなります。

【解説2】

医師法第20条の規程により、最終診察から24時間以内に患者が死亡した場合には、死後あらためて診察を行うことなく、「生前に診療していた傷病に関連する死亡であると判定できる場合」には、死亡診断書が交付できます。

ただ、そのような状況でも、「生前に診療していた傷病」に起因しないことがあります。死亡診断書の内容の正確を期すためと、さらに、異状死の見逃しをしないためにも、このような場合でも死後あらためて診察を行うことが望ましいと思います。

【参考】

医師法（抄）

第20条 医師は、自ら診察しないで治療をし、若しくは診断書若しくは処方せんを交付し、自ら出産に立ち会わないで出生証明書若しくは死産証書を交付し、又は自ら検案をしないで検案書を交付してはならない。但し、診療中の患者が受診後24時間以内に死亡した場合に交付する死亡診断書については、この限りでない。

第21条 医師は、死体又は妊娠4月以上の死産児を検案して異状があると認めたときは、24時間以内に所轄警察署に届け出なければならない。

医師法第20条但し書の適切な運用について （抜粋）

（平成24年8月31日 厚生労働省医政局医事課長通知）

1.医師法第20条ただし書きは、診療中の患者が診察後24時間以内に当該診療に関連した傷病で死亡した場合には、改めて診察をすることなく死亡診断書を交付し得ることを認めるものである。このため、医師が死亡の際に立ち会っておらず、生前の診察後24時間を経過した場合であっても、死亡後改めて診察を行い、生前に診察していた傷病に関連する死亡であると判定できる場合には、死亡診断書を交付することができること。

2.診療中の患者が死亡した後、改めて診察し、生前に診療していた傷病に関連する死亡であると判断できない場合には、死体の検案を行うこととなる。この場合において、死体に異状があると認められる場合には、警察署へ届け出なければならないこと。



## E3 食物誤嚥

78歳の男性。平成X年1月2日午後0時15分頃、昼食に餅を食べていたところ、喉につまらせて、苦しみだした。家族が手で取り出そうとしたが、うまく取り出せず、救急車を要請した。

病院搬入時は心肺停止状態であった。喉頭展開時に餅を取り出し、心肺蘇生術により一時心拍は再開したものの、意識の回復なく午後1時20分に死亡が確認された。

この場合に発行する書類、「死亡の原因」「死因の種類」の記載例を示します。

【適切な記載】

		施設 の 名 称			
(14)	死亡の原因	(ア) 直接死因	窒息		約1時間
		(イ) (ア)の原因	食物誤嚥		約1時間
		(ウ) (イ)の原因			
		(エ) (ウ)の原因			
		直接には死因に関与しないが1欄の傷病経過に影響を及ぼした傷病名等			
◆1欄、2欄ともに死因の終末期の状態としての心不全、呼吸不全等は書かないでください		◆1欄では、最も死亡に影響を与えた傷病名を医学的因果関係の順番で書いてください		◆年、月、日等の単位で書いてください。ただし、1日未満の場合は、時、分等の単位で書いてください(例：1年3か月、5時間20分)	
◆1欄の傷病名の記載は各欄一つにしてください		ただし、欄が不足する場合は(エ)欄に残りを医学的因果関係の順番で書いてください		手術年月日 平成 年 月 日	
手術		①無 2有	部位及び主要所見		
解剖		①無 2有	主要所見		
(15)	死因の種類	1病死及び自然死 2不慮の死 3交通事故 4転倒・転落 5溺水 6煙、火災及び火傷による傷害 7窒息 8中毒 9その他 10自殺 11他殺 12その他及び不詳の死			
(16)	外 因 死 の 追 加 事 項	傷害が発生したとき 平成 昭和 X 年 1 月 2 日 午前・午後 0 時 15 分 頃 傷害が発生したところの種別 ①居 2工場及び建築現場 3道路 4その他( ) ◆伝聞又は確定情報の場合でも書いてください		傷害が発生したところ △△市 〇〇区 〇〇町 〇〇村	
		手段及び状況 餅を食べていて、喉に詰めたという。			
(17)	生後1年未満で病死した場合の追加事項	出生時体重	単胎・多胎の別		妊娠週数
		グラム	1単胎 2多胎(子中第 子)	満 週	
		妊娠・分娩時における母体の病歴又は貴状		母の生年月日	前回までの妊娠の結果
		1無 2有		平成 年 月 日	出生児 死産児 人胎 (妊娠満22週以後に限る)
(18)	その他特に付言すべきことがら 病院に搬送され、心拍は一旦再開し、治療を受けたが死亡した。				

### 【解説】

自宅で食事中に、餅を誤嚥した事例です。

病院搬入後、心拍が再開したものの、死亡に至った事例であり、異状死の届け出が必要です。

検視の際に、治療を担当した主治医に立ち会いと書類の発行を求められることもありますが、その場合には、発行する書類は「死亡診断書」になります。

## E4 独居高齢者の死亡

83歳の男性。平成×年10月25日午後、尋ねてきた近所の知人が死亡しているのを発見した。約10年前に妻が死亡し、独居で生活していた。約20年前から高血圧と糖尿病を指摘されており、定期的に診療所を受診していた。

警察への届出の後、死体検案を依頼された。損傷はなく、胸部に亜硝酸薬のテープが貼付されていた。主治医からの情報で、過去に心筋梗塞の既往があるものの、2週間前の最終診察時に変わったことはなかったとのことである。検案所見から特に異状は見いだせず、既往症から心疾患の可能性が示唆された。警察も事件の可能性は無いと判断した。

この場合に発行する書類、「死亡の原因」「死因の種類」の記載例を示します。

### 【適切な記載】

(14)	死亡の原因	施設の名 称		発病（発症） 又は受傷から死亡までの期間  ◆年、月、日等の単位で書いてください ただし、1日未満の場合は、時、分等の単位で書いてください (例：1年3か月、5時間20分)	不詳
		(ア) 直接死因	虚血性心疾患（推定）		
		(イ) (ア) の原因			
		(ウ) (イ) の原因			
		(エ) (ウ) の原因			
目	直接には死因に関係しないが1層の傷病経過に影響を及ぼした傷病名等	高血圧、糖尿病	約20年		
	◆1層の傷病名の記載は各欄一つにしてください ただし、欄が不足する場合は(エ)欄に残りを医学的因果関係の順番で書いてください	手術 ①所 2有	部位及び主要所見	手術年月日 平成 年 月 日 昭和 年 月 日	
(15)	死 因 の 種 類	① 死及び自然死 不慮の外因死 { 2交通事故 3転倒・転落 4溺水 5煙、火災及び火焔による傷害 } 外因死 { 6窒息 7中毒 8その他 } その他及び不詳の外因死 { 9自殺 10他殺 11その他及び不詳の外因 } 12 不詳の死			
(16)	外 因 死 の 追 加 事 項	傷害が発生したとき	平成・昭和 年 月 日 午前・午後 時 分	傷害が発生したところ	都道府県 市 区 町村
		傷害が発生したところの種類 1 住居 2 工場及び建築現場 3 道路 4 その他 ( )			
		◆伝聞又は確定情報の場合でも書いてください 手段及び状況			

### 【解説】

自宅で死亡発見された事例です。

警察への届出後に、検視が行われ、その際に死体検案が依頼された事例です。

検視の際には、ご遺体の所見のみならず既往症や主治医からの情報もふまえ、死体検案の所見を基に死因を判断することになりますが、死体検案には限界があります。近年ではCTなどの死後画像検査や血液生化学検査が実施されることもありますが、検案のみでは診断の限界があります。一方、様々な事情で解剖検査ができないこともあり、死体検案のみで判断を求められる場合には、可能なかぎり客観的で詳細な記載をお願いします。

## E5 覚せい剤によるクモ膜下出血

22歳の男性。平成X年5月5日午後8時頃、〇〇県△△市の自宅室内で死亡しているのを発見された。

傍らには使用された小型の注射器が落ちており、残液から覚せい剤の反応が出たという。

解剖検査を行ったところ、脳には脳底面を中心とした強いクモ膜下出血がみられ、前交通動脈に動脈瘤があり、破綻していた。強い肺水腫がみられ、気管内には白色の泡沫がみられた。また、血液及び尿の検査を行ったところ、覚せい剤が検出された。死亡推定日時は発見同日午後2時頃、覚せい剤はその直前に使用されたものと考えられた。

この場合に発行する書類、「死亡の原因」「死因の種類」の記載例を示します。

【適切な記載】

(14)	死亡の原因	施設の名義		発病（発症） 又は受傷から死亡までの期間	短時間
		(ア) 直接死因	脳クモ膜下出血		
		(イ) (ア) の原因	前交通動脈動脈瘤破綻		
		(ウ) (イ) の原因	覚せい剤中毒		
		(エ) (ウ) の原因			
◆1欄では、最も死亡に影響を与えた傷病名を医学的因果関係の順で書いてください	◆1欄では、最も死亡に影響を与えた傷病名を医学的因果関係の順で書いてください	◆1欄の傷病名の記載は各欄一つにしてください	◆1欄の傷病名の記載は各欄一つにしてください	◆年、月、日等の単位で書いてください。ただし、1日未満の場合は、時、分等の単位で書いてください。 (例：1年、3か月、5時間20分)	短時間
解剖	①無 ②有	部位及び主要所見			平成 年 月 日 昭和 年 月 日
		主要所見 脳底面を中心とする強いクモ膜下出血。前交通動脈に破綻した動脈瘤。強い肺水腫。血液から覚せい剤を検出。			
(15)	死因の種類	1 病死及び自然死 外因死 不慮の外因死 { 2 交通事故 3 転倒・転落 4 溺水 5 煙、火災及び火焔による傷害 } 6 窒息 7 中毒 8 その他 その他及び不詳の外因死 { 9 自殺 10 他殺 11 その他及び不詳の外因 } 12 不詳の死			
(16)	外因死の追加事項	傷害が発生したとき		傷害が発生したところ	
		平成 昭和 X 年 5 月 5 日 午前・午後 2 時 頃		〇〇 都道 △△ 区 ●● 町村	
◆伝聞又は確定情報の場合でも書いてください		手段及び状況 自宅室内で死亡していたという。			

【解説】

死因は、覚せい剤使用に起因するクモ膜下出血と考えられます。

クモ膜下出血をきたした原因として、覚せい剤使用による血圧上昇が大きく影響していると考えられます。また、覚せい剤の連用により、血管炎を生じることがあり、これらもクモ膜下出血の発症に関与した可能性もあります。

これらのことから、覚せい剤使用は直接の関与があると考えられます。

## E6 ヘリウム吸引

22歳の男性。平成X年5月10日午後8時頃、〇〇県△△市の自宅室内で死亡しているのを発見された。

頭からビニール袋をかぶり、頸部で軽く縛った部分から透明なチューブが挿入されていた。傍らにはバルブが開放状態のバルーン用のヘリウムボンベが置かれ、透明なチューブに連結されていた。また、本人の自筆の遺書が発見された。解剖検査を行ったところ、急死の所見のみで、外傷や病的所見はなかった。後日の検査で、血液からヘリウムが検出された。死亡推定日時は発見同日午後2時頃と考えられた。

この場合に発行する書類、「死亡の原因」「死因の種類」の記載例を示します。

### 【適切な記載】

(14)	死亡の原因	施設 の 名 称		発病（発症） 又は受傷から死亡までの期間  ◆年、月、日等の単位で書いてください ただし、1日未満の場合は、時、分等の単位で書いてください （例：1年3か月、5時間20分）	短時間  短時間	
		(ア) 直接死因	窒息(推定)			
		(イ) (ア)の原因	酸素欠乏			
		(ウ) (イ)の原因				
		(エ) (ウ)の原因				
◆1欄では、最も死亡に影響を与えた傷病名を医学的因果関係の順で書いてください ◆1欄の傷病名の記載は各欄一つにしてください ただし、欄が不足する場合は(エ)欄に残りを医学的因果関係の順で書いてください	目	直接には死因に関係しないが1欄の傷病経過に影響を及ぼした傷病名等				
	手術	① 2有	部位及び主要所見	手術年月日	平成 昭和 年 月 日	
(15)	死因の種類	1病死及び自然死 不慮の外因死 { 2交通事故 3転倒・転落 4溺水 5煙、火災及び火端による傷害 } 外因死 { 6窒息 7中毒 8その他 } その他及び不詳の外因死 { 9自殺 10他殺 11その他及び不詳の外因 } 12不詳の死				
(16)	外因死の追加事項	傷害が発生したとき	平成 昭和 X 年 5 月 10 日 午後・午後 2 時 頃分		傷害が発生したところ	〇〇 都道 △△ 区 都 町村
		傷害が発生したところの種類	①居 2工場及び建築現場 3道路 4その他 ( )			
◆伝聞又は確定情報の場合でも書いてください		手段及び状況 頭からビニール袋をかぶり、ヘリウムを吸入したと思われる。				

### 【解説】

死因は、ヘリウム吸入による酸素欠乏と考えられます。

ヘリウム自体は毒性がなく、袋の中の空気中の酸素と置換することで、低酸素状態となり、窒息します。

遺書も見つかっており、自身の故意の行為によるものと判断できますので、死因の種類については、9.自殺を選択します。



## E7 漂流死体

男性の遺体。平成X年4月10日午後8時頃、〇〇県△△市の海岸に漂着しているのを発見された。

着衣に乱れはなく、腐敗性変化もないことから、死後経過時間は比較的短いものと考えられた。左右手背に軽微な擦過傷が見られるが、目立った外傷はない。鼻口部から微細な白色の泡沫が流出する。解剖検査を行ったところ、病的な所見はなく、肺は水腫状で、気道内の泡沫が確認され、溺死と考えられた。死亡推定日時は発見同日午前8時頃と考えられた。

この場合に発行する書類、「死亡の原因」「死因の種類」の記載例を示します。

### 【適切な記載】

(14)	死亡の原因	(ア) 直接死因	溺 死	発病(発症)又は受傷から死亡までの期間	短時間
	◆1欄、2欄ともに死因の終末期の状態としての心不全、呼吸不全等は書かないでください	(イ) (ア)の原因		◆年、月、日等の単位で書いてください。ただし、1日未満の場合は、時、分等の単位で書いてください。 (例：1年、3か月、5時間20分)	
		(ウ) (イ)の原因			
		(エ) (ウ)の原因			
(15)	死因の種類	1 病死及び自然死 外因死 不慮の外因死 { 2 交通事故 3 転倒・転落 4 溺水 5 煙、火災及び火傷による傷害 } 6 窒息 7 中毒 8 その他 その他及び不詳の外因死 { 9 自殺 10 他殺 11 その他及び不詳の外因 } 12 不詳の死			
	外因死の追加事項	傷害が発生したとき ○平成X年4月10日 ○午後8時頃 傷害が発生したところの種類 1 住居 2 工場及び建築現場 3 道路 4 その他 (海中) 手段及び状況 海岸に漂着しているところを発見されたという。			

### 【解説】

死因は、溺死と考えられます。

「死亡したところ」は、このような場合、漂着した場所（この例では海岸）になり、住所の最後「（発見）」と付記します。

死因の種類については、警察の捜査結果をふまえて判断します。捜査の結果もふまえて判断できる場合にはその結果を選択します。死体検案では、外因による死亡であることは判断できても、事故（不慮の溺水）、自殺（入水）、他殺の区別については、判断できないことがあります。その場合の死因の種類は「11.その他及び不詳の外因」を選択します。

## E8 独居高齢者の死亡2

87歳の男性。平成X年9月10日午後、尋ねてきた近所の知人が、自宅で死亡しているのを発見した。約30年前から高血圧を指摘されており、降圧薬を処方されている。

警察への届出の後、死体検案を依頼された。損傷はなく、薬物の簡易検査も陰性で、検案所見から特に異状は見いだせなかった。死後画像検査（CT）にて、大脳基底核部右側に脳室に穿破する出血巣を確認した。警察も事件の可能性は無いと判断した。

この場合に発行する書類、「死亡の原因」「死因の種類」の記載例を示します。

### 【適切な記載】

(14)	死亡の原因	施設の名称		発病（発症）又は受傷から死亡までの期間 ◆年、月、日等の単位で書いてください ただし、1日未満の場合は、時、分等の単位で書いてください （例：1年3か月、5時間20分）	短時間（推定）
		(ア) 直接死因	脳内出血		
		(イ) (ア)の原因			
		(ウ) (イ)の原因			
		(エ) (ウ)の原因			
		直接には死因に関与しないが、(ア)の傷病経過に影響を及ぼした傷病名等	高血圧		約30年
	手術	① 有 2 有	部位及び主要所見	手術年月日	平成 年 月 日 昭和 年 月 日
	解剖	① 有 2 有	主要所見		
(15)	死因の種類	① 病死及び自然死 不慮の外因死 { 2 交通事故 3 転倒・転落 4 溺水 5 煙、火災及び火焔による傷害 } 6 窒息 7 中毒 8 その他 その他及び不詳の外因死 { 9 自殺 10 他殺 11 その他及び不詳の外因 } 12 不詳の死			
(16)	外因死の追加事項	傷害が発生したとき 平成・昭和 年 月 日 午前・午後 時 分 傷害が発生したところの種類 1 住居 2 工場及び建築現場 3 道路 4 その他 ( ) 手段及び状況	傷害が発生したところ 市 区 町村 都道府県		
(17)	生後1年未満で病死した場合の追加事項	出生時体重 グラム 妊娠・分娩時における母体の病歴又は異状 1 無 2 有 { } 3 不詳	単胎・多胎の別 1 単胎 2 多胎 ( 子中第 子 ) 母の生年月日 平成 年 月 日 昭和 年 月 日	妊娠週数 満 週 前回までの妊娠の結果 出生児 人 死産児 胎 （妊娠満22週以後に限る）	
(18)	その他特に付言すべきことがら	死後に行った頭部CT検査にて、右大脳基底核部から脳室に穿破する出血巣を確認した。			

### 【解説】

自宅で死亡発見された事例です。

警察への届出後に、検視が行われ、死後画像検査（CT）の結果、脳室穿破した脳内出血が確認された事例です。

現在の死亡診断書（死体検案書）には、死後画像検査についての項目はありませんが、もし記載するようでしたら、「その他特に付言すべきことがら」の項目に死後画像検査の所見を記載してもよいと思います。

## E9 独居者の死亡

56歳の男性。平成×年9月10日午後、尋ねてきた知人が、自宅室内で死亡しているのを発見した。普段からよく酒を飲んでおり、室内には酒の空き瓶が散乱している。約10年前にウイルス性の慢性肝炎と肝硬変を指摘されていたが、そのまま放置していたという。

警察への届出の後、死体検案を依頼された。やせており、皮膚がやや黄染し、損傷はない。腹部が膨隆し、波動を触れる。腹腔穿刺にて黄色の腹水を吸引した。警察も事件の可能性はないと判断した。

この場合に発行する書類、「死亡の原因」「死因の種類」の記載例を示します。

### 【適切な記載】

		施設 の 名 称				
(14)	死亡の原因	(ア) 直接死因	肝硬変		不詳	
		(イ) (ア) の原因			発病（発症） 又は受傷から死亡までの期間	
		(ウ) (イ) の原因			◆年、月、日等の単位で書いてください ただし、1日未満の場合は、時、分等の単位で書いてください (例：1年3か月、5時間20分)	
		(エ) (ウ) の原因				
		直接には死因に関係しないが1層の傷病経過に影響を及ぼした傷病名等				
(15)	死因の種類	手術	①無 2有	部位及び主要所見	手術年月日	平成 昭和 年 月 日
		解剖	①無 2有	主要所見		
(16)	外因死の追加事項	①病死及び自然死 外因死 不慮の外因死 { 2交通事故 3転倒・転落 4溺水 5煙、火災及び火焔による傷害 } 6窒息 7中毒 8その他 その他及び不詳の外因死 { 9自殺 10他殺 11その他及び不詳の外因 } 12不詳の死				
		傷害が発生したとき	平成・昭和 年 月 日 午前・午後 時 分	傷害が発生したところ	都道府県	市 区 町村
		傷害が発生したところの種類	1住居 2工場及び建築現場 3道路 4その他 ( )			
		手段及び状況				

### 【解説】

自宅で死亡発見された事例です。

警察への届出後に、検視が行われ、既往歴に関する情報や、検案時の穿刺の結果をふまえ、肝硬変と確認された事例です。

記載方法もいくつかあり、死亡の原因欄には（ア）に肝不全（推定）、（イ）に肝硬変でもよいと思います。

## E10 交通事故

75歳の男性。平成X年4月10日午前5時15分頃、〇〇県△△市の道路を横断中にトラックにはねられた。

事故直後から意識はなく、心肺停止状態で病院に搬送され、心肺蘇生術に反応なく死亡が確認された。頭蓋の粉碎骨折及び肋骨の多発骨折があり、CTでは気脳症、クモ膜下出血と血胸が確認された。事故直後に現場で死亡したものと考えられた。

この場合に発行する書類、「死亡の原因」「死因の種類」の記載例を示します。

### 【適切な記載】

(14)	死亡の原因	施設の名 称		発病(発症)又は受傷から死亡までの期間	短時間 短時間
		(ア) 直接死因	外傷性クモ膜下出血		
		(イ) (ア)の原因	頭部打撲		
		(ウ) (イ)の原因			
		(エ) (ウ)の原因			
(15)	死因の種類	1 病死及び自然死 2 交通事故 3 転倒・転落 4 溺水 5 煙、火災及び火焔による傷害 6 窒息 7 中毒 8 その他 9 自殺 10 他殺 11 その他及び不詳の外因死 12 不詳の死			
		1 病死及び自然死 2 交通事故 3 転倒・転落 4 溺水 5 煙、火災及び火焔による傷害 6 窒息 7 中毒 8 その他 9 自殺 10 他殺 11 その他及び不詳の外因死 12 不詳の死			
		1 病死及び自然死 2 交通事故 3 転倒・転落 4 溺水 5 煙、火災及び火焔による傷害 6 窒息 7 中毒 8 その他 9 自殺 10 他殺 11 その他及び不詳の外因死 12 不詳の死			
(16)	外 因 死 の 追 加 事 項	傷害が発生したとき		傷害が発生したところ	
		平成 X 年 4 月 10 日 午前 5 時 15 分 頃		〇〇 県 △△ 市 〇〇 区 〇〇 町	
◆伝聞又は確定情報の場合でも書いてください					
手段及び状況 道路を横断中にトラックにはねられたという。					
(17)	生後1年未満で病死した場合の追加事項	出生時体重		妊娠週数	
		グラム		満 週	
(18)	その他特に付言すべきことがら	単胎・多胎の別		母の生年月日	
		1 単胎 2 多胎 ( 子中第 子 )		平成 年 月 日 昭和 年 月 日	
病院に搬送されたが、蘇生処置に反応なく、死亡が確認された。					

### 【解説】

交通事故による死因はその損傷状態によると考えられますが、本事例では、頭部打撲による外傷性クモ膜下出血と考えられます。

事故の状況については、「外因死の追加事項」の項目に記載します。病院搬送後の状態については、特に項目はありませんが、もし記載するようでしたら、「その他特に付言すべきことがら」の項目に簡潔に記載してもよいと思います。



## E11 縊死

58歳の男性。X年4月10日午後5時頃、自宅のクローゼットにネクタイを掛けて首を吊っているのを発見された。

遺体の頸部には索溝があり、前頸部から左右側頸部上方に向かっていた。

室内から遺書が見つかり、警察の捜査結果から自殺と判断された。10日は朝食後、家族は外出しており、一人で家にいたという。死後硬直や体温の変化から死亡推定時刻は午前11時頃と考えられた。

この場合に発行する書類、「死亡の原因」「死因の種類」の記載例を示します。

### 【適切な記載】

		施設 の 名 称			
(14)	死亡の原因	(ア) 直接死因	縊 死		短時間
		(イ) (ア) の原因			発病（発症）又は受傷から死亡までの期間
		(ウ) (イ) の原因			◆年、月、日等の単位で書いてください。ただし、1日未満の場合は、時、分等の単位で書いてください。 (例：1年3か月、5時間20分)
		(エ) (ウ) の原因			
		目	直接には死因に関与しないが1欄の疾病経過に影響を及ぼした傷病名等		
(15)	死因の種類	手術	①無 2有	部位及び主要所見	手術年月日 平成 年 月 日
		解剖	①無 2有	主要所見	
(16)	外因死の追加事項	1病死及び自然死 不慮の外因死 { 2交通事故 3転倒・転落 4溺水 5煙、火災及び火焔による傷害 } 外因死 { 6窒息 7中毒 8その他 } その他及び不詳の外因死 ⑨自殺 10他殺 11その他及び不詳の外因   12不詳の死			
		傷害が発生したとき	平成 昭和 X 年 4 月 10 日 午前 午後 11 時 頃 分		傷害が発生したところ
		傷害が発生したところの種別	①居 2工場及び建築現場 3道路 4その他 ( )		△△市 〇〇 区 〇〇 町村
		◆伝聞又は確定情報の場合でも書いてください 手段及び状況 自宅のクローゼットにネクタイを掛けて首をつっていたという。			

### 【解説】

本文からは、死因は「縊死」、死因の種類は「9.自殺」と判断できます。

死亡時刻の推定は、体温の変化、死後硬直といった死体現象のみならず、目撃情報なども勘案し、総合的に判断する必要があります。

## E12 溺水後の低酸素脳症

5歳の男児。昼食後、自宅の周りで遊んでいたが、姿が見えないので探していたところ、6月5日午後3時50分頃、池に浮いているのを発見された。心肺停止状態で病院に搬送され、病院での心肺蘇生術により心拍は再開したが、意識は回復せず、2日後に低酸素脳症で死亡した。

警察に届出し、検視を受けた。捜査の結果、6月5日午後3時30分頃に誤って池に転落したものと推定された。また、第三者の介在などもないと判断された。

この場合に発行する書類、「死亡の原因」「死因の種類」の記載例を示します。

### 【適切な記載】

(14)	死亡の原因	(ア) 直接死因	低酸素脳症	発病(発症)又は受傷から死亡までの期間	約2日	
		(イ) (ア)の原因	溺 水		約2日	
		(ウ) (イ)の原因		◆年、月、日等の単位で書いてください。ただし、1日未満の場合は、時、分等の単位で書いてください。(例: 1年 3か月 5時間 30分)		
		(エ) (ウ)の原因				
		表層には死因に関連しないが、死因の発現経過に影響を及ぼした傷病名等				
(15)	死因の種類	手術	① 2有	部位及び主要所見	手術年月日	平成 年 月 日
		解剖	① 2有	主要所見		
(16)	死因の追記事項	1 病死及び自然死	不慮の死因			
		2 交通事故 3 転倒・転落 ④ 溺水 5 煙、火災及び火傷による傷害 6 窒息 7 中毒 8 その他 9 自殺 10 他殺 11 その他及び不詳の死因 12 不詳の死				
(17)	死因の追記事項	傷害が発生したとき	④ 昭和 X 年 6 月 5 日 午前 ④ 3 時 30 分頃	傷害が発生したところ	○ ○ 都道府県 ④ 区 町村	
		傷害が発生したところの種類	1 住居 2 工場及び建築現場 3 道路 ④ その他( 池 )	△ △ ④ 都 町村		
(18)	死因の追記事項	◆伝聞又は確定情報の場合でも書いてください	手段及び状況 池に浮いているのを発見された。誤って転落したと思われる。			
		その他特に付言すべきことから	心肺停止状態で病院に搬送され、心拍は一旦再開し、治療を受けていたが死亡した。			

### 【解説】

池に浮いているのを発見され、一旦心拍が再開したものの、死亡に至った事例であり、異状死の届け出が必要です。

検視の際に、治療を担当した主治医に立ち会いと書類の発行を求められることもありますが、その場合には、発行する書類は「死亡診断書」になります。

治療担当医以外が検案する場合は、「死体検案書」になります。

死因の種類は、警察の担当者の報告もふまえ、「4.不慮の溺水」となります。

## E13 自転車の転落

62歳の男性。早朝、水のない側溝内に自転車ごと転落・死亡しているのを発見された。前日の平成X年12月2日午後8時40分頃に地区の忘年会が終了し、自転車で2次会に向かうところまでは目撃されているが、2次会には参加しておらず、その後の足取りは不明である。多少飲酒していたようである。

頭蓋骨の粉碎骨折があり、体温や死後硬直の状態から、12月2日午後9時頃に、転落、死亡したものと考えられた。

この場合に発行する書類、「死亡の原因」「死因の種類」の記載例を示します。

### 【適切な記載】

(14)	死亡の原因	施設の名称		発病(発症)又は受傷から死亡までの期間 ◆年、月、日等の単位で書いてください。ただし、1日未満の場合は、時、分等の単位で書いてください。 (例：1年3か月、5時間20分)	短時間 短時間
		(ア) 直接死因	頭蓋内損傷(推定)		
		(イ) (ア)の原因	頭部打撲		
		(ウ) (イ)の原因			
		(エ) (ウ)の原因			
目	直接には死因に関与しないが1層の傷病経過に影響を及ぼした傷病名等				
	手術	①無 2有	部位及び主要所見	手術年月日	平成 昭和 年 月 日
解剖	①無 2有	主要所見			
	(15)	死因の種類	1 病死及び自然死 不慮の外因死 ②交通事故 3 転倒・転落 4 溺水 5 煙、火災及び火焔による傷害 外因死 ⑥窒息 7 中毒 8 その他 その他及び不詳の外因死 9 自殺 10 他殺 11 その他及び不詳の外因 12 不詳の死		
(16)			外因死の追加事項	傷害が発生したとき	平成 昭和 X 年 12 月 2 日 午前・午後 9 時 頃
	傷害が発生したところの種類	1 住居 2 工場及び建築現場 3 道路 ④ その他(側溝)		手段及び状況	側溝内に自転車ごと転落しているのを発見されたという。

### 【解説】

側溝に自転車ごと転落したと考えられる事例です。

直接死因の(ア)は、遺体の検案のみでの書類作成の場合を想定しています。近年では死後画像検査を行う機会も多く、詳細な損傷が判明した場合は(例えば、「脳挫傷」など)、その記載が好ましいと思います。

死因の種類については、側溝への転落ですが、交通機関(自転車)の利用中の死亡の場合には、「交通事故」に分類されます。

## E14 火災

73歳の男性。平成X年10月25日午後11時頃、自宅から出火。鎮火後に焼け跡から発見された。全身は強く焼ける。穿刺により採取した血液の一酸化炭素ヘモグロビン飽和度は45%であった。解剖が行われ、気管内には多量の煤がみられた。なお、火災の状況は現在調査中で、原因は判然としない。

この場合に発行する書類、「死亡の原因」「死因の種類」の記載例を示します。

### 【適切な記載】

		施設の名 称				
(14)	死亡の原因	(ア) 直接死因	焼 死	発病（発症） 又は受傷から死亡までの期間  ◆年、月、日等の単位で書いてください。ただし、1日未満の場合は、時、分等の単位で書いてください。 (例：1年3か月、5時間20分)	短時間	
		(イ) (ア) の原因				
		(ウ) (イ) の原因				
		(エ) (ウ) の原因				
	◆1欄では、最も死亡に影響を与えた傷病名を医学的因果関係の順で書いてください。 ◆1欄の傷病名の記載は各欄一つにしてください。 ただし、欄が不足する場合は(エ)欄に残りを医学的因果関係の順で書いてください。	直接には死因に関係しないが1欄の傷病名に及ぼした傷病名等				
(15)	死 因 の 種 類	手術	① 2有	部位及び主要所見	手術年月日	平成 年 月 日 昭和 年 月 日
		解剖	1無 ②	主要所見 気管内に多量の煤を容れる。血液から高濃度の一酸化炭素ヘモグロビンを検出。		
(16)	外 国 死 の 追 加 事 項	1病死及び自然死 不慮の外因死 { 2交通事故 3転倒・転落 4溺水 5煙、火災及び火焔による傷害 } 6窒息 7中毒 8その他 その他及び不詳の外因死   9自殺 10他殺 ⑪その他及び不詳の外因   12不詳の死				
		傷害が発生したとき	平成X年 10月 25日 午前・午後 ⑫11時頃分		傷害が発生したところ	○ ○ 都道府県 △ △ 市 区 町 村 ⑬ 都 市 区 町 村
		傷害が発生したところの種類	⑭ 1居 2工場及び建築現場 3道路 4その他 ( )			
		手段及び状況 自宅の火災現場から鎮火後に発見された。				

### 【解説】

自宅の火災の鎮火後に発見された事例です。

多くは解剖検査の対象となります。

この事例も、死因の種類は警察の捜査結果をふまえて判断します。捜査の結果もふまえ、判断できる場合にはその結果を選択します。外因による死亡であることは判断できても、事故（火災）、自殺（焼身）、他殺（放火など）の区別については、判断できないことがあります。その場合の死因の種類は「11.その他及び不詳の外因」を選択します。

## 図1. 死因の種類

1 病死及び自然死・・・疾病による死亡、自然死（老衰）

### 外因死

#### 不慮の外因死（不慮の死亡）

- 2 交通事故・・・交通機関の関与による不慮の死亡
- 3 転倒・転落・・・転倒（同一平面）、転落による不慮の死亡
- 4 溺水・・・溺水による不慮の死亡
- 5 煙、火災及び火焰による傷害・・・火災、火焰による火傷や煙の吸入による不慮の死亡
- 6 窒息・・・窒息による不慮の死亡
- 7 中毒・・・薬物や有害物質による不慮の死亡
- 8 その他・・・異常な温度環境、感電や落下物などの事故、地震等の天災による不慮の死亡

#### その他および不詳の外因死

- 9 自殺・・・死亡者自身の故意の行為に基づく死亡
- 10 他殺・・・他人の加害による死亡
- 11 その他及び不詳の外因・・・外因死ではあるが不慮の外因死か否かの判別のつかない場合。刑の執行や戦争による死亡。

12 不詳の死・・・病死及び自然死か、外因死か不詳の場合

## 「死因の種類」の分類で、ややわかりにくい「その他」や「不詳」の区分

- ◎ 不慮の外因死の 「8 その他」は、  
不慮の外因死のうち、2 交通事故、3 転倒・転落、4 溺水、5 煙、火災及び火焰による傷害、6 窒息、7 中毒、  
以外のものをいいます。  
・・・・・・・・・・異常な温度環境（熱中症、凍死）、感電や落下物などの事故、地震等の天災などを含みます。
- ◎ その他および不詳の外因死の 「11 その他及び不詳の外因」は、  
・・・・・・・・・・外因死ではあるが、不慮の事故、自殺、他殺の判別のつかない場合や、刑の執行や戦争による  
死亡なども含みます。
- ◎ 「12 不詳の死」は、  
・・・・・・・・・・病死及び自然死なのか、外因死なのか判断のできない場合に該当します。  
死後変化が高度であったり、白骨化した状態で発見された場合など。



## E15 火災による一酸化炭素中毒

56歳の男性。平成X年2月5日午後11時頃、雑居ビルで火災が発生した。火元の上の階の室内から、消火作業中の消防隊員に発見された。

心肺停止状態で病院に搬送されたが、蘇生処置に反応なく、死亡が確認された。気管内挿管時に、気道粘膜に煤の付着が確認された。

遺体の外表には熱による変化はなく、死斑が鮮紅色を呈する。一酸化炭素ヘモグロビン飽和度は72%である。

なお、現場検証の結果、火元はコンロの火の不始末と判断された。

この場合に発行する書類、「死亡の原因」「死因の種類」の記載例を示します。

### 【適切な記載】

		施設 の 名 称			
(14)	死亡の原因	(ア) 直接死因	一酸化炭素中毒		発病(発症)又は受傷から死亡までの期間  ◆年、月、日等の単位で書いてください ただし、1日未満の場合は、時、分等の単位で書いてください (例：1年3か月、5時間20分)
		(イ) (ア) の原因			
		(ウ) (イ) の原因			
		(エ) (ウ) の原因			
		表裏には死因に関係しないが1欄の備考欄に被害を及ぼした被害者等			
手段	① 2有	部位及び主要所見		手術年月日	平成 年 月 日
	① 2有	主要所見			
(15)	死因の種類	1病死及び自然死 外因死 不慮の外因死 2交通事故 3転倒・転落 4溺水 ⑤煙、火災及び火焔による傷害 6窒息 7中毒 8その他 その他及び不詳の外因死 9自殺 10他殺 11その他及び不詳の外因死 12不詳の死			
(16)	外因死の追加事項	被害が発生したとき	平成X年2月5日 午前・午後 ⑤11時頃分	被害が発生したところ	〇〇 都道府県 〇〇 区 〇〇 町村
		被害が発生したところの種類	1住居 2工場及び建築現場 3道路 ④その他(雑居ビル)	△△ 〇〇 都道府県 〇〇 区 〇〇 町村	
		手段及び状況 雑居ビルの火災現場から発見された。			

### 【解説】

死因は、火災に起因する一酸化炭素中毒と考えます。

この事例でも、死因の種類は警察の捜査結果をふまえて判断します。一酸化炭素中毒が直接死因で、原死因にもなりますが、不慮の火災に起因する事象であれば、死因の種類は「5.煙、火災及び火焔による傷害」を選択します。「6.中毒」と、選択に迷うことがあるかもしれません。

状況については、「外因死の追加事項」の項目に記載します。

このような事例の多くは解剖検査の対象になります。

## E16 転落

75歳の男性。平成X年11月10日午前10時45分頃、自宅の庭木の剪定をしていたが、はしごから誤って転落した。

転落の約1時間後に、庭で倒れて動けないところを家族がを見つけ、救急車で病院に搬送された。ショック状態で、検査の結果、右肋骨に多発骨折と、肺挫傷によると考えられる血気胸が確認された。

治療を行うも、状態が悪化し、搬送約2時間後に死亡した。

この場合に発行する書類、「死亡の原因」「死因の種類」の記載例を示します。

### 【適切な記載】

(14)	死亡の原因	施設の名 称			
		(ア) 直接死因	出血性ショック	発病（発症） 又は受傷から死亡までの期間	不詳
		(イ) (ア) の原因	肺挫傷（推定）		約3時間
		(ウ) (イ) の原因	多発肋骨骨折		約3時間
		(エ) (ウ) の原因	胸部打撲		約3時間
◆1欄、2欄ともに疾患の終末期の状態としての心不全、呼吸不全等は書かないでください		◆1欄では、最も死亡に影響を与えた傷病名を医学的因果関係の順番で書いてください		◆1欄の傷病名の記載は各欄一つにしてください ただし、欄が不足する場合は(エ)欄に残りを医学的因果関係の順番で書いてください	
手 術		部位及び主要所見	手術年月日	平成 年 月 日	昭和 年 月 日
解 剖		主要所見			
(15)	死 因 の 種 類	1 病死及び自然死 2 交通事故 3 転落 4 溺水 5 煙、火災及び火焔による傷害 6 窒息 7 中毒 8 その他 9 自殺 10 他殺 11 その他及び不詳の外因死 12 不詳の死			
(16)	外 因 死 の 追 加 事 項	傷害が発生したとき 平成X年 11月 10日 午後10時45分頃	傷害が発生したところ 〇〇 〇〇 〇〇 △△ 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇	都道府県 市町村 区 町 村	
◆伝聞又は推定情報の場合でも書いてください		手段及び状況 植木の剪定中に、はしごから転落したという。			

### 【解説】

本事例では、転落の際に胸部を打撲したことによる肺挫傷に起因した死亡と考えられます。

事故の状況については、「外因死の追加事項」の項目に記載します。病院搬送後の状態については、特に項目はありませんが、もし記載するようでしたら、「その他特に付言すべきことから」の項目に簡潔に記載してもよいと思います。



## E17 横隔膜ヘルニア

0歳の男児。母は今回の出産での検診の受診なし。平成X年11月10日午前10時45分に経膈分娩にて出生。出生直後からチアノーゼの出現と呼吸状態の悪化があり、高次医療機関に搬送したが、搬送途中（午後0時30分頃）で心肺停止になり、搬送先の病院での蘇生処置に反応なく死亡した。

X線検査の結果、胸部X線写真で胸腔内に腸管ガスが見られることから、先天性横隔膜ヘルニアと肺の低形成が疑われた。

この場合に発行する書類、「死亡の原因」「死因の種類」の記載例を示します。

### 【適切な記載】

(14)	死亡の原因	施設の名 称			
		(ア) 直接死因	呼吸不全		約1時間45分
		(イ) (ア)の原因	肺低形成	発病（発症）又は受傷から死亡までの期間	不詳
		(ウ) (イ)の原因	先天性横隔膜ヘルニア（疑い）	◆年、月、日等の単位で書いてください。ただし、1日未満の場合は、時、分等の単位で書いてください（例：1年3か月、5時間20分）	不詳
		(エ) (ウ)の原因			
(15)	死因の種類	直接には死因に関与しないが1層の傷病経過に影響を及ぼした傷病名等			
		手術	① 2有	部位及び主要所見	手術年月日
(16)	外 因 死 の追加事項	解剖	① 2有	主要所見	
		傷害が発生したとき	平成・昭和 年 月 日 午前・午後 時 分	傷害が発生したところ	都道府県 市 区 町村
		◆伝聞又は確定情報の場合でも書いてください			
		手段及び状況			

### 【解説】

本事例では、先天性横隔膜ヘルニアに起因する死亡と考えられます。

このような事例では、情報が不十分な場合には分娩を行った医療機関の過誤が疑われることもあると思います。死因の正確な判断のためにも、解剖（病理解剖や法医学解剖）を含む詳細な検査が必要なこともありますので、詳細な調査への対応や届出も考慮する必要があります。

## E18 溺水

2歳の男児。母と生後2か月の男児と入浴中。2か月男児の世話のため、母親が目を見失った際に、浴槽に浮いているのを発見された（平成X年11月10日午後7時45分）。救急車で病院に搬送したが、死亡が確認された。

解剖検査では肺の膨隆と水腫、気管内の泡沫が確認された。

この場合に発行する書類、「死亡の原因」「死因の種類」の記載例を示します。

### 【適切な記載】

(14)	施設 の 名 称					
	死亡の原因	(ア) 直接死因	溺死	短時間		
	◆1欄、2欄ともに死因の終末期の状態としての心不全、呼吸不全等は書かないでください	(イ) (ア) の原因		発病（発症）又は受傷から死亡までの期間		
		(ウ) (イ) の原因		◆年、月、日等の単位で書いてください。ただし、1日未満の場合は、時、分等の単位で書いてください。（例：1年3か月、5時間20分）		
		(エ) (ウ) の原因				
◆1欄では、最も死亡に影響を与えた傷病名を医学的因果関係の順で書いてください	◆1欄の傷病名の記載は各欄一つにしてください	手術	① 2有	部位及び主要所見	手術年月日	平成 年 月 日 昭和 年 月 日
◆1欄の傷病名の記載は各欄一つにしてください	◆1欄の傷病名の記載は各欄一つにしてください	解剖	1無 ②有	主要所見	肺は膨隆し、水腫状。気管内に泡沫を容れる。	
(15)	死因の種類		1病死及び自然死 2交通事故 3転倒・転落 ④水 5煙、火災及び火焔による傷害 6窒息 7中毒 8その他 9自殺 10他殺 11その他及び不詳の死 12不詳の死			
(16)	外因死の追加事項		傷害が発生したとき 平成X年 11月 10日 午後 ⑤7時 40分頃 傷害が発生したところの種類 ⑥1居室 2工場及び建築現場 3道路 4その他（ ） 手段及び状況		傷害が発生したところ 〇〇 区 〇〇 町 △△ 〇 区 〇 町	
	◆信頼又は確定情報の場合でも書いてください 入浴させていて目を離した際に、浴槽に浮いているのを発見されたという。					

### 【解説】

本事例では、溺水による死亡と考えられます。このような事例の多くは法医解剖になると思われますが、事例として提示させていただきます。

病院搬送後の状態については、特に項目はありませんが、もし記載するようでしたら、「その他特に付言すべきことがら」の項目に「病院に搬送され治療を受けたが、反応なく死亡が確認された」のように、簡潔に記載してもよいと思います。

死因の種類については、警察の捜査結果もふまえて判断します。不慮の事故と判断できる場合でしたら、「4.溺水」を選択しますし、仮に虐待などの可能性が否定できないようでしたら、「11.その他及び不詳の外因」を選択することもあります。

## E19 異物の誤嚥

4歳の男児。自宅でおやつのゼリーを食べていて、急に苦しみだし、その後ぐったりした。（平成X年5月10日午後3時15分頃）母親が異変に気づき救急車を要請し、病院に搬送した。心肺停止状態で病院に搬入され、喉頭展開した際に、喉頭入口部に塊状のゼリーが陥入しており、吸引除去された。その後、心拍は再開したものの、意識の回復はなく、5月10日午後8時20分に死亡した。

この場合に発行する書類、「死亡の原因」「死因の種類」の記載例を示します。

### 【適切な記載】

		施設 の 名 称			
(14)	死亡の原因	(ア) 直接死因	低酸素脳症	発病（発症）又は受傷から死亡までの期間  ◆年、月、日等の単位で書いてください ただし、1日未満の場合は、時、分等の単位で書いてください （例：1年3か月、5時間20分）	約5時間
		(イ) (ア) の原因	窒息		約5時間
		(ウ) (イ) の原因	食物誤嚥		約5時間
		(エ) (ウ) の原因			
	◆1欄、2欄ともに死因の終末期の状態としての心不全、呼吸不全等は書かないでください ◆1欄では、最も死亡に影響を与えた傷病名を医学的因果関係の順番で書いてください ◆1欄の傷病名の記載は各欄一つにしてください ただし、欄が不足する場合は（エ）欄に残りを医学的因果関係の順番で書いてください	目	表層には死因に関連しないが1欄の傷病経過に影響を及ぼした傷病名等		
(15)	死因の種類	手術	① 2有	部位及び主要所見	手術年月日 平成 昭和 年 月 日
		解剖	① 2有	主要所見	
(16)	外 国 死 の 追 加 事 項	1 病死及び自然死 外因死 不慮の外因死 ② 窒息 7 中毒 8 その他 その他及び不詳の外因死 9 自殺 10 他殺 11 その他及び不詳の外因死 12 不詳の死			
		傷害が発生したとき 平成 昭和 X 年 5 月 10 日 午前 午後 ③ 3 時 15 分 頃	傷害が発生したところ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿	傷害が発生したところ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿	
		◆伝聞又は推定情報の場合でも書いてください 手段及び状況 おやつを食べていて、急に様子がおかしくなったという。			

### 【解説】

本事例では、食物誤嚥後の窒息に起因する低酸素脳症と考えられます。

やや経過のあるこのような事例では、一連の事象の起因となった事項（この場合には、食物の誤嚥＝原死因）が死因の種類を判断する上で重要です。

死亡の直接の原因である直接死因のみならず、原死因を考慮した判断をお願いします。

## E20 死後変化が著明

68歳の男性。独居。平成X年7月10日午後3時、室内で死亡しているのを発見された。遺体の死後変化が著明で、外観から身元の特定は困難であり、DNA検査を行うこととなった。死体を検案したところ、外傷による変化はないと思われた。死後経過はおおよそ2か月前後と考えられた。なお、既往歴に関して、警察の捜査では判然としなかった。

この場合に発行する書類、「死亡の原因」「死因の種類」の記載例を示します。

### 【適切な記載】

(14)	死亡の原因	施設の名 称		不詳(死後変化高度のため)	不詳	発病(発症)又は受傷から死亡までの期間	◆年、月、日等の単位で書いてください ただし、1日未満の場合は、時、分等の単位で書いてください (例：1年3か月、5時間20分)
		(ア) 直接死因					
		(イ) (ア)の原因					
		(ウ) (イ)の原因					
		(エ) (ウ)の原因					
(15)	死因の種類	1 病死及び自然死 不慮の外因死 { 2 交通事故 3 転倒・転落 4 溺水 5 煙、火災及び火焔による傷害 } 外因死 { 6 窒息 7 中毒 8 その他 } その他及び不詳の外因死 { 9 自殺 10 他殺 11 その他及び不詳の外因 } ⑬ 不詳の死					
(16)	外因死の追加事項	傷害が発生したとき		平成・昭和 年 月 日 午前・午後 時 分	傷害が発生したところ	都道府県	市 区 町 村
		傷害が発生したところの種別 1 住居 2 工場及び建築現場 3 道路 4 その他 ( )					
◆伝聞又は確定情報の場合でも書いてください							
(17)	生後1年未満で病死した場合の追加事項	出生時体重		単胎・多胎の別		妊娠週数	
		グラム		1 単胎 2 多胎 ( 子中第 子 )		満 週	
(18)	その他特に付言すべきことがら	妊娠・分娩時における母体の病歴又は異状		母の生年月日		前回までの妊娠の結果	
		1 無 2 有 [ ] 3 不詳		平成 年 月 日 昭和		出生児 人 死産児 胎 (妊娠満22週以後に限る)	
死後変化が著明なため、詳細な死因の判断が困難である。							

### 【解説】

本事例では、著明な死後変化のため、死因の判断は困難です。このような事例では、多くは法医学解剖になると思われますが、事例として提示させていただきます。

「11.その他及び不詳の外因死」は、外因死であるが、不慮、自殺、他殺の区別がつかないという点で死因が「不詳」のものを、「12.不詳の死」は、内因死、外因死の区別がつかないという点で「不詳」のものを、死因の種類として選択します。

「12.不詳の死」の場合は、「その他特に付言すべきことがら」の項目に「死後変化が著明で、死因の判断は困難である」のように、簡潔に記載をお願いします。



## E21 熱中症

16歳の男性。X年8月10日午前11時頃、連日の猛暑で、部活動の野球の練習中、炎天下で意識がもうろうとなり、病院に搬送された。

病院に搬送時、体温が41.8℃、意識レベルがJCS 200、輸液と冷却を行ったが意識状態が悪化し、約8時間後の午後7時10分に死亡した。

基礎疾患はなく、熱中症と考えられた。

この場合に発行する書類、「死亡の原因」「死因の種類」の記載例を示します。

### 【適切な記載】

(14)	死亡の原因	施設の名義		約8時間		
		(ア) 直接死因	熱中症			
		(イ) (ア)の原因	発病(発症)又は受傷から死亡までの期間			
		(ウ) (イ)の原因	◆年、月、日等の単位で書いてください。ただし、1日未満の場合は、時、分等の単位で書いてください。 (例：1年3か月、5時間20分)			
◆1欄では、最も死亡に影響を与えた傷病名を医学的因果関係の順で書いてください。 ◆1欄の傷病名の記載は各欄一つにしてください。 ただし、欄が不足する場合は(エ)欄に残りを医学的因果関係の順で書いてください。	I	(エ) (ウ)の原因				
		直接には死因に関与しないが1欄の傷病経過に影響を及ぼした傷病名等				
		手術	① 2有	部位及び主要所見	手術年月日	平成 年 月 日 昭和 年 月 日
		解剖	① 2有	主要所見		
(15)	死因の種類	1 病死及び自然死 不慮の死因死 2 交通事故 3 転倒・転落 4 溺水 5 煙、火災及び火傷による傷害 6 窒息 7 中毒 8 その他 その他及び不詳の死因死 9 自殺 10 他殺 11 その他及び不詳の死因 12 不詳の死				
(16)	死因の追加事項	傷害が発生したとき	昭和 X 年 8 月 10 日 午後 11 時 頃	傷害が発生したところ	〇〇 都道府県 △△ 市区町村	
		傷害が発生したところの種別	1 住居 2 工場及び建築現場 3 道路 ④ その他(グラウンド)			
		◆伝聞又は確定情報の場合でも書いてください				
		手段及び状況				
		炎天下で野球の練習中に、様子がおかしくなったという。				

(17)	生後1年未満で病死した場合の追加事項	出生時体重	単胎・多胎の別	妊娠週数
		グラム	1 単胎 2 多胎 (子中第 子)	満 週
(18)	その他特に付言すべきことから	妊娠・分娩時における母体の病歴又は異状	母の生年月日	前回までの妊娠の結果
		1 無 2 有 3 不詳	平成 年 月 日 昭和 年 月 日	出生児 人胎 死産児 胎 (妊娠満22週以後に限る)
		病院に搬送され、治療を受けていたが死亡した。		

### 【解説】

死因は熱中症による死亡と考えられます。

死因の種類は、不慮の熱中症の場合は「8. その他」を選択します。

死因については、臨床検査所見のみならず、発症前の状況等の情報なども勘案し、総合的に判断する必要があります。

このような事例では、死因の正確な判断のために、法医学解剖を含む詳細な検査が必要なことが多いと思います。(異状死の届出の対象)

## E22 パラコート中毒

65歳の男性。6月5日午後3時50分頃、自宅で倒れているのを発見され、病院に搬送された。口の周りに緑色の変色があり、本人が自殺目的で午後3時頃にパラコート製剤を摂取したことを医師に話した。また、尿のパラコート定性試験も陽性を示しており、中毒に対する治療が開始された。入院後、意識状態の低下はないものの、入院約1週間目から血液ガスの状態が徐々に悪化し、肺線維症と診断された。その後も呼吸機能は悪化し、6月27日午後1時15分に永眠された。

この場合に発行する書類、「死亡の原因」「死因の種類」の記載例を示します。

### 【適切な記載】

(14)	死亡の原因	施設 の 名 称		発病（発症） 又は受傷から死亡までの期間	約2週間  約3週間
		(ア) 直接死因	肺線維症		
		(イ) (ア)の原因	パラコート中毒		
		(ウ) (イ)の原因			
		(エ) (ウ)の原因			
◆1欄では、最も死亡に影響を与えた傷病名を医学的因果関係の順番で書いてください	◆1欄の傷病名の記載は各欄一つにしてください	◆1欄では、最も死亡に影響を与えた傷病名を医学的因果関係の順番で書いてください	◆1欄の傷病名の記載は各欄一つにしてください	◆年、月、日等の単位で書いてください。ただし、1日未満の場合は、時、分等の単位で書いてください。 (例：1年3か月、5時間20分)	
(15)	死 因 の 種 類	1 病死及び自然死 不慮の外因死 { 2 交通事故 3 転倒・転落 4 溺水 5 煙、火災及び火端による傷害 } 外因死 { 6 窒息 7 中毒 8 その他 } その他及び不詳の外因死 { 9 自殺 10 他殺 11 その他及び不詳の外因 } 12 不詳の死	手 術	部位及び主要所見	手術年月日
(16)	外 因 死 の 追 加 事 項	傷害が発生したとき	平成 昭和 X 年 6 月 5 日 午後 午前 時 分	傷害が発生したところ	○ ○ 都道府県 △ △ 区 ● 町村
		傷害が発生したところの種類	1 居 2 工場及び建築現場 3 道路 4 その他	手段及び状況	パラコートを摂取し、倒れているところを発見された。

### 【解説】

自殺目的でパラコート製剤を摂取し、治療を受けたものの死亡に至った事例であり、異状死の届け出が必要です。

検視の際に、治療を担当した主治医に立ち会いと書類の発行を求められることもありますが、その場合には、発行する書類は「死亡診断書」になります。

治療担当医以外が検案する場合は、「死体検案書」になります。

死因の種類は、自殺の手段としてのパラコート摂取なので、「9. 自殺」となります。

## E23 泥酔

32歳の男性。朝、室内で死亡しているのを発見された。警察の検視が行われ、遺体の周囲には嘔吐の痕跡が見られた。前日の平成X年12月2日に自宅で友人らと酒を飲んでいたという。友人の話では、死者は普段より多く飲酒し、寝込んでしまったので、友人らはそのまま布団をかけて片づけをして帰ったという。

血液からは4.0mg/mlのエタノールが検出され、高度の酩酊状態であったと考えられる。口の中にも食物残渣が多く残っており、窒息の際にみられる溢血点の出現もあり、吐瀉物を吸引した可能性が考えられた。

解剖検査で、食物残渣での気道閉塞が確認された。また、その後の捜査でも状況に矛盾ないことが確認された。

この場合に発行する書類、「死亡の原因」「死因の種類」の記載例を示します。

### 【適切な記載】

		施設 の 名 称			
(14)	死亡の原因	(ア) 直接死因	窒息	発病（発症） 又は受傷から死亡までの期間  ◆年、月、日等の単位で書いてください。 ただし、1日未満の場合は、時、分等の単位で書いてください。 （例：1年3か月、5時間20分）	短時間
		(イ) (ア) の原因	吐物誤嚥		短時間
		(ウ) (イ) の原因	急性アルコール中毒		不詳
		(エ) (ウ) の原因			
		手 術		手術年月日 平成 年 月 日	
		解剖		昭和 年 月 日	
		部位及び主要所見			
		1無 2有			
		主要所見			
		1無 2有		気管内に吐物を容れる。血液から高濃度のエタノールを検出。	
(15)	死因の種類	1病死及び自然死 2交通事故 3転倒・転落 4溺水 5煙、火災及び火場による傷害 6窒息 7中毒 8その他 9自殺 10他殺 11その他及び不詳の外因 12不詳の死			
(16)	外 因 死 の 追 加 事 項	傷害が発生したとき	平成 昭和 X 年 12月 3 日 午後 2 時 頃	傷害が発生したとき	〇〇 都道府県 〇〇 区 〇〇 町村
		傷害が発生したところの種類	1居 2工場及び建築現場 3道路 4その他	〇〇 〇〇 〇〇 〇〇	〇〇 〇〇 〇〇 〇〇
		手段及び状況			
		自宅で飲酒后、死亡しているのを発見されたという。			

### 【解説】

泥酔後に吐物を誤嚥したと考えられる事例です。状況により解剖検査の対象となります。

この事例も、直接死因は窒息ですが、一連の事象の起因となった事項（この場合には、高度酩酊状態＝原死因）が死因の種類を判断する上で重要です。

死因の種類は警察の捜査結果をふまえて判断します。捜査の結果もふまえ、判断できる場合にはその結果を選択します。判断できない場合の死因の種類は「11.その他及び不詳の外因」になります。

## E24 自宅での死亡

82歳の男性。独居。5月下旬、自宅室内で死亡しているのを発見された。肺気腫の診断を受け、約15年前から在宅酸素療法を受けている。警察官による検視が行われ、犯罪の可能性はないと判断された。

遺体の外表には損傷はなく、死後画像検査（CT）が実施された。肺の気腫状変化以外に明らかな所見はなく、死因は肺気腫に起因する慢性呼吸不全と考えた。

この場合に発行する書類、「死亡の原因」「死因の種類」の記載例を示します。

### 【適切な記載】

		施設 の 名 称			
(14)	死亡の原因	(ア) 直接死因	慢性呼吸不全		約15年
		(イ) (ア) の原因	肺気腫(推定)		不詳
		(ウ) (イ) の原因			
		(エ) (ウ) の原因			
		直後には死因に関係しないが1欄の傷病経過に影響を及ぼした傷病名等			
(15)	死因の種類	① 病死及び自然死	発病(発症)又は受傷から死亡までの期間 ◆年、月、日等の単位で書いてください。1日未満の場合は、時、分等の単位で書いてください。 (例: 1年3か月、5時間20分)		
		② 死因不明 ③ 死因不明 ④ 死因不明 ⑤ 死因不明 ⑥ 死因不明 ⑦ 死因不明 ⑧ 死因不明 ⑨ 死因不明 ⑩ 死因不明 ⑪ 死因不明 ⑫ 死因不明			
(16)	外因死の追加事項	手術	① 2有	部位及び主要所見	手術年月日 平成 昭和 年 月 日
		解剖	① 2有	主要所見	
		① 死及び自然死 ② 交通事故 ③ 転倒・転落 ④ 溺水 ⑤ 煙、火災及び火焔による傷害 ⑥ 窒息 ⑦ 中毒 ⑧ その他 ⑨ 自殺 ⑩ 他殺 ⑪ その他及び不詳の外因 ⑫ 不詳の死			
(16)	外因死の追加事項	傷害が発生したとき	平成・昭和 年 月 日 午前・午後 時 分	傷害が発生したところ	都道府県 市区町村
		傷害が発生したところの種類	1 住居 2 工場及び建築現場 3 道路 4 その他 ( )		
		手段及び状況			

### 【解説】

本事例では、肺気腫に起因する慢性呼吸不全による死亡と推定されます。

警察の検視では犯罪に関連する死亡か否かが重視されますが、死因の正確な判断のためにも、可能な限り生前の既往歴などを調べ、死後画像診断の結果も踏まえ判断することが必要と思います。



## E25 熱傷

68歳の女性。平成X年6月10日午後0時頃、自宅で調理中に着衣に着火し、熱傷を負った。病院に搬送されたが、Ⅱ度、Ⅲ度熱傷は全身の約55%に及んだ。治療によりショック期は離脱したが、入院1週間頃から感染の兆候が見られ、臨床的には敗血症の状態をきたし、6月28日午後5時25分に死亡した。

この場合に発行する書類、「死亡の原因」「死因の種類」の記載例を示します。

### 【適切な記載】

		施設 の 名 称			
(14)	死亡の原因	(ア) 直接死因	敗血症	発病（発症） 又は受傷から死亡までの期間	約10日
		(イ) (ア) の原因	全身熱傷		約18日
		(ウ) (イ) の原因			
		(エ) (ウ) の原因			
		直接には死因に関与しないが1療の傷病経過に影響を及ぼした傷病名等			
◆1療、2療ともに病歴の終末期の状態としての心不全、呼吸不全等は書かないでください					
◆1療では、最も死亡に影響を与えた傷病名を医学的因果関係の順番で書いてください					
◆1療の傷病名の記載は各欄一つにしてください					
ただし、欄が不足する場合は(エ)欄に残りを医学的因果関係の順番で書いてください					
(15)	死因の種類	手術	①無 2有	手術年月日	平成 年 月 日 昭和 年 月 日
		解剖	①無 2有	主要所見	
		1病死及び自然死 不慮の外因死 { 2交通事故 3転倒・転落 4溺水 ⑤火災及び火焔による傷害 } 外因死 { 6窒息 7中毒 8その他 } その他及び不詳の外因死 { 9自殺 10他殺 11その他及び不詳の外因 } 12不詳の死			
(16)	外因死の追加事項	傷害が発生したとき	平成 昭和 X 年 6 月 10 日 午前 午後 0 時 頃 分	傷害が発生したところ	○ ○ 都道府県 △ △ 市 区 町 村 ① 都 区 町 村
		傷害が発生したところの種類	①自宅 2工場及び建築現場 3道路 4その他 ( )		
◆伝聞又は確定情報の場合でも書いてください		手段及び状況 自宅で調理中に、着衣に火がついたという。			

### 【解説】

本事例では、熱傷に起因する敗血症が死因と考えられます。治療経過が比較的長い外因死例では、診療録を参考にするなど治療に当たった医師の意見を参考にすることも必要です。

直接死因は敗血症ですが、一連の事象の起因となった事項（この場合には、全身熱傷＝原死因）が死因の種類を判断する上で重要です。

死因の種類は警察の捜査結果をふまえて判断します。捜査の結果もふまえ、判断できる場合にはその結果を選択します。

## E26 遊泳中の死亡

32歳の男性。7月18日午後4時頃、友人と海水浴中、行方が分からなくなった。捜索したところ、行方不明になった場所の付近の海底に沈んでいるのを発見された。

遺体の外表には損傷はなく、鼻口部から白色の泡沫の流出が確認された。死後画像検査（CT）が実施され、くも膜下出血が確認された。既往症はなく、くも膜下出血を発症して溺水したものと考えた。解剖でも、溺水による肺水腫と、くも膜下出血が確認された。

この場合に発行する書類、「死亡の原因」「死因の種類」の記載例を示します。

### 【適切な記載】

(14)	死亡の原因	施設 の 名 称		発病（発症） 又は受傷から死亡までの期間  ◆年、月、日等の単位で書いてください。ただし、1日未満の場合は、時、分等の単位で書いてください。 (例：1年3か月、5時間30分)	短時間
		(ア) 直接死因	溺水		
		(イ) (ア) の原因	意識障害（推定）		
		(ウ) (イ) の原因	くも膜下出血		
		(エ) (ウ) の原因			
◆1欄では、最も死亡に影響を与えた傷病名を医学的因果関係の順番で書いてください。 ◆1欄の傷病名の記載は各欄一つにしてください。 ただし、欄が不足する場合は(エ)欄に残りを医学的因果関係の順番で書いてください。	目	直接には死因に関係しないが1欄の傷病経過に影響を及ぼした傷病名等			
	手術	① 2有	部位及び主要所見	手術年月日	平成 年 月 日 昭和 年 月 日
(15)	死因の種類	解剖	1無 ②有	主要所見 気管内に泡沫。肺は水腫状。脳底部に強いくも膜下出血があり、前交通動脈に破綻した動脈瘤。	
		① 病死及び自然死 ② 不慮の外因死 { 2交通事故 3転倒・転落 4溺水 5煙、火災及び火傷による傷害 } ③ 6窒息 7中毒 8その他 ④ その他及び不詳の外因死 { 9自殺 10他殺 11その他及び不詳の外因 } ⑤ 12不詳の死			
(16)	外因死の追加事項	傷害が発生したとき	①昭和 X年7月18日 午前②午後4時頃分	傷害が発生したところ	○ ○ 都道府県 △ △ 市町村 ③ 都 府 市 町 村
		傷害が発生したところの種類	1住居 2工場及び建築現場 3道路 ④その他 ( 海 )	手段及び状況	海水浴中に行方が分からなくなり、海中に沈んでいるのを発見されたという。

### 【解説】

この事例では、検査の結果、くも膜下出血に起因する溺水による死亡と判断されました。

死因の種類が「1. 病死及び自然死」の場合でも「死亡の原因」欄に損傷名等が記入された場合には、「外因死の追加事項」欄も外因の状況等の記載が求められていますので、可能な範囲で記載します。

もちろん、このような事例の場合は警察への届出は必要です。

## E27 肺炎

88歳の女性。約5年前に転倒し、左大腿骨近位部骨折をきたし、手術を受けた（Y年6月2日）。大腿骨の骨折は完治したが、筋力の低下もあり以降、ほぼ寝たきりの状態となった。

自宅で療養していたが、2週間ほど前から発熱と呼吸困難が出現し、病院に入院し治療を受けるも肺炎で死亡した。

この場合に発行する書類、「死亡の原因」「死因の種類」の記載例を示します。

### 【適切な記載】

		施設 の 名 称			
(14)	死亡の原因	(ア) 直接死因	誤嚥性肺炎		約2週間
		(イ) (ア) の原因			発病（発症） 又は受傷から死亡までの期間
		(ウ) (イ) の原因			◆年、月、日等の単位で書いてください ただし、1日未満の場合は、時、分等の単位で書いてください （例：1年 3か月 5時間 20分）
		(エ) (ウ) の原因			
		直接には死因に関係しないが1欄の傷病経過に影響を及ぼした傷病名等			
(15)	死因の種類	手術	1 無 ② 有	部位及び主要所見 左大腿骨近位部骨折	手術年月日 平成 Y年6月2日 昭和
		解剖	① 無 ② 有	主要所見	
(16)	外因死の追加事項	傷害が発生したとき	平成・昭和 年 月 日 午前・午後 時 分	傷害が発生したところ	都道府県 市 区 町村
		傷害が発生したところの種別	1 住居 2 工場及び建築現場 3 道路 4 その他（ ）		
		手段及び状況			

### 【解説】

本事例では、死因は誤嚥性肺炎と考えられます。

大腿骨の近位部骨折は、直接死因には関連しないと考えられる場合です。手術欄には、Ⅰ欄、Ⅱ欄に関連するものの記載が求められています。  
骨折は治癒しており、直接の死因には影響しませんが、死因の経過を考える上では記載してもよいと思います。

## E28 地震による家屋倒壊

74歳の女性。自宅で家事をしていたところ、X年6月5日午前10時35分頃、震度7の大地震が発生した。直後に家屋が倒壊し、その下敷きになった。

6時間後に救助隊員が発見したが、すでに死亡しており、死体検案が行われた。胸部に幅のある蒼白な部分が見られ、肋骨骨折が確認できた。蒼白部より頭部側は強くうっ血し、眼瞼結膜には多数の溢血点が認められた。発見時の状況もふまえ、倒壊した建物の梁が胸部を圧迫したものと考えた。

この場合に発行する書類、「死亡の原因」「死因の種類」の記載例を示します。

【適切な記載】

死亡の原因	施設 の 名 称					
	I	(ア) 直接死因	窒息		発病(発症)又は受傷から死亡までの期間	短時間
		(イ) (ア)の原因	胸部圧迫			短時間
		(ウ) (イ)の原因				
		(エ) (ウ)の原因				
II	直接には死因に関係しないがI欄の傷病経過に影響を及ぼした傷病名等				◆年、月、日等の単位で書いてください。ただし、1日未満の場合は、時、分等の単位で書いてください。 (例：1年3か月、5時間20分)	
手術	部位及び主要所見		手術年月日	平成 年 月 日 昭和 年 月 日		
	① 2有					
解剖	② 2有		主要所見			
死因の種類	1 病死及び自然死					
	外因死 { 2 交通事故 3 転倒・転落 4 溺水 5 煙、火災及び火場による傷害 } 不慮の外因死 { 6 窒息 7 中毒 ⑧ その他 } その他及び不詳の外因死 { 9 自殺 10 他殺 11 その他及び不詳の外因 } 12 不詳の死					
外因死の追加事項	傷害が発生したとき		平成 昭和 X 年 6 月 5 日 ⑨ 午後10時35分頃		傷害が発生したところ	都道府県 ⑩ 区 町村
	傷害が発生したところの種類		⑪ 居 2 工場及び建築現場 3 道路 4 その他( )			
◆伝聞又は確定情報の場合でも書いてください	手段及び状況					
	地震で倒壊した家屋の下敷きになったもの。					

【解説】  
本事例では、地震による死亡と考えられます。  
死体検案から、胸部圧迫による窒息が考えられます。  
死因欄の記載に当たっては、可能な限り詳細な病態や状況の記載が望まれます。  
なお、地震などの天災による死亡の「死因の種類」は、「8. その他」の外因死になります。

本事例では、地震による死亡と考えられます。

死体検案から、胸部圧迫による窒息が考えられます。

死因欄の記載に当たっては、可能な限り詳細な病態や状況の記載が望めます。

なお、地震などの天災による死亡の「死因の種類」は、「8. その他」の外因死になります。

89歳の女性。約1年前に下行結腸癌の診断で手術（X年1月5日）を受けた。手術後、自宅で療養していたが、全身倦怠感が著明で、8月上旬に自宅近くの病院に入院した。検査の結果、肝臓への転移巣が判明した。転移巣は大きく、全身状態から手術は困難と判断され、治療を続けたがX年12月20日午後8時50分に死亡した。

この場合に発行する書類、「死亡の原因」「死因の種類」の記載例を示します。

【適切な記載】

(14)	死亡の原因	施設の名 称		発病（発症） 又は受傷から死亡までの期間  ◆年、月、日等の単位で書いてください ただし、1日未満の場合は、時、分等の単位で書いてください （例：1年3か月、5時間20分）	約3か月
		(ア) 直接死因	転移性肝臓癌		
		(イ) (ア)の原因	下行結腸癌		
		(ウ) (イ)の原因			
		(エ) (ウ)の原因			
(15)	死 因 の 種 類	① 死及び自然死 不慮の外因死 { 2 交通事故 3 転倒・転落 4 溺水 5 煙、火災及び火焔による傷害 } 外因死 { 6 窒息 7 中毒 8 その他 } その他及び不詳の外因死 { 9 自殺 10 他殺 11 その他及び不詳の外因 } 12 不詳の死			
(16)	外 因 死 の 追 加 事 項	傷害が発生したとき	平成・昭和 年 月 日 午前・午後 時 分	傷害が発生したところ	都道府県
		傷害が発生したところの種別	1 住居 2 工場及び建築現場 3 道路 4 その他 ( )	市 区 町 村	
		◆伝聞又は確定情報の場合でも書いてください 手段及び状況			

【解説】

本事例では、死因は下行結腸癌の肝臓転移と考えられます。

死因に関連する傷病については、手術の日時や術式なども、可能な範囲で詳細な記載が求められています。

癌については、生物学的な発症時期は判然としませんが、一般に、診断がついた時点からの期間を考えます。



## E30 上位頸髄損傷

58歳の男性。X年8月10日午後8時頃、自宅室内の階段下に倒れているのを、帰宅した家族に発見された。すでに硬直が出現しており、現場に臨場した救急隊は病院に搬送せず、警察による検視が行われた。死後経過時間は約6時間前後と推定された。

前額部に皮下出血があり、頸部の異常な可動性が確認された。死後画像検査にて、頸椎椎体前面に高吸収域と軟部組織陰影の肥厚が見られ、頸椎骨折を伴う上位頸髄損傷が疑われた。警察は事故による転落と判断した。

この場合に発行する書類、「死亡の原因」「死因の種類」の記載例を示します。

### 【適切な記載】

(14)	死亡の原因	施設の名義		発病(発症)又は受傷から死亡までの期間	短時間
		(ア)直接死因	上位頸髄損傷(推定)		
		(イ)(ア)の原因			
		(ウ)(イ)の原因			
		(エ)(ウ)の原因			
目	直接には死因に関係しないが1療の傷病経過に影響を及ぼした傷病名等				
	手術	①無 2有	部位及び主要所見	手術年月日	平成 年 月 日 昭和 年 月 日
解剖	①無 2有	主要所見			
(15)	死因の種類	1病死及び自然死 2交通事故 ③転倒・転落 4溺水 5煙、火災及び火焔による傷害 6窒息 7中毒 8その他 9自殺 10他殺 11その他及び不詳の死 12不詳の死			
(16)	外因死の追加事項	傷害が発生したとき	①昭和 X年 8月 10日 午前 ②午後 2時 頃	傷害が発生したところ	○ ○ 都道府県 △ △ 市区町村
		傷害が発生したところの種類	①居室 2工場及び建築現場 3道路 4その他( )		
手段及び状況 自宅室内の階段下で倒れているのを発見されたという。					

### 【解説】

上位頸髄損傷(推定)による死亡と考えられます。

死因の種類については、死体の医学的所見のみならず、現場の状況や警察の捜査結果もふまえた判断が必要になります。

このような事例では、死因の正確な判断のために、法医学解剖を含む詳細な検査が必要と判断されることもあります。

## E31 複数の要因が考えられる例

90歳の男性。X年1月28日午後11時頃、自宅浴槽内で、顔を湯につけた状態で死亡しているのを妻が発見した。午後9時前に入浴していたが、風呂から出てこないため、不審に思った妻が様子を見に行き発見したという。

死者は約20年前から高血圧にて投薬を受けている。歩行はやや不自由だが、日常生活には支障なかったという。鼻腔・口腔から細小泡沫が流出する。死後CT検査では頭蓋内の出血はなかった。血液から一酸化炭素ヘモグロビンは検出されない。警察の検視では、犯罪の可能性は否定的である。

この場合に発行する書類、「死亡の原因」「死因の種類」の記載例を示します。

### 【適切な記載1】

(14)	死亡の原因	施設の名称		発病(発症)又は受傷から死亡までの期間 ◆年、月、日等の単位で書いてください。ただし、1日未満の場合は、時、分等の単位で書いてください。(例:1年3か月、5時間20分)	短時間
		(ア) 直接死因	溺死		
		(イ) (ア)の原因			
		(ウ) (イ)の原因			
		(エ) (ウ)の原因			
◆1欄では、最も死亡に影響を与えた傷病名を医学的因果関係の順番で書いてください	◆1欄の傷病名の記載は各欄一つにしてください	◆1欄の傷病名の記載は各欄一つにしてください	◆1欄の傷病名の記載は各欄一つにしてください	◆1欄の傷病名の記載は各欄一つにしてください	◆1欄の傷病名の記載は各欄一つにしてください
手術	①所 2有	部位及び主要所見	手術年月日	平成 年 月 日	
	解剖	①所 2有	主要所見		
(15)	死因の種類	1 病死及び自然死 外因死 不慮の外因死 { 2 交通事故 3 転倒・転落 ④ 溺水 5 煙、火災及び火焔による傷害 } { 6 窒息 7 中毒 8 その他 } その他及び不詳の外因死 { 9 自殺 10 他殺 11 その他及び不詳の外因 } 12 不詳の死			
(16)	外因死の追加事項	傷害が発生したとき	平成 昭和 X 年 1 月 28 日 午前 午後 9 時 頃 分	傷害が発生したところ	〇〇 都道府県 〇〇 市 〇〇 区 〇〇 町村
		傷害が発生したところの種類	① 居 2 工場及び建築現場 3 道路 4 その他 ( )		△△ 市 〇〇 区 〇〇 町村
◆伝聞又は確定情報の場合でも書いてください					
手段及び状況 自宅の浴槽内で、顔を湯につけた状態で発見されたという。					



【適切な記載 2】

		施設 の 名 称				
(14)	死亡の原因 ◆1欄、2欄ともに疾患の終末期の状態としての心不全、呼吸不全等は書かないでください ◆1欄では、最も死亡に影響を与えた傷病名を医学的因果関係の順番で書いてください ◆1欄の傷病名の記載は各欄一つにしてください ただし、欄が不足する場合は(エ)欄に残りを医学的因果関係の順番で書いてください	I	(ア) 直接死因 <b>窒息</b>	発病(発症)又は受傷から死亡までの期間 ◆年、月、日等の単位で書いてください ただし、1日未満の場合は、時、分等の単位で書いてください (例: 1年 3か月、5時間 20分)	短時間	
		(イ) (ア) の原因 <b>溺水吸引</b>	短時間			
		(ウ) (イ) の原因 <b>不詳</b>	不詳			
		(エ) (ウ) の原因				
		II	直接には死因に関与しないが1欄の傷病経過に影響を及ぼした傷病名等 <b>高血圧</b>	約20年		
(15)	死 因 の 種 類	手術	①無 2有	部位及び主要所見	手術年月日	平成 年 月 日 昭和
		解剖	①無 2有	主要所見		
(16)	外 因 死 の 追 加 事 項	1 病死及び自然死 外因死 不慮の外因死 { 2 交通事故 3 転倒・転落 4 溺水 5 煙、火災及び火焔による傷害 } { 6 窒息 7 中毒 8 その他 } その他及び不詳の外因死 { 9 自殺 10 他殺 11 その他及び不詳の外因 } ⑫ 不詳の死				
	傷害が発生したとき	平成・昭和 年 月 日 午前・午後 時 分	傷害が発生したところ	都道府県 市 区 町村		
	傷害が発生したところの種別	1 住居 2 工場及び建築現場 3 道路 4 その他 ( )				
	◆伝聞又は確定情報の場合でも書いてください	手段及び状況				

【適切な記載 3】

(14)	死亡の原因	施設 の 名 称		発病(発症)又は受傷から死亡までの期間  ◆年、月、日等の単位で書いてください ただし、1日未満の場合は、時、分等の単位で書いてください (例:1年3か月、5時間20分)	短時間	
		(ア) 直接死因	窒息			短時間
		(イ) (ア)の原因	溺水吸引			
		(ウ) (イ)の原因	虚血性心不全(推定)			
		(エ) (ウ)の原因				
直接には死因に関係しないが1機の傷病経過に影響を及ぼした傷病名等	高血圧	約20年				
手術	① 2有		部位及び主要所見	手術年月日	平成 年 月 日 昭和	
解剖	① 2有		主要所見			
(15)	死因の種類		① 死及び自然死 外因死 { 2 交通事故    3 転倒・転落    4 溺水    5 煙、火災及び火焔による傷害 } { 6 窒息    7 中毒    8 その他 } その他及び不詳の外因死    9 自殺    10 他殺    11 その他及び不詳の外因 12 不詳の死			
(16)	外因死の追加事項	傷害が発生したとき 平成 昭和 X 年 1 月 28 日 午前 午後 9 時 頃分	傷害が発生したところ ○○ 都道府県 △△ 市 区 町村			
		傷害が発生したところの種別 ① 居 2 工場及び建築現場 3 道路 4 その他 ( )				
◆伝聞又は確定情報の場合でも書いてください 手段及び状況 自宅の浴槽内で、顔を湯につけた状態で発見されたという。						

【適切な記載 4】

		施設 の 名 称				
(14)	死亡の原因	(ア) 直接死因	入浴中の死亡 詳細不明		発病（発症） 又は受傷から死亡までの期間	短時間
		(イ) (ア) の原因				
		(ウ) (イ) の原因				
		(エ) (ウ) の原因				
		◆1欄では、最も死亡に影響を与えた傷病名を医学的因果関係の順番で書いてください	◆1欄の傷病名の記載は各欄一つにしてください	◆1欄では、最も死亡に影響を与えた傷病名を医学的因果関係の順番で書いてください	◆1欄の傷病名の記載は各欄一つにしてください	◆1欄では、最も死亡に影響を与えた傷病名を医学的因果関係の順番で書いてください
		Ⅱ	直接には死因に関係しないが1欄の傷病経過に影響を及ぼした傷病名等	高血圧	◆年、月、日等の単位で書いてください ただし、1日未満の場合は、時、分等の単位で書いてください （例：1年3か月、5時間20分）	約20年
		手術	①無 2有	部位及び主要所見	手術年月日	平成 年 月 日 昭和 年 月 日
		解剖	①無 2有	主要所見		
(15)	死因の種類	1 病死及び自然死 外因死 不慮の外因死 { 2 交通事故 3 転倒・転落 4 溺水 5 煙、火災及び火焔による傷害 } 6 窒息 7 中毒 8 その他 その他及び不詳の外因死 { 9 自殺 10 他殺 11 その他及び不詳の外因 } ⑫ 不詳の死				
(16)	外 因 死 の 追 加 事 項	傷害が発生したとき	平成・昭和 年 月 日 午前・午後 時 分	傷害が発生したとき	都道府県	
		傷害が発生したところの種類	1 住居 2 工場及び建築現場 3 道路 4 その他（ ）	傷害が発生したところ	市 区 町 村	
		◆伝聞又は確定情報の場合でも書いてください				
		手段及び状況				
(17)	生後1年未満で病死した場合の追加事項	出生時体重	単胎・多胎の別	妊娠週数		
		グラム	1 単胎 2 多胎（子中第 子）	満 週		
		妊娠・分娩時における母体の病歴又は異状		母の生年月日		
		1 無 2 有 { 3 不詳 }		平成 年 月 日 昭和 年 月 日		
				前回までの妊娠の結果 出生児 人 死産児 胎 （妊娠満22週以後に服る）		
(18)	その他特に付言すべきことがら 自宅の浴槽内で、顔を湯につけた状態で発見されたという。詳細は不明である。					

【解説】

この例では、検案のみでの死因の判断については、意見が分かれると思います。

記載例1のように、「溺死」と判断する考え方、記載例2のように、「溺水吸引」はあるが、「その原因が特定できない」とする考え方、記載例3のように、基礎疾患による発作が生じ、溺水を吸引したと推定する考え方、記載例4のように、内因、外因の関与が判断できないとする考え方もあります。これらは、個別の事例での判断となります。

「死亡の原因」のⅡ欄についても、意見が分かれるかもしれません。高血圧の関与の度合いについては、個別に判断する必要があります。

記載例3では、死因の種類が「1. 病死及び自然死」ですが、「死亡の原因」欄に損傷名等が記入された場合には、「外因死の追加事項」欄も可能な範囲で記載します。

このような事例では、死因の正確な判断のために、法医学解剖を含む詳細な検査が必要なが多いと思います。

## E32 高度損傷

45歳の男性。X年1月28日午前11時頃、工場内でプラスチックを破砕する機械に巻き込まれたという。回転するローラーに挟まれた状態で、頭部及び体幹部が強く圧迫、挫滅される。通報を受け、消防隊員が救出活動を行ったが、全身の挫滅が高度で、午後1時に死亡が確認された。

死者は生来健康で、既往症はない。血液からアルコールや薬物は検出されない。警察の検視では、作業中の事故と判断された。

この場合に発行する書類、「死亡の原因」「死因の種類」の記載例を示します。

### 【適切な記載】

(14)	死亡の原因	施設の名称		発病（発症）又は受傷から死亡までの期間  ◆年、月、日等の単位で書いてください ただし、1日未満の場合は、時、分等の単位で書いてください (例：1年3か月、5時間20分)	短時間  短時間
		(ア) 直接死因	外傷性ショック		
		(イ) (ア)の原因	全身挫滅		
		(ウ) (イ)の原因			
		(エ) (ウ)の原因			
◆1欄では、最も死亡に影響を与えた傷病名を医学的因果関係の順番で書いてください ◆1欄の傷病名の記載は各欄一つにしてください ただし、欄が不足する場合は(エ)欄に残りを医学的因果関係の順番で書いてください	目	直接には死因に関係しないが1欄の傷病経過に影響を及ぼした傷病名等			
	手術	①無 2有	部位及び主要所見	手術年月日	平成 昭和 年 月 日
(15)	死因の種類	解剖	①無 2有	主要所見	
		1 病死及び自然死 外因死 不慮の外因死 { 2 交通事故 3 転倒・転落 4 溺水 5 煙、火災及び火焔による傷害 } { 6 窒息 7 中毒 8 その他 } その他及び不詳の外因死 { 9 自殺 10 他殺 11 その他及び不詳の外因 } 12 不詳の死			
(16)	外因死の追加事項	傷害が発生したとき	平成 昭和 X 年 1 月 28 日 午後 11 時 頃 分	傷害が発生したところ	○ ○ 都道府県 △ △ 市 区 町 村
		傷害が発生したところの種類	1 住居 2 工場及び建築現場 3 道路 4 その他 ( )		
		手段及び状況	工場で作業中、機械に巻き込まれたという。		

### 【解説】

「死亡の原因」の記載に苦慮するかもしれません。

頭部及び体幹部が強く圧迫され、脳、心臓、肺といった主要臓器が高度な損傷をきたしていると考えられ、「全身挫滅」としています。特に損傷が著しい場合には、例えば「ア) 頭蓋内損傷」「イ) 頭蓋粉砕骨折」という表現でもよいと思います。

## E33 胃潰瘍穿孔

68歳の男性。以前から空腹時の心窩部痛を感じていた。

X年5月10日、2日前から続く腹痛が増強し、動けないため救急車を要請して総合病院に搬送された。

筋性防御がみられ、腹部単純X線写真から遊離ガスが確認され、白血球数やCRP値の上昇、腹部CT検査の所見から、消化管穿孔による汎発性腹膜炎が疑われたため、緊急開腹手術となった。

手術にて、胃の穿孔と腹膜炎が確認され、穿孔部閉鎖術と腹腔ドレナージ術を行った。手術1週間後に多臓器不全を併発し、その約3日後に死亡した。

この場合に発行する書類、「死亡の原因」「死因の種類」の記載例を示します。

### 【適切な記載】

(14)	死亡の原因	施設の名義		発病（発症）又は受傷から死亡までの期間 ◆年、月、日等の単位で書いてください。ただし、1日未満の場合は、時、分等の単位で書いてください（例：1年3か月、5時間30分）	約3日
		(ア) 直接死因	多臓器不全		
		(イ) (ア) の原因	汎発性腹膜炎		
		(ウ) (イ) の原因	胃潰瘍穿孔		
		(エ) (ウ) の原因			
(15)	死因の種類	① 死亡及び自然死 不慮の外因死 { 2 交通事故 3 転倒・転落 4 溺水 5 煙、火災及び火傷による傷害 } 6 窒息 7 中毒 8 その他 その他及び不詳の外因死 { 9 自殺 10 他殺 11 その他及び不詳の外因 } 12 不詳の死			
(16)	外因死の追加事項	傷害が発生したとき	平成・昭和 年 月 日 午前・午後 時 分	傷害が発生したところ	都道府市区町村
		傷害が発生したところの種類	1 住居 2 工場及び建築現場 3 道路 4 その他 ( )		
		◆伝聞又は確定情報の場合でも書いてください 手段及び状況			

### 【解説】

本文からは、直接死因は「多臓器不全」、その原因は、胃潰瘍の穿孔による汎発性腹膜炎と考えられます。

死亡の原因については、医学的因果関係に従って、死亡に至る病態について、可能な範囲で詳細な記載をお願いします。



## E34 肝硬変

65歳の男性。大酒家。約10年前にアルコール性肝硬変を指摘されていたが、無治療で飲酒も継続していた。5月20日、38.5℃の発熱と腹痛にて病院を受診、入院となった。

腹水が混濁しており、培養検査で血液、腹水の両方から大腸菌が検出された。消化管穿孔などの所見はなく、肝硬変に起因する特発性細菌性腹膜炎と診断され、抗菌剤による治療を受けるも、敗血症性ショックにより、2日後に死亡した。

この場合に発行する書類、「死亡の原因」「死因の種類」の記載例を示します。

### 【適切な記載】

(14)	死亡の原因	施設の名義		発病（発症） 又は受傷から死亡までの期間  ◆年、月、日等の単位で書いてください。ただし、1日未満の場合は、時、分等の単位で書いてください。 (例：1年3か月、5時間20分)	約2日
		(ア) 直接死因	敗血症性ショック		
		(イ) (ア) の原因	特発性細菌性腹膜炎		
		(ウ) (イ) の原因	アルコール性肝硬変		
(15)	死因の種類	① 死因及び自然死			
		不慮の外因死 { 2 交通事故 3 転倒・転落 4 溺水 5 煙、火災及び火傷による傷害 } 外因死 { 6 窒息 7 中毒 8 その他 } その他及び不詳の外因死 { 9 自殺 10 他殺 11 その他及び不詳の外因 } 12 不詳の死			
(16)	外因死の追加事項	傷害が発生したとき	平成・昭和 年 月 日 午前・午後 時 分	傷害が発生したところ	都道府県 市区町村
		傷害が発生したところの種類	1 住居 2 工場及び建築現場 3 道路 4 その他 ( )		
		◆伝聞又は確定情報の場合でも書いてください			
		手段及び状況			

### 【解説】

病院で治療を受けていたが、死亡した事例です。

本文からは、直接死因は「敗血症性ショック」、その原因は、アルコール性肝硬変を基礎とした特発性細菌性腹膜炎と考えられます。

死亡の原因については、死亡に至る病態について、可能な範囲で詳細な記載をお願いします。また、発症時期が不明な場合は「○日位」と幅を持たせる場合や、発症時期が特定できない場合は「不詳」も可能です。



## E35 胃癌

75歳の男性。健康診断で胃幽門部に腫瘍を指摘された。入院して検査を行ったところ、胃癌であることが判明し、手術となった。

手術（胃亜全摘術、平成X年8月10日）では、リンパ節への転移もみられず、病理学的に腺癌であった。術後経過は良好で退院となった。手術1年半後の検査で、再発が確認され、治療を受けるも初診から約2年4か月後に死亡した。

この場合に発行する書類、「死亡の原因」「死因の種類」の記載例を示します。

### 【適切な記載】

(14)	死亡の原因	施設の名義		発病（発症） 又は受傷から死亡までの期間	約2年4か月	
		(ア) 直接死因	胃幽門部腺癌			
		(イ) (ア) の原因				
		(ウ) (イ) の原因				
(15)	死因の種類	(エ) (ウ) の原因		◆年、月、日等の単位で書いてください。ただし、1日未満の場合は、時、分等の単位で書いてください。 (例：1年3か月、5時間20分)		
		直接には死因に関与しないが1層の傷病経過に影響を及ぼした傷病名等				
		手術	1 無 2 有 部位及び主要所見 胃亜全摘術、胃幽門部に腺癌、 リンパ節転移なし			手術年月日 昭和 X 年 8 月 10 日
		解剖	1 無 2 有 主要所見			
(16)	外因死の追加事項	① 病死及び自然死			都道府県 市区町村	
		不慮の外因死 { 2 交通事故 3 転倒・転落 4 溺水 5 煙、火災及び火焔による傷害 } 外因死 { 6 窒息 7 中毒 8 その他 } その他及び不詳の外因死 { 9 自殺 10 他殺 11 その他及び不詳の外因 } 12 不詳の死				
		傷害が発生したとき	平成・昭和 年 月 日 午前・午後 時 分	傷害が発生したところ		
		傷害が発生したところの種別	1 住居 2 工場及び建築現場 3 道路 4 その他 ( )			
◆伝聞又は確定情報の場合でも書いてください						

### 【解説】

本文からは、直接死因は、「胃腺癌」の再発による死亡と考えられ、直接死因が原死因となると思われます。

癌については病理学的診断名や部位についての情報についても、可能な範囲で詳細な記載をお願いします。また、発症時期については、癌などの場合は初診（あるいは検診等での発見時期）としてよいと思います。

## E36 脳塞栓

75歳の男性。自宅で立ち上がれなくなり、病院に搬送され、脳梗塞と診断された。左半身に軽度の麻痺があり、入院治療により改善した。発症時期不明の心房細動があり、塞栓による脳梗塞と考えられた。

1週間後、朝から意識障害がみられ、緊急のMRI 検査で左大脳の広汎な脳梗塞と診断され、治療を受けるも2日後に死亡した。心房細動に起因する塞栓性脳梗塞と判断された。

この場合に発行する書類、「死亡の原因」「死因の種類」の記載例を示します。

### 【適切な記載】

施設 の 名 称			
(14) 死亡の原因	(ア) 直接死因	左大脳広範囲脳梗塞	約2日
	(イ) (ア) の原因	心房細動	不詳
	(ウ) (イ) の原因		
	(エ) (ウ) の原因		
	直接には死因に関係しないが1度の傷病経過に影響を及ぼした傷病名等		
(15) 死因の種類	① 死及び自然死	2 交通事故 3 転倒・転落 4 溺水 5 煙、火災及び火焔による傷害 6 窒息 7 中毒 8 その他 その他及び不詳の死因死 9 自殺 10 他殺 11 その他及び不詳の死因 12 不詳の死	
	② 死及び自然死		
(16) 外 国 死 の 追 加 事 項	傷害が発生したとき	平成・昭和 年 月 日 午前・午後 時 分	傷害が発生したところ
	傷害が発生したところの種類	1 住居 2 工場及び建築現場 3 道路 4 その他 ( )	市 区 町 村
	手段及び状況		

### 【解説】

本文からは、直接死因は、「脳梗塞」による死亡と考えられますが、その原因として、心房細動からの塞栓が考えられる事例です。

病態を考える上で、心房細動の影響が大きいと考えられる場合には、医学的因果関係に従って、可能な範囲で詳細な記載をお願いします。

## E37 詳細検査中

75歳の男性、転倒し、大腿骨近位部骨折で入院した。5日後に人工骨頭置換術を施行となった。麻酔導入後に血圧低下と心停止を来し、救命措置を実施するも死亡した。心エコー検査から、肺動脈血栓塞栓症の可能性が考えられたが、原因は確定していない。

解剖を実施予定であるが、確定診断には2週間程度必要であるとのことで、暫定的に死亡診断書を発行することとなった。

この場合に発行する書類、「死亡の原因」「死因の種類」の記載例を示します。

### 【適切な記載】

		施設 の 名 称			
(14)	死亡の原因	(ア) 直接死因	不詳(詳細検査中)		発病(発症)又は受傷から死亡までの期間  ◆年、月、日等の単位で書いてください。ただし、1日未満の場合は、時、分等の単位で書いてください。 (例：1年、3か月、5時間30分)
		(イ) (ア)の原因			
		(ウ) (イ)の原因			
		(エ) (ウ)の原因			
	◆1欄では、最も死亡に影響を与えた傷病名を医学的因果関係の順番で書いてください。 ◆1欄の傷病名の記載は各欄一つにしてください。 ただし、欄が不足する場合は(エ)欄に残りを医学的因果関係の順番で書いてください。	目	直接には死因に関与しないが1欄の傷病経過に影響を及ぼした傷病名等		
(15)	死因の種類	手術	①無 ②有	部位及び主要所見	手術年月日 平成 年 月 日 昭和 年 月 日
		解剖	①無 ②有	主要所見 剖検中	
(16)	外因死の追加事項	1病死及び自然死 外因死 不慮の外因死 { 2交通事故 3転倒・転落 4溺水 5煙、火災及び火焔による傷害 } 6窒息 7中毒 8その他 その他及び不詳の外因死 { 9自殺 10他殺 11その他及び不詳の外因 } ⑬不詳の死			
		傷害が発生したとき	平成・昭和 年 月 日 午前・午後 時 分	傷害が発生したところ	都道府県 市 区 町村
		傷害が発生したところの種別	1住居 2工場及び建築現場 3道路 4その他( )		
		◆伝聞又は確定情報の場合でも書いてください 手段及び状況			

(17)	生後1年未満で病死した場合の追加事項	出生時体重	単胎・多胎の別	妊娠週数
		グラム	1単胎 2多胎( 子中第 子)	満 週
		妊娠・分娩時における母体の病歴又は異状	母の生年月日	前回までの妊娠の結果 出生児 人 死産児 胎 (妊娠満22週以後に限る)
		1無 2有	3不詳	平成 年 月 日 昭和 年 月 日
(18)	その他特に付言すべきことから 大腿骨近位部骨折の手術の麻酔導入時に状態が急変したという。死因の詳細は検査中である。			

**【解説1】**

解剖による正確な死因判断が行われる予定ですが、確定診断まで時間を要するため、暫定的に死亡診断書を作成する場合があります。

死亡診断書・死体検案書の記載内容について、詳細な検査を要するなど、死因の確定までに時間を要する場合には、死因については「不詳（詳細検査中）」として、後日、申し出により訂正が受け付けられます。

**【解説2】 死亡診断書等の誤記訂正に関して**

役所に提出後、その記載事項（診断傷病名等を含む）の訂正の必要が生じた場合は、その旨を死亡届出先の市区町村の戸籍係に連絡の上、正しい死亡診断書・死体検案書と、誤記の理由を記載した書面を添付して提出します。なお、この取り扱いは、死亡届が提出された年の翌年の5月末日までとなっています。

**（参考）**

死亡届書に添付した死亡診断書の誤記訂正について（昭和48年8月23日 民二第6498号、統発第330号 各法務局・地方法務局長・都道府県知事宛 法務省民事局長、厚生省大臣官房統計調査部長連名通達）

死亡届書に添付した死亡診断書の誤記訂正申出の取扱いについて（昭和54年9月1日 民二第4481号、統発第317号 各法務局・地方法務局長・都道府県知事宛 法務省民事局長、厚生省大臣官房統計情報部長連名通達）

受傷3日後から開口障害と嚥下障害が出現し、5日後に病院に入院、治療を受けた。その後、硬直性の痙攣も出現した。破傷風菌が同定され、呼吸筋の麻痺も出現し、治療を行ったが受傷7日後に死亡した。

この場合に発行する書類、「死亡の原因」「死因の種類」の記載例を示します。

【適切な記載】

(14)	死亡の原因	施設の名 称					
		(ア) 直接死因	破傷風				約5日
		(イ) (ア) の原因	左第2指切創				約7日
		(ウ) (イ) の原因					
		(エ) (ウ) の原因					
◆1欄、3欄ともに病歴の終末期の状態としての心不全、呼吸不全等は書かないでください。		◆1欄では、最も死亡に影響を与えた傷病名を医学的因果関係の順番で書いてください。		◆年、月、日等の単位で書いてください。ただし、1日未満の場合は、時、分等の単位で書いてください。(例：1 年 3 か月、5 時間 30 分)			
◆1欄の傷病名の記載は各欄一つにしてください。 ただし、欄が不足する場合は(エ)欄に残りを医学的因果関係の順番で書いてください。		表面には死因に関係しないが1欄の傷病経過に影響を及ぼした傷病名等					
手術	①無 2有	部位及び主要所見		手術年月日	平成 昭和	年 月 日	
	解剖	①無 2有	主要所見				
(15)	死因の種類	1 病死及び自然死 外因死 { 2 交通事故    3 転倒・転落    4 溺水    5 煙、火災及び火焔による傷害 } { 6 窒息         7 中毒         8 その他 } その他及び不詳の外因死   9 自殺    10 他殺    11 その他及び不詳の外因   12 不詳の死					
(16)	外国死の追加事項	傷害が発生したとき 平成 昭和 X 年 6 月 15 日 午後 11 時 頃分	傷害が発生したところ 1 住居    2 工場及び建築現場    3 道路    ④ その他 ( 畑 )	都道府県市区町村 ○○○○ △△●●	◆伝聞又は確定情報の場合でも書いてください。		
		手段及び状況 畑で農作業中、誤って手を切ったという。					

  

(17)	生後1年未満で病死した場合の追加事項	出生時体重	単胎・多胎の別		妊娠週数
		グラム	1 単胎    2 多胎 (      子中第      子 )	満      週	
		妊婦・分娩時における母体の病歴又は貴状		母の生年月日	
1 無    2 有 [      ]    3 不詳		平成 昭和	年 月 日	前回までの妊娠の結果 出生児      人胎 死産児      胎 (妊娠満22週以後に限る)	
(18)	その他特に付言すべきことがら 受傷3日後から開口障害があり、入院して治療を受けたが、症状が進行して死亡したという。				

【解説】

破傷風による死亡と考えられた事例です。

破傷風は創傷感染なので、損傷と因果関係があると考えられる場合には、単純に病気による死亡ではなく、外因死と考えるべきだと思います。

死因の種類を考える場合、因果関係にも十分な考慮が必要です。



## E39 急性膵炎

65歳の男性、前日から腹痛があり、痛みが増強したため、平成X年10月5日午前5時頃、救急車で病院に搬送された。

検査では著明な炎症所見、アミラーゼ上昇を含む肝胆道系酵素の上昇がみられ、腹部CT検査で膵臓の腫大がみられた。アルコールの多飲や胆石の既往はない。治療を行ったが、全身状態が悪化し、発症3日目に死亡した。病理解剖で、血性腹水の貯留と膵臓の壊死と出血が確認された。

この場合に発行する書類、「死亡の原因」「死因の種類」の記載例を示します。

### 【適切な記載】

		施設 の 名 称			
(14)	死亡の原因	(ア) 直接死因	急性出血性膵炎		約3日
		(イ) (ア) の原因			発病(発症)又は受傷から死亡までの期間  ◆年、月、日等の単位で書いてください ただし、1日未満の場合は、時、分等の単位で書いてください (例：1年3か月、5時間20分)
		(ウ) (イ) の原因			
		(エ) (ウ) の原因			
		直接には死因に関与しないが1療の傷病経過に影響を及ぼした傷病名等			
	手術	①無 ②有	部位及び主要所見	手術年月日	平成 年 月 日 昭和 年 月 日
	解剖	①無 ②有	主要所見 膵臓の出血と腫大。血性腹水が貯留。		
(15)	死因の種類	①死及び自然死 不慮の外因死 { 2交通事故 3転倒・転落 4溺水 5煙、火災及び火焔による傷害 } 6窒息 7中毒 8その他 その他及び不詳の外因死   9他殺 10他殺 11その他及び不詳の外因   12不詳の死			
(16)	外因死の追加事項	傷害が発生したとき	平成・昭和 年 月 日 午前・午後 時 分	傷害が発生したところ	都道府県 市 区 町村
		傷害が発生したところの種別	1住居 2工場及び建築現場 3道路 4その他( 畑 )		
		◆伝聞又は確定情報の場合でも書いてください 手段及び状況			

### 【解説】

直接死因は「急性出血性膵炎」と考えられます。

急性膵炎の直接死因としては、発症後早期の場合高度の脱水に伴う循環不全によるものが多いですが、死亡に至る病態について、具体的に特定できない場合は原死因を直接記載することでよいと思います。また、膵炎の原因について不明な場合は「特発性急性膵炎」と記載したほうがよいです。



## E40 アルコールおよびウイルスによる肝硬変

58歳の男性。大酒家。約15年前に肝硬変と診断されている。C型肝炎ウイルス抗体が陽性である。飲酒は継続していたが、腹水の貯留が著明で、全身倦怠感が強く、徐々に飲酒もできなくなり、11月10日、入院となった。

検査にて肝臓癌は確認できていないが、アンモニア値が高値を示した。入院後、傾眠傾向が出現し、治療を受けたものの、約20日後に死亡した。

この場合に発行する書類、「死亡の原因」「死因の種類」の記載例を示します。

### 【適切な記載】

		施設 の 名 称			
(14)	死亡の原因	(ア) 直接死因	肝不全	発病(発症)又は受傷から死亡までの期間  ◆年、月、日等の単位で書いてください。ただし、1日未満の場合は、時、分等の単位で書いてください。 (例：1年3か月、5時間20分)	不詳
		(イ) (ア)の原因	アルコール性肝硬変		約15年
		(ウ) (イ)の原因			
		(エ) (ウ)の原因			
		直接には死因に関係しないが1欄の備考欄に記述を及ぼした傷病名等			
◆1欄、3欄ともに死因の終末期の状態としての心不全、呼吸不全等は書かないでください ◆1欄では、最も死亡に影響を与えた傷病名を医学的因果関係の順で書いてください ◆1欄の傷病名の記載は各欄一つにしてください ただし、欄が不足する場合は(エ)欄に残りを医学的因果関係の順で書いてください		手 術 ①無 2有	部位及び主要所見	手術年月日	平成 昭和 年 月 日
		解剖 ①無 2有	主要所見		
(15)	死因の種類	①病死及び自然死 不慮の外因死 { 2交通事故 3転倒・転落 4溺水 5煙、火災及び火焔による傷害 } 外因死 { 6窒息 7中毒 8その他 } その他及び不詳の外因死 { 9自殺 10他殺 11その他及び不詳の外因 } 12不詳の死			
(16)	外因死の追加事項	傷害が発生したとき	平成・昭和 年 月 日 午前・午後 時 分	傷害が発生したとき	都道府県
		傷害が発生したところの種類	1住居 2工場及び建築現場 3道路 4その他 ( )	傷害が発生したところ	市 区 町 村
◆伝聞又は確定情報の場合でも書いてください		手段及び状況			

### 【解説】

本文からは、死因は肝硬変を基礎とした肝不全と考えられます。

肝硬変の原因については、アルコールとウイルスの両者が関与していると考えられますが、より関与が大きいと考えられる要因があれば、そちらを記載します。

## E41 多系統萎縮症

58歳の男性、約7年前に多系統萎縮症と診断され、自宅療養していた。

X年5月10日朝、家族が部屋に行ったところ、ベッドの中で死亡しているのを発見された。連絡を受けた主治医が自宅に赴き、死亡を確認した。

主治医が警察に届出を行い、検視の結果、警察は事件性がないと判断した。主治医は、死因を多系統萎縮症に起因する突然死と診断した。

この場合に発行する書類、「死亡の原因」「死因の種類」の記載例を示します。

【適切な記載】

		施設の名義				
(14)	死亡の原因	(ア) 直接死因	多系統萎縮症		約7年	
		(イ) (ア) の原因			発病（発症）又は受傷から死亡までの期間	
		(ウ) (イ) の原因			◆年、月、日等の単位で書いてください。ただし、1日未満の場合は、時、分等の単位で書いてください（例：1年3か月、5時間30分）	
		(エ) (ウ) の原因				
		直接には死因に関与しないが1療の傷病経過に影響を及ぼした傷病名等				
(15)	死因の種類	① 無 2 有	部位及び主要所見		手術年月日 平成 年 月 日	
		① 無 2 有	主要所見			
(16)	外因死の追加事項	① 病死及び自然死				都道府県 市区町村
		不慮の外因死 { 2 交通事故 3 転倒・転落 4 溺水 5 煙、火災及び火傷による傷害 } 6 窒息 7 中毒 8 その他 その他及び不詳の外因死 { 9 自殺 10 他殺 11 その他及び不詳の外因 } 12 不詳の死				
		傷害が発生したとき	平成・昭和 年 月 日 午前・午後 時 分	傷害が発生したところ		
(16)	◆伝聞又は確定情報の場合でも書いてください	傷害が発生したところの種別	1 住居 2 工場及び建築現場 3 道路 4 その他 ( )			
		手段及び状況				

【解説】

死因を「多系統萎縮症に起因する突然死」と診断した事例です。

多系統萎縮症では、時に突然死がみられるといわれます。突然死の機序については分からない場合もありますが、死亡への直接の関連が考えられる場合は、記載してよいと思います。なお、死亡に至る状況等が不明な場合（「異状」と考えられる場合）は、警察への届出を行って、検視を受ける場合もあります。

なお、死体で発見された場合の死亡時刻は、死亡を確認した時刻ではなく、ご遺体の体温の変化、死後硬直等から判断します。

## E42 白血病による多発性脳出血

85歳の男性。近医で血液検査の際に白血球数の異常を指摘され、総合病院を受診したところ、白血病と診断された。治療のために入院した翌日、意識状態が急激に悪化し、頭部CT検査にて多発性の脳出血が確認された。

治療を受けるも、入院3日目に死亡した。

この場合に発行する書類、「死亡の原因」「死因の種類」の記載例を示します。

### 【適切な記載】

(14)	死亡の原因	施設の名 称				
		(ア) 直接死因	多発性脳出血	免病（免症） 又は受傷から死亡までの期間	約2日	年 月 日 時 分 秒
		(イ) (ア) の原因	白血病		不詳	
		(ウ) (イ) の原因				
		(エ) (ウ) の原因				
◆1欄、2欄ともに死因の終末期の状態としての心不全、呼吸不全等は書かないでください ◆1欄では、最も死亡に影響を与えた傷病名を医学的因果関係の順番で書いてください ◆1欄の傷病名の記載は各欄一つにしてください ただし、欄が不足する場合は(エ)欄に残りを医学的因果関係の順番で書いてください		手術	① 2有	部位及び主要所見	手術年月日	平成 年 月 日
解剖	① 2有	主要所見				
(15)	死 因 の 種 類	① 死及び自然死 外因死 不慮の外因死 { 2 交通事故 3 転倒・転落 4 溺水 5 煙、火災及び火傷による傷害 } 6 窒息 7 中毒 8 その他 その他及び不詳の外因死   9 自殺 10 他殺 11 その他及び不詳の外因   12 不詳の死				
(16)	外 因 死 の 追 加 事 項	傷害が発生したとき 平成・昭和 年 月 日 午前・午後 時 分 傷害が発生したところの種別 1 住居 2 工場及び建築現場 3 道路 4 その他 ( ) ◆伝聞又は確定情報の場合でも書いてください 手段及び状況	傷害が発生したところ 市 区 町 村	都道府県 市 区 町 村		

### 【解説】

白血病の診断を受け、多発性の脳出血をきたした事例です。

多発性の脳出血は、白血病に起因するものと考えられ、直接の因果関係があるものと判断される場合は、記載例のようになります。

病型がはっきりしている場合はそれらを記載し、はっきりしない場合でも可能な限り詳細な記載をお願いします。

## E43 慢性腎不全

65歳の男性。約20年前から週3回人工透析を行っている。X年6月28日朝、家族が部屋に行ったところ、ベッドの中で反応しないため、救急車で病院に搬送されたが、死亡が確認された。

外来担当医が警察に届出を行い、警察は検視の結果、事件性はないと判断した。死後CTで冠状動脈の著明な石灰化が確認され、虚血性心疾患による死亡が推測された。

この場合に発行する書類、「死亡の原因」「死因の種類」の記載例を示します。

### 【適切な記載】

(14)	死亡の原因	施設 の 名 称		発病（発症） 又は受傷から死亡までの期間	不詳
		(ア) 直接死因	虚血性心疾患（推定）		
		(イ) (ア) の原因			
		(ウ) (イ) の原因			
		(エ) (ウ) の原因			
目	表層には死因に関係しないが1層の傷病経過に影響を及ぼした傷病名等	慢性腎不全	約20年		
	手術	① 2有	部位及び主要所見	手術年月日	平成 年 月 日 昭和 年 月 日
(15)	死因の種類	解剖	① 2有	主要所見	
		① 死及び自然死 外因死 不慮の外因死 { 2交通事故 3転倒・転落 4溺水 5煙、火災及び火場による傷害 } { 6窒息 7中毒 8その他 } その他及び不詳の外因死 { 9自殺 10他殺 11 その他及び不詳の外因 } 12 不詳の死			
(16)	外 因 死 の 追 加 事 項	傷害が発生したとき	平成・昭和 年 月 日 午前・午後 時 分	傷害が発生したとき	都道府県 市 区 町村
		傷害が発生したところの種類	1 住居 2 工場及び建築現場 3 道路 4 その他 ( )	傷害が発生したところ	市 区 町村
		手段及び状況			

### 【解説】

慢性腎不全にて透析療法を受けている患者の死亡例です。

検案所見のみで、死因を判断することは難しいですが、可能な限り得られたデータから総合的に判断します。諸般の事情から推定死因にとどまる場合も少なくありませんが、その場合は「（推定）」と記載してかまいません。

## E44 アルコール性心筋症

52歳の男性、大酒家。X年3月28日朝、自宅室内で死亡しているのを発見された。

明確な外傷はなく、警察は検視の結果、事件性はないと判断した。死後CT検査でも頭蓋内に出血なく、肺うっ血以外に有意な所見はなかった。既往歴として、アルコール性心筋症が疑われており、死因の可能性が高いと判断した。

この場合に発行する書類、「死亡の原因」「死因の種類」の記載例を示します。

### 【適切な記載】

(14)	死亡の原因	施設の名義		不詳
		(ア) 直接死因	アルコール性心筋症(推定)	
		(イ) (ア)の原因		
		(ウ) (イ)の原因		
		(エ) (ウ)の原因		
◆1欄、3欄ともに疾患の終末期の状態としての心不全、呼吸不全等は書かないでください ◆1欄では、最も死亡に影響を与えた傷病名を医学的因果関係の順番で書いてください ◆1欄の傷病名の記載は各欄一つにししてください ただし、欄が不足する場合は(エ)欄に残りを医学的因果関係の順番で書いてください		免病(免症)又は受傷から死亡までの期間 ◆年、月、日等の単位で書いてください。1日未満の場合は、時、分等の単位で書いてください (例: 1年3か月、5時間20分)		
手術	① 2有	部位及び主要所見	手術年月日	平成 年 月 日 昭和
解剖	① 2有	主要所見		
(15)	死因の種類	① 病死及び自然死 ② 不慮の死 ③ 交通事故 ④ 転倒・転落 ⑤ 溺水 ⑥ 煙、火災及び火傷による傷害 ⑦ 窒息 ⑧ 中毒 ⑨ その他 ⑩ 自殺 ⑪ 他殺 ⑫ その他及び不詳の死		
(16)	外因死の追加事項	傷害が発生したとき 平成・昭和 年 月 日 午前・午後 時 分 傷害が発生したところの種類 1 住居 2 工場及び建築現場 3 道路 4 その他( ) 手段及び状況	傷害が発生したところ 市 区 町 村 都道府県	
	◆伝聞又は確定情報の場合でも書いてください			

(17)	生後1年未満で病死した場合の追加事項	出生時体重	単胎・多胎の別	妊娠週数
		グラム	1 単胎 2 多胎 ( 子中第 子 )	満 週
(18)	その他特に付言すべきことから	妊娠・分娩時における母体の病歴又は異状 1 無 2 有 [ ] 3 不詳	母の生年月日 平成 年 月 日 昭和	前回までの妊娠の結果 出生児 人 死産児 胎 (妊娠満22週以後に限る)
		死後に行ったCT検査にて、肺のうっ血が確認された。		

### 【解説】

大酒家の自宅死亡例です。

死後CTについての検査結果の項目はありませんが、記載する場合は「その他特に付言すべきことから」に簡潔に記載してもよいと思います。

推定死因にとどまる場合も少なくありませんが、その場合は「(推定)」と記載してかまいません。



## E45 癌患者の肺炎

82歳の男性、約1年半前に右上葉の扁平上皮癌の診断で、X年5月20日に右上葉切除術を受けた。1年後に右肺に再発が確認されたが、残存肺機能の低下があり、手術は困難であり化学療法を継続することとなった。再発巣が増大して区域気管支を閉塞し、無気肺を生じ、約1週間前からブドウ球菌による肺炎を併発して死亡した。

この場合に発行する書類、「死亡の原因」「死因の種類」の記載例を示します。

この場合に発行する書類、「死亡の原因」「死因の種類」の記載例を示します。

【適切な記載】

(14)	死亡の原因  ◆1欄、2欄ともに病患の終末期の状態としての心不全、呼吸不全等は書かないでください。  ◆1欄では、最も死亡に影響を与えた傷病名を医学的因果関係の順番で書いてください。  ◆1欄の傷病名の記載は各欄一つにしてください。 ただし、欄が不足する場合は「エ」欄に残りを医学的因果関係の順番で書いてください。	施設の名 称					
		I	(ア) 直接死因	ブドウ球菌肺炎		発病（発症）又は受傷から死亡までの期間  ◆年、月、日等の単位で書いてください。 ただし、1日未満の場合は、時、分等の単位で書いてください。 （例：1年3か月、5時間20分）	約1週間
			(イ) (ア) の原因	右肺扁平上皮癌			約1年半
			(ウ) (イ) の原因				
			(エ) (ウ) の原因				
II	表欄には死因に関係しないが1欄の傷病経過に影響を及ぼした傷病名等						
手術	1 無 2 有	部位及び主要所見 右上葉切除術、右上葉の扁平上皮癌		手術年月日	昭和 X 年 5 月 20 日		
	解剖	1 無 2 有	主要所見				
(15)	死因の種類	① 死及び自然死 外国死 不慮の外国死 { 2 交通事故 3 転倒・転落 4 溺水 5 煙、火災及び火場による傷害 } { 6 窒息 7 中毒 8 その他 } その他及び不詳の外国死 { 9 自殺 10 他殺 11 その他及び不詳の外国因 } 12 不詳の死					
(16)	外国死の追加事項  ◆伝聞又は確定情報の場合でも書いてください	傷害が発生したとき 平成・昭和 年 月 日 午前・午後 時 分	傷害が発生したところ 1 住居 2 工場及び建築現場 3 道路 4 その他 ( )	都道府県 市 区 町村			
		手段及び状況					

【解説】

癌の治療経過中に、肺炎での死亡例です。

肺炎自体は、細菌感染によるものですが、再発巣の扁平上皮癌の増大に関連した変化であり、原死因は癌によると考えられます。直接死因の肺炎のみならず、その原因と考えられる癌についての記載をお願いします。また、肺炎の原因についても、その病因が特定できていれば記載をお願いします。

癌の治療経過中に、肺炎での死亡例です。

肺炎自体は、細菌感染によるものですが、再発巣の扁平上皮癌の増大に関連した変化であり、原死因は癌によると考えられます。直接死因の肺炎のみならず、その原因と考えられる癌についての記載をお願いします。また、肺炎の原因についても、その病因が特定できていれば記載をお願いします。



## E46 関節リウマチ患者の間質性肺炎急性増悪

72歳の女性、約25年間関節リウマチの治療を受けている。  
2年前から咳や息切れを自覚し、間質性肺炎の診断を受けている。3週間前から呼吸困難が進行したため入院し、ステロイド投与等を受けるも、呼吸機能が悪化し、死亡した。  
この場合に発行する書類、「死亡の原因」「死因の種類」の記載例を示します。

### 【適切な記載】

		施設 の 名 称				
(14)	死亡の原因	(ア) 直接死因	間質性肺炎	発病（発症） 又は受傷から死亡までの期間	約2年	
		(イ) (ア) の原因	関節リウマチ		約25年	
		(ウ) (イ) の原因				
		(エ) (ウ) の原因				
		直接には死因に関係しないが1療の傷病経過に影響を及ぼした傷病名等				
<p>◆1療、2療ともに病歴の終末期の状態としての心不全、呼吸不全等は書かないでください</p> <p>◆1療では、最も死亡に影響を与えた傷病名を医学的因果関係の順番で書いてください</p> <p>◆1療の傷病名の記載は各欄一つにししてください</p> <p>ただし、欄が不足する場合は(エ)欄に残りを医学的因果関係の順番で書いてください</p>		手術	①無 2有	部位及び主要所見	手術年月日	平成 年 月 日 昭和 年 月 日
		解剖	①無 2有	主要所見		
(15)	死因の種類	<p>①病死及び自然死</p> <p>不慮の外因死   2交通事故 3転倒・転落 4溺水 5煙、火災及び火焔による傷害  </p> <p>外因死   6窒息 7中毒 8その他  </p> <p>その他及び不詳の外因死   9自殺 10他殺 11その他及び不詳の外因  </p> <p>12不詳の死</p>				
(16)	外因死の追加事項	傷害が発生したとき	平成・昭和 年 月 日 午前・午後 時 分	傷害が発生したところ	都道府県	
		傷害が発生したところの種類	1住居 2工場及び建築現場 3道路 4その他 ( )	市 区 町 村		
◆伝聞又は推定情報の場合でも書いてください		手段及び状況				

### 【解説】

関節リウマチに伴う間質性肺炎での死亡例です。

関節リウマチでは、間質性肺炎を伴う場合があり、しばしば重症化し、予後にも影響します。

本例では間質性肺炎の急性増悪により死亡したと考えられ、原死因は関節リウマチと考えられます。

死亡の原因の記載の際には、疾病の因果関係を考慮した記載をお願いします。

## E47 間質性肺炎のある関節リウマチ患者の脳出血

72歳の女性、約25年間関節リウマチの治療を受けている。  
2年前から咳や息切れを自覚し、間質性肺炎の診断を受け、3週間前から入院していた。朝、意識状態の低下があり、頭部CT検査にて右被殻に出血巣がみられた。治療を受けるも2日後に死亡した。  
この場合に発行する書類、「死亡の原因」「死因の種類」の記載例を示します。

【適切な記載】

(14)	死亡の原因	施設 の 名 称		発病（発症） 又は受傷から死亡までの期間  ◆年、月、日等の単位で書いてください ただし、1日未満の場合は、時、分等の単位で書いてください （例：1年3か月、5時間20分）	約2日	
		(ア) 直接死因	右被殻部脳出血			
		(イ) (ア) の原因				
		(ウ) (イ) の原因				
		(エ) (ウ) の原因				
(15)	死因の種類	Ⅰ Ⅱ ◆1欄では、最も死亡に影響を与えた傷病名を医学的因果関係の順番で書いてください ◆1欄の傷病名の記載は各欄一つにしてください ただし、欄が不足する場合は(エ)欄に残りを医学的因果関係の順番で書いてください				
		Ⅲ 直接には死因に関与しないがⅠ欄の傷病経過に影響を及ぼした傷病名等 関節リウマチ、間質性肺炎				
(16)	外 国 死 の追加事項	手術	① 2有	部位及び主要所見	手術年月日	平成 年 月 日 昭和 年 月 日
		解剖	① 2有	主要所見		
		① 病死及び自然死 外国死 不慮の外国死 { 2交通事故 3転倒・転落 4溺水 5煙、火災及び火端による傷害 } { 6窒息 7中毒 8その他 } その他及び不詳の外国死 { 9自殺 10他殺 11その他及び不詳の外国死 } 12不詳の死				
(16)	外 国 死 の追加事項	傷害が発生したとき	平成・昭和 年 月 日 午前・午後 時 分	傷害が発生したところ	都道府県 市 区 町村	
		傷害が発生したところの種類	1 住居 2 工場及び建築現場 3 道路 4 その他 ( )			
		手段及び状況				

### 【解説】

関節リウマチと間質性肺炎の患者さんが入院中に脳出血をきたした事例です。  
基礎疾患としての関節リウマチと間質性肺炎がありますが、直接死因は脳出血によると考えられます。  
このような場合は、直接の因果関係はないと思われ、「傷病経過に影響した傷病名」としてとらえるかどうかは、医師の判断によります。

## E48 原発不明癌

70歳の男性、6か月前から頸部リンパ節の腫脹を自覚していた。病理検査で癌の診断を受け、全身の精査を行ったが、原発巣を特定出来なかった。全身状態が徐々に悪化し、死亡した。

この場合に発行する書類、「死亡の原因」「死因の種類」の記載例を示します。

【適切な記載】

		施設 の 名 称			
(14)	死亡の原因	(ア) 直接死因	原発巣不明の癌		約6か月
		(イ) (ア) の原因			発病（発症）又は受傷から死亡までの期間  ◆年、月、日等の単位で書いてください。ただし、1日未満の場合は、時、分等の単位で書いてください。 （例：1年3か月、5時間20分）
		(ウ) (イ) の原因			
		(エ) (ウ) の原因			
		直接には死因に関係しないが1療の傷病経過に影響を及ぼした傷病名等			
	手術	① 有 2 有	部位及び主要所見	手術年月日	平成 年 月 日 昭和
	解剖	① 有 2 有	主要所見		
(15)	死因の種類	① 死及び自然死 不慮の外因死 { 2 交通事故 3 転倒・転落 4 溺水 5 煙、火災及び火端による傷害 } 外因死 { 6 窒息 7 中毒 8 その他 } その他及び不詳の外因死 { 9 自殺 10 他殺 11 その他及び不詳の外因 } 12 不詳の死			
(16)	外因死の追加事項	傷害が発生したとき	平成・昭和 年 月 日 午前・午後 時 分	傷害が発生したところ	都道府県 市 区 町村
		傷害が発生したところの種類	1 住居 2 工場及び建築現場 3 道路 4 その他 ( )		
		◆伝聞又は確定情報の場合でも書いてください 手段及び状況			
(17)	生後1年未満で病死した場合の追加事項	出生時体重	単胎・多胎の別		妊娠週数
		グラム	1 単胎 2 多胎 ( 子中第 子 )		満 週
		妊娠・分娩時における母体の病歴又は異状		母の生年月日	前回までの妊娠の結果 出生児 人 胎 死産児 胎 (妊娠満22週以後に限る)
		1 無 2 有	3 不詳	平成 年 月 日 昭和	
(18)	その他特に付言すべきことから 頸部のリンパ節腫脹で受診、病理検査で癌を確認したが、原発巣を確認できなかった。				

### 【解説】

癌の原発巣が不明の事例です。

病理解剖により、死因の詳細な検索を行うのが望ましいと思いますが、様々な事情でこれ以上の検索ができない場合もあります。

このような場合は、「原発巣不明の癌」という表記もやむをえないと思います。

## E49 感染性心内膜炎

28歳の男性、2週間前から発熱や腹痛があり、病院を受診したところ、感染性心内膜炎の診断を受けた。即日入院し、抗生物質の投与が行われたが、翌朝、突然痙攣を来し、意識状態も悪化した。頭部CT検査で広汎な脳梗塞を指摘され、治療を受けるも翌日死亡した。

なお、血液培養で緑色連鎖球菌が検出された。

この場合に発行する書類、「死亡の原因」「死因の種類」の記載例を示します。

### 【適切な記載】

		施設 の 名 称				
(14)	死亡の原因	(ア) 直接死因	脳梗塞	発病（発症） 又は受傷から 死亡までの 期間  ◆年、月、日 等の単位で書 いてください ただし、1 日未満の場合 は、時、分等 の単位で書い てください (例：1年 3 か月、5時間 30分)	約1日	
		(イ) (ア) の原因	感染性心内膜炎		約2週間	
		(ウ) (イ) の原因				
		(エ) (ウ) の原因				
		直接には死因に関 係しないが1療の 傷病経過に影響を 及ぼした傷病名等				
(15)	死 因 の 種 類	手術	① 2有	部位及び主要所見	手術年月日	平成 年 月 日 昭和 年 月 日
		解剖	① 2有	主要所見		
(16)	外 因 死 の 追 加 事 項	① 死及び自然死 不慮の外因死 { 2 交通事故 3 転倒・転落 4 溺水 5 煙、火災及び火端による傷害 } 外因死 { 6 窒息 7 中毒 8 その他 } その他及び不詳の外因死 { 9 自殺 10 他殺 11 その他及び不詳の外因 } 12 不詳の死				
(16)	外 因 死 の 追 加 事 項	傷害が発生したとき	平成・昭和 年 月 日 午前・午後 時 30分	傷害が発生したところ	都道府県 市 区 町村	
		傷害が発生したところの種類	1 住居 2 工場及び建築現場 3 道路 4 その他 ( )			
		◆伝聞又は確定情報の場合でも書いてください				
		手段及び状況				

### 【解説】

感染性心内膜炎に起因する脳梗塞と考えられる事例です。

全身性の塞栓症を合併する頻度は比較的高く、特に中枢神経系の塞栓症は病態が重篤で、死亡率も高いといわれます。

死亡の原因の記載にあたっては、関連する病態を詳細に検討する必要があります。

## E50 外因の関与が疑われる感染性心内膜炎

28歳の男性、2週間前から発熱や腹痛があり、病院を受診したところ、感染性心内膜炎の診断を受けた。即日入院し、抗生物質の投与が行われたが、翌朝、突然痙攣を来し、蘇生処置を行うも死亡した。治療に関連しない注射痕が左右肘窩にみられ、尿検査で覚せい剤が検出された。死因との関連は不明である。

この場合に発行する書類、「死亡の原因」「死因の種類」の記載例を示します。

### 【適切な記載】

		施設 の 名 称			
(14)	死亡の原因	(ア) 直接死因	感染性心内膜炎		約2週間
		(イ) (ア) の原因	不 詳		不 詳
		(ウ) (イ) の原因			
		(エ) (ウ) の原因			
		発病（発症）又は受傷から死亡までの期間	◆年、月、日等の単位で書いてください。1日未満の場合は、時、分等の単位で書いてください。 (例：1年 3か月 5時間 20分)		
		◆1欄では、最も死亡に影響を与えた傷病名を医学的因果関係の順番で書いてください			
		◆1欄の傷病名の記載は各欄一つにしてください			
		ただし、欄が不足する場合は(エ)欄に残りを医学的因果関係の順番で書いてください			
		手 術	① 有 2 有	部位及び主要所見	手術年月日 平成 年 月 日 昭和 年 月 日
		解剖	① 有 2 有	主要所見	
(15)	死 因 の 種 類	1 病死及び自然死 不慮の外因死 { 2 交通事故 3 転倒・転落 4 溺水 5 煙、火災及び火焔による傷害 } 6 窒息 7 中毒 8 その他 その他及び不詳の外因死   9 自殺 10 他殺 11 その他及び不詳の外因   12 不詳の死			
(16)	外 因 死 の 追 加 事 項	傷害が発生したとき 平成・昭和 年 月 日 午前・午後 時 分 傷害が発生したところ 1 住居 2 工場及び建築現場 3 道路 4 その他 ( ) 手段及び状況	傷害が発生したとき 平成・昭和 年 月 日 午前・午後 時 分 傷害が発生したところ 1 住居 2 工場及び建築現場 3 道路 4 その他 ( ) 手段及び状況	傷害が発生したとき 平成・昭和 年 月 日 午前・午後 時 分 傷害が発生したところ 1 住居 2 工場及び建築現場 3 道路 4 その他 ( ) 手段及び状況	傷害が発生したとき 平成・昭和 年 月 日 午前・午後 時 分 傷害が発生したところ 1 住居 2 工場及び建築現場 3 道路 4 その他 ( ) 手段及び状況
		◆伝聞又は確定情報の場合でも書いてください			
(17)	生後1年未満で病死した場合の追加事項	出生時体重 グラム 妊娠・分娩時における母体の病歴又は異状 1 無 2 有 [ ] 3 不詳	単胎・多胎の別 1 単胎 2 多胎 ( 子中第 子 ) 母の生年月日 平成 年 月 日 昭和 年 月 日	妊娠週数 満 週 前回までの妊娠の結果 出生児 死産児 人胎 (妊娠満22週以後に限る)	追加事項 追加事項 追加事項
(18)	その他特付すべきことから 感染性心内膜炎の診断を受け、治療中に死亡した。心内膜炎の原因は不詳。				

### 【解説】

臨床的に感染性心内膜炎と診断された事例ですが、その原因として薬物乱用が疑われる事例です。明らかな病死と判断できない場合は、警察への届出が必要です。薬物の関与の度合いが具体的に判断できない場合は、原死因を「不詳」とし、死因の種類は「12. 不詳の死」を選択します。このような事例では多くの場合、法医学解剖が実施されることになります。



## E51 珪肺

72歳の男性、独居。約30年間トンネル工事に従事していた。15年前から労作時の呼吸困難があり、珪肺症と診断されている。10年前から在宅酸素療法を実施しているが、呼吸機能が徐々に低下していた。

6月3日、自宅を訪問したヘルパーが、室内で死亡しているのを発見した。警察の検視を受け、犯罪の疑いはなく、死後約1日と推定された。死因は珪肺による慢性呼吸不全と考えられた。

この場合に発行する書類、「死亡の原因」「死因の種類」の記載例を示します。

### 【適切な記載】

		施設 の 名 称			
(14)	死亡の原因	(ア) 直接死因	慢性呼吸不全	発病（発症）又は受傷から死亡までの期間  ◆年、月、日等の単位で書いてください。1日未満の場合は、時、分等の単位で書いてください。 (例：1年3か月、5時間20分)	約10年
		(イ) (ア) の原因	珪肺症（推定）		約15年
		(ウ) (イ) の原因			
		(エ) (ウ) の原因			
		直接には死因に関係しないが1療の傷病経過に影響を及ぼした傷病名等			
(15)	死因の種類	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫	① 病死及び自然死 ② 交通事故 ③ 転倒・転落 ④ 溺水 ⑤ 煙、火災及び火焔による傷害 ⑥ 窒息 ⑦ 中毒 ⑧ その他 ⑨ 自殺 ⑩ 他殺 ⑪ その他及び不詳の外因 ⑫ 不詳の死		
		① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫			
(16)	外因死の追加事項	傷害が発生したとき	平成・昭和 年 月 日 午前・午後 時 分	傷害が発生したところ	都道府県 市 区 町村
		傷害が発生したところの種別	1 住居 2 工場及び建築現場 3 道路 4 その他 ( )		
		手段及び状況			

### 【解説】

生前の状態から、慢性呼吸不全があり、その原因は「珪肺症」と推定されます。目撃者のない自宅死亡例では、警察への届出が必要なことも多いと思います。

生前の既往症に関する情報が得られにくい場合もありますが、死体の所見のみならず、生前の状態もふまえ総合的に死因を判断する必要があります。



## E52 飛び降り自殺後のPTE

45歳の男性、X年6月5日午後1時頃、路上に倒れているところを発見された。5階建てビルの屋上に靴と遺書がのこされており、病院に搬送された。下肢と骨盤の骨折があるが、病因での治療で命を取り留めた。

意識も清明で、しばらく臥床が続いた。主治医とのやりとりの中で、自分で飛び降りたことを話した。転落の8日後の朝に突然、呼吸困難を訴え、そのまま意識を消失、心停止となった。蘇生処置に反応なく、死亡が確認された。超音波検査等の結果から、直接死因は肺動脈血栓塞栓症と考えられた。

警察に届出し、検視を受け、転落は自らの行為によるものと判断された。

この場合に発行する書類、「死亡の原因」「死因の種類」の記載例を示します。

### 【適切な記載】

(14)	死亡の原因	施設の名義		
		(ア) 直接死因	肺動脈血栓塞栓症	短時間
		(イ) (ア) の原因	深部静脈血栓症	不詳
		(ウ) (イ) の原因	骨盤及び下肢骨折	約8日
		(エ) (ウ) の原因		
(15)	死因の種類	1 病死及び自然死		
		2 交通事故 3 転倒・転落 4 溺水 5 煙、火災及び火傷による傷害 6 窒息 7 中毒 8 その他 9 自殺 10 他殺 11 その他及び不詳の外因死 12 不詳の死		
(16)	外国死の追加事項	傷害が発生したとき	X年 6月 5日 午前 午後 1時 頃	傷害が発生したところ
		傷害が発生したところの種類	1 住居 2 工場及び建築現場 3 道路 4 その他 ( 路上 )	○ ○ 都道府県 区 市 町 村
(17)	生後1年未満で病死した場合の追加事項	出生時体重	グラム	単胎・多胎の別
		1 無 2 有	3 不詳	母の生年月日 平成 年 月 日 昭和 年 月 日
(18)	その他特に付すべきことから	経産・分娩時における母体の病歴又は費区		
		前問までの妊娠の結果 出生児 入胎 死産児 入胎 (妊娠満22週以後に限る)		
病院に搬送され治療を受けていたが、状態が急変したという。				

### 【解説】

自殺をはかり一命をとりとめたものの、長期臥床に起因する肺動脈血栓塞栓症と考えます。

検視の際に、治療を担当した主治医に立ち会いと書類の発行を求められることもあります。その場合は、「死亡診断書」、主治医以外が検案する場合は、「死体検案書」になります。

死因の種類は、この事例では警察の判断もふまえ、「9.自殺」となりますが、不慮の事故、自殺、他殺の判断が困難な場合は、「11.その他及び不詳の外因死」を選択します。

## E53 脂肪塞栓症

58歳の男性、X年6月10日午前11時頃、道路で工事作業中に、普通乗用車と衝突し、病院に搬送された。体幹部と下肢を打撲し、大腿骨の骨幹部骨折と上腕骨頭に粉碎骨折がみられ、入院となった。

入院時、意識は清明で、昼食も普通に摂取した。事故の2日後に意識状態が悪化し、頭部CT検査では頭蓋内に出血などの異常はみられなかった。その後血圧が低下し、死亡した。

警察に届出し、検視を受けた。死因は脂肪塞栓症が推測された。

この場合に発行する書類、「死亡の原因」「死因の種類」の記載例を示します。

### 【適切な記載】

		施設 の 名 称			
(14)	死亡の原因	(ア) 直接死因	脂肪塞栓症(推定)	免病(免症)又は受傷から死亡までの期間	不詳
		(イ) (ア)の原因	大腿骨及び上腕骨骨折		約2日
		(ウ) (イ)の原因	体幹及び下肢の打撲		約2日
		(エ) (ウ)の原因			
		表層には死因に関連しないが1層の傷病経過に影響を及ぼした傷病名等			
◆1層目欄ともに死因の終末期の状態としての心不全、呼吸不全等は書かないでください					
◆1層目では、最も死亡に影響を与えた傷病名を医学的因果関係の観点で書いてください					
◆1層目の傷病名の記載は各欄一つにしてください					
ただし、欄が不足する場合は(エ)欄に残りを医学的因果関係の観点で書いてください					
手術		① 2有	部位及び主要所見	手術年月日	平成 年 月 日 昭和 年 月 日
解剖		1無 ②有	主要所見 大腿骨は骨幹部で骨折、上腕骨は粉碎骨折する。 組織学的検査で肺に多数の脂肪滴。		
(15)	死因の種類	1病死及び自然死 2外因死 不慮の外因死 ③交通事故 3転倒・転落 4溺水 5煙、火災及び火端による傷害 6窒息 7中毒 8その他 9自殺 10他殺 11その他及び不詳の外因 12不詳の死			
(16)	外因死の追加事項	傷害が発生したとき ④平成 X年 6月 10日 ⑤午前11時頃 傷害が発生したところの種類 1住居 2工場及び建築現場 3道路 ⑥その他(路上) 4その他 手段及び状況 道路で作業中、普通乗用車と衝突したという。			
		傷害が発生したところの種類 ⑦△△区△△町△△ 手段及び状況			
(17)	生後1年未満で病死した場合の追加事項	出生時体重	単胎・多胎の別	妊娠週数	
		グラム	1単胎 2多胎(子中第子)	満週	
		妊娠・分娩時における母体の傷病又は異状	母の生年月日	前回までの妊娠の結果	人胎
		1無 2有	平成 年 月 日 昭和 年 月 日	出生児 死産児 (妊娠満22週以後に限る)	
(18)	その他特に付言すべきことから	病院に搬送され入院治療を受けていたが、状態が急変したという。			

### 【解説】

交通事故で骨折を生じ、治療中の急変死亡した事例です。

このような場合には、警察の検視ののち、法医学解剖になることが多いと思います。脂肪塞栓症自体も、検案のみでの判断は困難だと思いますし、解剖検査を行った場合でも、後日の組織検査の結果をふまえ、最終的な診断に達する場合もあります。(解剖終了直後、死亡の原因は「不詳(検索中)」にて提出。(E37 参照))

死因の種類は、この事例では「2.交通事故」となります。

## E54 気管支喘息重積発作

38歳の男性、気管支喘息の既往があり、時折発作が出現し、吸入薬を用いている。X年3月10日、朝から喘息の症状があり、妻が車を運転して病院に向かっていたが、呼吸困難が増強し、途中で救急車を要請した。病院到着時には心肺停止状態で、気管内挿管を行い蘇生処置を受けるも回復せず、死亡が確認された。警察に届出し、検視を受けた。死因は気管支喘息の重積発作と考えた。

この場合に発行する書類、「死亡の原因」「死因の種類」の記載例を示します。

### 【適切な記載】

(14)	死亡の原因	(ア) 直接死因	窒息	発病（発症）又は受傷から死亡までの期間  ◆年、月、日等の単位で書いてください。ただし、1日未満の場合は、時、分等の単位で書いてください。 (例：1年3か月、5時間20分)	短時間
		(イ) (ア) の原因	気管支喘息重積発作		不詳
		(ウ) (イ) の原因			
		(エ) (ウ) の原因			
(15)	死因の種類	① 死及び自然死			
		不慮の外因死 { 2 交通事故 3 転倒・転落 4 溺水 5 煙、火災及び火傷による傷害 } 外因死 { 6 窒息 7 中毒 8 その他 } その他及び不詳の外因死 { 9 自殺 10 他殺 11 その他及び不詳の外因 } 12 不詳の死			
(16)	外因死の追加事項	傷害が発生したとき 平成・昭和 年 月 日 午前・午後 時 分 傷害が発生したところの種別 1 住居 2 工場及び建築現場 3 道路 4 その他 ( ) 手続及び状況	傷害が発生したところ 市 区 町 村 都道府県		
		◆伝聞又は確定情報の場合でも書いてください			
(17)	生後1年未満で病死した場合の追加事項	出生時体重 グラム 経産・分娩時における母体の病歴又は異状 1 無 2 有 { } 3 不詳	単胎・多胎の別 1 単胎 2 多胎 ( 子中第 子 ) 母の生年月日 平成 年 月 日 昭和 年 月 日	妊娠週数 満 週 前回までの妊娠の結果 出生児 人 胎 死産児 胎 (妊娠満22週以後に限る)	
		その他特に付言すべきことがら 朝から喘息症状があり、心肺停止状態で病院に搬送され、蘇生処置に反応なく死亡が確認された。			

### 【解説】

気管支喘息の重積発作による死亡です。

生前の状況も併せて死因が判断できる場合もありますが、不明な場合には警察の検視を受ける事もあります。

検案時の死体所見や状況、既往歴などから死因を判断できない場合は、可能な限り剖検で死因を判断すべきだと思います。

また、「その他付言すべきことがら」は、書類作成者が補足すべき内容があると考えた場合に記載します。

## E55 誤嚥性肺炎

75歳の女性、約10年前からパーキンソン病と診断され、現在Hoehn-Yahr 分類Ⅲ度。要介助状態で嚥下障害がある。2週間ほど前から発熱、喘鳴がみられ、病院を受診したところ肺炎と診断され、入院した。治療を受けるも肺炎が改善せず、死亡した。

この場合に発行する書類、「死亡の原因」「死因の種類」の記載例を示します。

### 【適切な記載】

		施設 の 名 称			
(14)	死亡の原因	(ア) 直接死因	誤嚥性肺炎	発病（発症） 又は受傷から死亡までの期間	約2週間
		(イ) (ア) の原因	パーキンソン病		約10年
		(ウ) (イ) の原因		◆年、月、日等の単位で書いてください。ただし、1日未満の場合は、時、分等の単位で書いてください。 (例：1年 3か月 5時間 20分)	
		(エ) (ウ) の原因			
		◆1欄では、最も死亡に影響を与えた傷病名を医学的因果関係の順番で書いてください。 ◆1欄の傷病名の記載は各欄一つにしてください。 ただし、欄が不足する場合は(エ)欄に残りを医学的因果関係の順番で書いてください。	Ⅱ 直接には死因に関与しないが1欄の傷病経過に影響を及ぼした傷病名等		
手術	① 有 2 有	部位及び主要所見	手術年月日	平成 昭和 年 月 日	
解剖	① 有 2 有	主要所見			
(15)	死因の種類	① 病死及び自然死 ② 不慮の外因死 { 2 交通事故 3 転倒・転落 4 溺水 5 煙、火災及び火傷による傷害 } ③ 外因死 { 6 窒息 7 中毒 8 その他 } ④ その他及び不詳の外因死 { 9 自殺 10 他殺 11 その他及び不詳の外因 } ⑤ 12 不詳の死			
(16)	外因死の追加事項	傷害が発生したとき	平成・昭和 年 月 日 午前・午後 時 分	傷害が発生したところ	都道府県
		傷害が発生したところの種別	1 住居 2 工場及び建築現場 3 道路 4 その他 ( )	市 区 町 村	
		◆伝聞又は確定情報の場合でも書いてください			
		手段及び状況			

### 【解説】

パーキンソン病の合併症としての誤嚥性肺炎による死亡です。

死因を判断する場合には、病態のみならず、生前の状況や経過も考慮します。

「その他付言すべきことがら」は、書類作成者が補足すべき内容があると考えた場合に記載します。



## E56 転倒

75歳の女性、約10年前からパーキンソン病と診断され、現在Hoehn-Yahr 分類Ⅱ度。一部介助状態である。X年9月20日午前9時頃、自宅のベッドから移動する際に転倒し、頭部を打撲した。まもなく意識レベルが低下したため、家人が救急車を要請し、病院に搬送された。頭部CT検査にて急性硬膜下血腫と診断され、開頭血腫除去術が行われたが、脳腫脹が進行し、転倒の約12時間後に死亡した。

この場合に発行する書類、「死亡の原因」「死因の種類」の記載例を示します。

### 【適切な記載】

(14)	死亡の原因	施設 の 名 称		発病（発症） 又は受傷から死亡までの期間	約12時間	
		(ア) 直接死因	急性硬膜下血腫			
		(イ) (ア) の原因	頭部打撲			
		(ウ) (イ) の原因				
(15)	死因の種類	(エ) (ウ) の原因		◆年、月、日等の単位で書いてください。ただし、1日未満の場合は、時、分等の単位で書いてください（例：1年3か月、5時間20分）	約10年	
		表層には死因に関係しないが1層の傷病経過に影響を及ぼした傷病名等	パーキンソン病			
		手術	1 無 ② 有 部位及び主要所見 開頭血腫除去術、硬膜下腔に血腫			手術年月日 昭和 X 年 9 月 20 日
		解剖	① 無 2 有 主要所見			
(16)	外 因 死 の 追 加 事 項	1 病死及び自然死 外因死 不慮の外因死 ③ 転倒・転落 4 溺水 5 煙、火災及び火焔による傷害 6 窒息 7 中毒 8 その他 その他及び不詳の外因死 9 自殺 10 他殺 11 その他及び不詳の外因 12 不詳の死				
		傷害が発生したとき 昭和 X 年 9 月 20 日 午前9時頃 傷害が発生したところの種別 ① 住居 2 工場及び建築現場 3 道路 4 その他 手段及び状況 自宅でベッドから移動する際に転倒し、頭部を打撲したという。				

### 【解説】

転倒による頭部打撲に起因する急性硬膜下血腫による死亡です。

歩行障害などのパーキンソン病による生活機能の低下は、転倒の誘因になっていると思いますが、転倒という事象自体は直接的な影響とはいいいえず、Ⅱ欄に記載します。

この場合は外因死と考えられますので、警察への届出と、検視を受ける必要があります。

## E57 アルツハイマー病

86歳の女性、約10年前にアルツハイマー病と診断され、現在ほぼ寝たきりの状態である。しばしば熱発がみられ、入院して治療を受けている。導尿による尿が混濁している。3日前から再び39℃台の高熱が続き、本今朝、ショック状態となり、死亡した。下部尿路感染から敗血症をきたしたものと考えられた。

この場合に発行する書類、「死亡の原因」「死因の種類」の記載例を示します。

### 【適切な記載1】

施設 の 名 称			
(14) 死亡の原因	(ア) 直接死因 <b>敗血症(推定)</b>	発病(発症)又は受傷から死亡までの期間  ◆年、月、日等の単位で書いてください。ただし、1日未満の場合は、時、分等の単位で書いてください。 (例：1年 3か月 5時間 20分)	約1日
	(イ) (ア)の原因 <b>下部尿路感染</b>		約3日
	(ウ) (イ)の原因 <b>アルツハイマー病</b>		約10年
	(エ) (ウ)の原因		
◆1欄では、最も死亡に影響を与えた傷病名を医学的因果関係の順番で書いてください。 ◆1欄の傷病名の記載は各欄一つにしてください。 ただし、欄が不足する場合は(エ)欄に残りを医学的因果関係の順番で書いてください。	手術 ① 2有	部位及び主要所見	手術年月日 平成 昭和 年 月 日
	解剖 ① 2有	主要所見	
(15) 死因の種類	① 死及び自然死 不慮の外因死 { 2 交通事故 3 転倒・転落 4 溺水 5 煙、火災及び火傷による傷害 } 外因死 { 6 窒息 7 中毒 8 その他 } その他及び不詳の外因死 { 9 自殺 10 他殺 11 その他及び不詳の外因 } 12 不詳の死		
(16) 外因死の追加事項	傷害が発生したとき 平成・昭和 年 月 日 午前・午後 時 分	傷害が発生したところ	都道府県 市 区 町村
	傷害が発生したところの種別 1 住居 2 工場及び建築現場 3 道路 4 その他 ( )		
◆伝聞又は確定情報の場合でも書いてください。			
手段及び状況			



【適切な記載2】

		施設 の 名 称			
(14)	死亡の原因	(ア) 直接死因	敗血症(推定)	発病(発症)又は受傷から死亡までの期間	約1日
		(イ) (ア)の原因	下部尿路感染		約3日
		(ウ) (イ)の原因			
		(エ) (ウ)の原因			
		Ⅱ	直接には死因に関与しないがⅠ欄の傷病経過に影響を及ぼした傷病名等	アルツハイマー病	◆年、月、日等の単位で書いてください。ただし、1日未満の場合は、時、分等の単位で書いてください。(例：1年3か月、5時間20分)
	手術	①所 2有	部位及び主要所見	手術年月日	平成 年 月 日 昭和
	解剖	①所 2有	主要所見		
(15)	死因の種類	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ 死及び自然死 不慮の外因死 { 2交通事故 3転倒・転落 4溺水 5煙、火災及び火傷による傷害 } 外因死 { 6窒息 7中毒 8その他 } その他及び不詳の外因死 { 9自殺 10他殺 11その他及び不詳の外因 } 12 不詳の死			
(16)	外 因 死 の 追 加 事 項	傷害が発生したとき	平成・昭和 年 月 日 午前・午後 時 分	傷害が発生したところ	都道府県 市 区 町村
		傷害が発生したところの種類	1 住居 2 工場及び建築現場 3 道路 4 その他 ( )		
		◆伝聞又は確定情報の場合でも書いてください			
		手段及び状況			

【解説】

寝たきりのため下部尿路感染症を来とし、敗血症によるショックとなったと考えられる事例です。

寝たきりになった原因はアルツハイマー病によるものであり、因果関係ありと判断される場合もあると思います。一方、アルツハイマー病はあくまで誘因である、という考えもあるかもしれません。この点は、書類作成者の判断に委ねられています。

## E58 髄膜炎

2歳の男児、昨日夜から発熱し、本日は少量の食事を摂取したものの、嘔吐した。発熱が持続し、夕方からぐったりしてきたため、病院に連れて行ったところ、診察中に痙攣をきたした。入院し、治療を受けるも、状態が悪化し死亡した。髄液検査で白血球数の増加があり、塗抹標本で肺炎球菌と思われるグラム陽性の双球菌が観察された。

この場合に発行する書類、「死亡の原因」「死因の種類」の記載例を示します。

### 【適切な記載】

		施設 の 名 称			
(14)	死亡の原因	(ア) 直接死因	肺炎球菌性髄膜炎		約1日
		(イ) (ア) の原因			発病（発症）又は受傷から死亡までの期間
		(ウ) (イ) の原因			◆年、月、日等の単位で書いてください ただし、1日未満の場合は、時、分等の単位で書いてください (例：1年3か月、5時間20分)
		(エ) (ウ) の原因			
		直接には死因に関係しないが1層の傷病経過に影響を及ぼした傷病名等			
(15)	死因の種類	① 死及び自然死	不慮の外因死 { 2 交通事故 3 転倒・転落 4 溺水 5 煙、火災及び火焔による傷害 } 6 窒息 7 中毒 8 その他 その他及び不詳の外因死   9 自殺 10 他殺 11 その他及び不詳の外因   12 不詳の死		
		② 死及び自然死			
(16)	外因死の追加事項	傷害が発生したとき	平成・昭和 年 月 日 午前・午後 時 分	傷害が発生したところ	都道府県 市 区 町村
		傷害が発生したところの種類	1 住居 2 工場及び建築現場 3 道路 4 その他 ( )		
		手段及び状況			

### 【解説】

髄膜炎による死亡と考えられます。電撃的な経過をたどる例もあるといわれます。

臨床検査の所見（グラム染色など）から、起因菌が判断できるようでしたら、分かる範囲で記載します。髄膜炎が疑われる事例での髄液検査は、細菌検査が可能な場合には死後の死体検案においても有用な場合もあります。

## E59 癌性腹膜炎

59歳の女性、3年前に卵巣癌の診断を受け、手術を受けた。

3か月前から腹部膨満感を自覚し、検査を受けたところ、癌性腹膜炎で腹水貯留を生じていることが明らかになった。化学療法により腹水は軽減したが、1週間前から腹部膨満と嘔吐がみられ、腸閉塞と診断され、治療を継続したが死亡した。

この場合に発行する書類、「死亡の原因」「死因の種類」の記載例を示します。

### 【適切な記載】

(14)	死亡の原因	◆1欄、3欄ともに死因の終末期の状態としての心不全、呼吸不全等は書かないでください ◆1欄では、最も死亡に影響を与えた傷病名を医学的因果関係の順番で書いてください ◆1欄の傷病名の記載は各欄一つにしてください ただし、欄が不足する場合は(エ)欄に残りを医学的因果関係の順番で書いてください	施設の名義	(ア) 直接死因	腸閉塞	発病(発症)又は受傷から死亡までの期間	約1週間
			(イ) (ア)の原因	癌性腹膜炎		約3か月	
			(ウ) (イ)の原因	卵巣癌	◆年、月、日等の単位で書いてください ただし、1日未満の場合は、時、分等の単位で書いてください (例：1年3か月、5時間20分)	約3年	
			(エ) (ウ)の原因				
			直接には死因に関与しないが1欄の傷病名に及ぼした傷病名等				
(15)	死因の種類	手術	① 2有	部位及び主要所見	手術年月日	平成 年 月 日	
			解剖	① 2有	主要所見		
(16)	死因の追加事項	◆伝聞又は確定情報の場合でも書いてください	① 6死及び自然死				
			外因死	不慮の外因死 { 2 交通事故 3 転倒・転落 4 溺水 5 煙、火災及び火場による傷害 } 6 窒息 7 中毒 8 その他 その他及び不詳の外因死 { 9 自殺 10 他殺 11 その他及び不詳の外因 } 12 不詳の死			
(16)	外因死の追加事項	◆伝聞又は確定情報の場合でも書いてください	傷害が発生したとき	平成・昭和 年 月 日 午前・午後 時 分	傷害が発生したところ	都道府県	
			傷害が発生したところの種類	1 住居 2 工場及び建築現場 3 道路 4 その他 ( )	市 区 町村		
(16)	外因死の追加事項	◆伝聞又は確定情報の場合でも書いてください	手段及び状況				

### 【解説】

癌性腹膜炎による腸閉塞が原因の死亡例です。

原病(卵巣癌)に起因する死亡ですので、I欄の(ア)に直接「卵巣癌」と記載する場合がありますが、各種の検査結果から死亡に至る病態が明らかな例については、できるだけ詳細な病態の記載をお願いします。

この記載例の作成は  
平成28-29年度厚生労働科学研究費補助金  
(統計情報総合 研究事業)  
「適切な原死因記載のための教育コンテンツの開発」  
により行われた。

### 研究代表者

木下博之 香川大学医学部人間社会環境医学講座・法医学 教授

### 研究分担者

池松 和哉 長崎大学大学院医歯薬学総合研究科・法医学分野 教授

横田順一郎 独立行政法人堺市立病院機構 副理事長

加藤 稲子 三重大学大学院周産期発達障害予防学講座・小児科学 教授

鷺見 幸彦 国立長寿医療研究センター・神経内科 副院長

横井 英人 香川大学医学部附属病院・医療情報部 教授

宮武 伸行 香川大学医学部人間社会環境医学講座・衛生学 准教授

## 確認問題 1

58歳の男性。X年2月4日午前5時頃、道路脇の草むらに倒れているところを発見され、心肺停止状態で病院に搬送された。発見時の体温が31℃、検査で明らかな外傷はなく、復温により、一旦心拍は再開したが、意識の回復なく同日午前9時10分に死亡した。血液から0.5mg/mlのエタノールが検出され、軽度の酩酊状態と判断された。警察の捜査では、前日夜に発見場所近くの居酒屋で午前2時頃まで飲酒していたというが、その後の足取りは不明。犯罪性はないと判断された。

この場合に発行する書類の「死亡の原因」「死因の種類」をどのように記載したらよいでしょうか。

## 確認問題 1

58歳の男性。X年2月4日午前5時頃、道路脇の草むらに倒れているところを発見され、心肺停止状態で病院に搬送された。発見時の体温が31℃、検査で明らかな外傷はなく、復温により、一旦心拍は再開したが、意識の回復なく同日午前9時10分に死亡した。血液から0.5mg/mlのエタノールが検出され、軽度の酩酊状態と判断された。警察の捜査では、前日夜に発見場所近くの居酒屋で午前2時頃まで飲酒していたというが、その後の足取りは不明。犯罪性はないと判断された。

この場合に発行する書類の「死亡の原因」「死因の種類」をどのように記載したらよいでしょうか。

### 【記載例】

		施設の名義			
(14)	死亡の原因	(ア) 直接死因	低体温症	発病(発症)又は受傷から死亡までの期間	不詳
		(イ) (ア)の原因			
		(ウ) (イ)の原因			
		(エ) (ウ)の原因			
		直接には死因に関与しないが1欄の傷病経過に影響を及ぼした傷病名等	酩酊状態	不詳	
◆1欄、2欄ともに死因の終末期の状態としての心不全、呼吸不全等は書かないでください		◆1欄では、最も死亡に影響を与えた傷病名を医学的因果関係の順番で書いてください		◆1欄の傷病名の記載は各欄一つにしてください	
◆1欄の傷病名の記載は各欄一つにしてください		◆1欄の傷病名の記載は各欄一つにしてください		◆1欄の傷病名の記載は各欄一つにしてください	
手術		①無 2有	部位及び主要所見	手術年月日	平成 年 月 日
解剖		①無 2有	主要所見		
(15)	死因の種類	1 病死及び自然死 2 不慮の外因死 { 2 交通事故 3 転倒・転落 4 溺水 5 煙、火災及び火傷による傷害 } 6 窒息 7 中毒 8 その他 9 自殺 10 他殺 11 その他及び不詳の外因死 12 不詳の死			
(16)	外因死の追加事項	傷害が発生したとき 昭和 X 年 2 月 4 日 午後 時 分 傷害が発生したところの種類 1 住居 2 工場及び建築現場 3 道路 4 その他(草むら) 傷害が発生したところ 〇〇 都道府県 〇〇 区 〇〇 町村 手段及び状況 道路脇の草むらに倒れているのを発見された。			

(17)	生後1年未満で病死した場合の追加事項	出生時体重	単胎・多胎の別	妊娠週数
		グラム	1 単胎 2 多胎 ( 子中第 子 )	満 週
(18)	その他特に付言すべきことから	妊娠・分娩時における母体の病歴又は異状	母の生年月日	前回までの妊娠の結果 出生児 死産児 (妊娠満22週以後に限る)
		1 無 2 有	平成 年 月 日	人 胎

### 【解説】

冬場に酩酊状態で寝込んでしまい低体温に至ったと考えられる事例です。

通常、解剖検査が行われることが多いと思います。死体検案を行う場合は、検案から得られる情報のみならず、警察の捜査情報なども併せて総合的に判断します。

「死因の種類」も不慮の外因死ですと「8.その他」ですが、故意の可能性がある場合なども否定できない場合は「11.その他及び不詳の外因死」の選択もあります。



## 確認問題 2

65歳の男性。X年1月10日午後9時30分頃、道路を横断中に普通乗用車にはねられた。頭部を打撲し、病院に搬送された。検査で急性硬膜下血腫および脳挫傷と診断され、同日、開頭血腫除去術を受けた。術後、全身状態は安定したが、軽度の意識障害があり、ほぼ寝たきりの状態が継続した。3月上旬から発熱と呼吸状態の悪化がみられ、肺炎と診断され加療を受けたが、3月21日午後3時40分に死亡した。

この場合に発行する書類の「死亡の原因」「死因の種類」をどのように記載したらよいでしょうか。

## 確認問題 2

65歳の男性。X年1月10日午前9時30分頃、道路を横断中に普通乗用車にはねられた。頭部を打撲し、病院に搬送された。検査で急性硬膜下血腫および脳挫傷と診断され、同日、開頭血腫除去術を受けた。術後、全身状態は安定したが、軽度の意識障害があり、ほぼ寝たきりの状態が継続した。3月上旬から発熱と呼吸状態の悪化がみられ、肺炎と診断され加療を受けたが、3月21日午後3時40分に死亡した。

この場合に発行する書類の「死亡の原因」「死因の種類」をどのように記載したらよいでしょうか。

### 【記載例】

(14)	死亡の原因	施設の名 称		
		(ア) 直接死因	誤嚥性肺炎	約3週間
		(イ) (ア) の原因	急性硬膜下血腫及び脳挫傷	約70日
		(ウ) (イ) の原因	頭部打撲	約70日
		(エ) (ウ) の原因		
◆1欄では、最も死亡に影響を与えた傷病名を医学的因果関係の順番で書いてください		発病（発症）又は受傷から死亡までの期間		
◆1欄の傷病名の記載は各欄一つにしてください		◆年、月、日等の単位で書いてください。ただし、1日未満の場合は、時、分等の単位で書いてください（例：1 年 3 か月 5 時間 20 分）		
ただし、欄が不足する場合は（エ）欄に残りを医学的因果関係の順番で書いてください		手術年月日 平成 X 年 1 月 10 日		
手術		1 無 2 有	部位及び主要所見	開頭血腫除去術
解剖		1 所 2 有	主要所見	
(15)	死因の種類	1 病死及び自然死 2 交通事故 3 転倒・転落 4 溺水 5 煙、火災及び火焔による傷害 6 窒息 7 中毒 8 その他 9 自殺 10 他殺 11 その他及び不詳の外因 12 不詳の死		
(16)	外因死の追加事項	傷害が発生したとき 平成 X 年 1 月 10 日 午後 9 時 30 分頃 傷害が発生したところ 都道府県 区 町村 1 住居 2 工場及び建築現場 3 道路 4 その他（ ） 手段及び状況 道路を横断中に、普通乗用車にはねられたという。		

(17)	生後1年未満で病死した場合の追加事項	出生時体重	単胎・多胎の別	妊娠週数
		グラム	1 単胎 2 多胎（子中第子）	満 週
(18)	その他特に付言すべきことがら	妊娠・分娩時における母体の病歴又は異状	母の生年月日	前回までの妊娠の結果
		1 無 2 有	平成 年 月 日	出生児 死産児 人胎 (妊娠満22週以後に限る)
病院に搬送され、治療を受けていたが、死亡した。				

### 【解説】

交通事故で頭部を負傷し、治療を受けたものの死亡に至った事例です。

直接の死因は肺炎ですが、一連の事象の起因となった事項（この場合には、頭部打撲による急性硬膜下血腫および脳挫傷＝原因死）が死因の種類を判断する上で重要です。「2.交通事故」

手術の内容、外因死の追加事項など、可能な範囲で記載します。



平成29年度厚生労働科学研究費補助金（統計情報総合 研究事業）  
（分担）研究報告書

適切な原死因記載のための教育コンテンツの開発

研究分担者 池松 和哉 長崎大学大学院医歯薬学総合研究科 教授

研究要旨

本研究では、原死因を適切に記載するための教育コンテンツの開発として、死亡診断書・死体検案書の標準的な記載例集を作成し、その普及・啓発を目的とする。

本年度は、原死因選択ルールに基づいた模範記載例（標準的記載例）の内容の充実を図った。法医学領域で取り扱う機会の多い外因死について、多数の事例ベースの具体的記載例を作成した。記載例を活用・理解することで、死亡診断書・死体検案書の適切な記載が増えることが期待される。

A．研究目的

死亡診断書・死体検案書の標準的な記載例を作成し、記載に悩む事例についての対応の一助となる教育コンテンツの開発を目的とする。

B．研究方法

研究開発としては、事例と模範記載例（標準的記載例）を中心とするコンテンツを作成する。特に、記載のしかたに悩む例での活用を主眼に事例を構成する。

様々な領域の専門家から構成される各分担研究者、研究協力者の協力の下、過去の経験や学会等で伝聞した情報も含め、特に外因死の領域における比較的典型的な事例を収集する。死亡診断書・死体検案書等を作成する上で問題となる点や課題を抽出し、実際に即した形での模擬事例を作成した。作成した模擬事例につき、ICD-10の原死因選択ルールに基づいた模範記載例（標準的記載例）を作成し、さらに解説も加えて内容の充実を図った。作成した記載例については、研究班員全員でのブラッシュアップを行い、様式の統一を図った。

（倫理面への配慮）

例示の作成に際しては、個人情報や個人が特定できるような内容は含まないよう、十分配慮した。

C．研究結果

死亡診断書・死体検案書作成の際に、因果関係の記載が困難な例として、特に、内因（疾病によるもの）と外因（外傷や中毒、温度環境など）の両者が関与する事例があげられる。それらを中心に、多数の事例を設定し、それぞれについて模範記載例（標準的記載例）を作成した。

D．考察

死因統計は、わが国の保健衛生行政や社会的にも広く活用されており、保健衛生政策を実施していく上での基盤データのひとつである。その集計にあたっては死因の分類がなされるが、これは、死亡診断書、死体検案書の記載内容のうち、死因欄に記載された傷病から選択された原死因を基礎としている。そのため、死亡診断書・死体検案書の作成にあたり、どのような形で記載内容が統計作成に利用されているかを熟知しておく必要があるが、現状の重要性についての意識・認識は必ずしも十分ではない。その結果、原死因を十分考慮していない記載も見受けられる。

医学部の学部教育においても、これら死亡診断書、死体検案書の作成に関する授業が行われている。それに加えて、現場で診療や死体検案に従事する医師を対象とした研修会等での普及・啓発も不可欠である。

本研究では実際の事例に即した形での教育コンテンツを作成した。本年度対応した事例集とその模範記載例（標準的記載例）は、内容に関して講義や研修会等でも幅広く活用でき

るように充実させた。

模範記載例(標準的記載例)を参考にして、死亡診断書・死体検案書の適切な記載が増えることで、直接的・間接的に死因統計の精度向上を介して、国民の健康増進や福祉の向上に大きく寄与することが期待される。

#### E . 結論

死亡診断書・死体検案書作成の際に記載に悩む例について、因果関係の記載が困難な例として、特に、内因(疾病によるもの)と外因(外傷や中毒、温度環境など)の両者が関与する事例を中心に、適切な記載についての内容例示を充実させた。今回作成した教育コンテンツを用いて、どのような形で記載内容が統計作成に利用されているかについての認識が増すことで、死因統計の精度向上、ひいては国民の健康増進・福祉の向上に大きく寄与することが期待される。

#### F . 健康危険情報

該当なし。

#### G . 研究発表

##### 1. 論文発表

なし

##### 2. 学会発表

なし

##### 3. 関連した実務活動

なし

#### H .知的財産権の出願・登録状況(予定を含む)

該当なし。





平成29年度厚生労働科学研究費補助金（統計情報総合 研究事業）  
（分担）研究報告書

適切な原死因記載のための教育コンテンツの開発

研究分担者 横田 順一郎 独立行政法人 堺市立病院機構 副理事長

研究要旨

本研究では、原死因を適切に記載するために死亡診断書・死体検案書の標準的な記載例集を中心とした教育コンテンツの開発と普及・啓発を目的とする。

本年度は、事例集と模範記載例（標準的記載例）の内容の充実を図った。救急医学領域では外傷や中毒、急性疾患のみならず、やや経過の長い例など、複数の病態が関与する事例もあり、実際の記載に際しては、医学的因果関係のとらえ方が問題になる場合も少なくない。コンテンツの活用により、記載のしかたに悩む例での一助となることが期待される。

A．研究目的

死亡診断書・死体検案書の標準的な記載例を収載した教育コンテンツを開発し、原死因の適切な記載についての認識の普及を目的とする。

B．研究方法

研究開発としては、事例と標準的記載例を中心とするコンテンツを作成する。特に、原死因を適切に記載・選択する事を主要な目的としており、医学的因果関係のとらえ方を重点にした記載例を作成する。

様々な領域の専門家から構成される各分担研究者、研究協力者の協力により、死亡診断書・死体検案書等を作成する上で記載に悩むような事例を収集する。問題となる点や課題を抽出し、ICD-10の原死因選択ルールに基づいた模範記載例（標準的記載例）を作成し、eラーニングのシステムとした。記載例については、研究班員全員でのブラッシュアップを行い、幅広い想定事例を作成する。

（倫理面への配慮）

例示の作成に際しては、内容を編集し、個人情報や個人が特定できるような内容は含まないようにした。

C．研究結果

死亡診断書・死体検案書作成の際に、記載の

しかたに悩む場合として、急性疾患後の経過の長い事例などを中心に事例を設定し、それぞれについて模範記載例（標準的記載例）を作成した。さらに、収載した全事例についてブラッシュアップを行った。

D．考察

死亡診断書、死体検案書は人間の死亡の医学的・法律的な証明であり、死亡に立ち会った、または死体を検案した医師が作成する。その作成にあたっては、医学的診断のみならず、外因の場合では状況、経過の長い場合や複数の病態が関与する場合にはそれぞれについての医学的因果関係も考慮するため、時に記載の際に悩む例も少なくない。

死亡診断書、死体検案書は、わが国の死因統計を作成する際の資料となる。死因統計は、わが国の保健衛生行政や社会的にも広く活用されており、保健衛生政策を実施していく上での基盤データのひとつである。一人一人の死亡診断書、死体検案書の記載内容（死因欄に記載された傷病から選択された原死因）が死因統計の分類を行う上での基礎となっており、記載に苦慮する事例での適切な記載例（標準的記載例）を求める声もある。

本研究では実際の事例に即した形での教育コンテンツを作成した。このコンテンツについては、クイズ形式の自習のコンテンツのみならず、困ったときに参照できる形で、収載

事例を充実させた。

死亡診断書・死体検案書の適切な記載は、直接的・間接的に死因統計の精度向上を介して、国民の健康増進や福祉の向上に大きく寄与することが期待される。死亡診断書・死体検案書の作成については、どのような形で記載内容が統計作成に利用されているかを熟知しておく必要があるが、医学部の学部教育だけでなく、現場で診療や死体検案に従事する医師を対象とした研修会での普及・啓発も不可欠である。作成した教育コンテンツは、標準記載例についての事例を充実させ、講義や研修会等でも活用できるよう配慮した。

#### E．結論

死亡診断書・死体検案書の標準的な記載例を収載した教育コンテンツを作成し、適切な記載についての内容例示を充実させた。死亡診断書・死体検案書の記載に苦慮する例における作成の一助となるとともに、死因統計の精度向上、ひいては国民の健康増進・福祉の向上に大きく寄与することが期待される。

#### F．健康危険情報

該当なし。

#### G．研究発表

##### 1. 論文発表

横田順一郎：救急医療におけるメディカルコントロール、救急医療体制の歴史、日本救急医学会メディカルコントロール体制検討委員会・日本臨床救急医学会メディカルコントロール検討委員会監修、救急医療におけるメディカルコントロール、へるす出版、東京；pp3-18，2017。

##### 2. 学会発表

なし

##### 3. 関連した実務活動

なし

#### H .知的財産権の出願・登録状況( 予定を含む )

該当なし。



平成29年度厚生労働科学研究費補助金（統計情報総合 研究事業）  
（分担）研究報告書

適切な原死因記載のための教育コンテンツの開発

研究分担者 加藤 稲子 三重大学大学院周産期発達予防学講座 教授

研究要旨

本研究では、死亡診断書・死体検案書の標準的な記載例集を収載した教育コンテンツを開発し、原死因を適切に記載することの普及・啓発を目的とする。

本年度は、原死因選択ルールに基づいた模範記載例（標準的記載例）について、その内容の充実を図った。特に小児の死亡事例について、多数の事例ベースの具体的記載例を作成した。記載例を活用することで、記載のしかたについて苦慮する例が減り、死亡診断書・死体検案書の適切な記載が増えることが期待される。

A．研究目的

死亡診断書・死体検案書の標準的な記載例集を中心とした教育コンテンツの開発を目的とする。原死因を適切に記載することのみならず、記載に悩む事例についての対応の一助となるものとする。

B．研究方法

事例と模範記載例（標準的記載例）を中心とするコンテンツを作成する。特に、死亡診断書・死体検案書の作成時に、記載のしかたに悩む例での活用を主眼に事例を構成する。

過去の経験や学会等で伝聞した情報も含め、小児における比較的典型的な事例、および作成に苦慮した事例を収集する。死亡診断書・死体検案書等を作成する上で問題となる点や課題を抽出し、実際に即した形での原死因選択ルールに基づいた模範記載例（標準的記載例）と解説を作成した。救急医療、高齢者医療、法医学など様々な領域の専門家から構成される各分担研究者、研究協力者の協力の下、作成した記載例については、研究班員全員でのブラッシュアップを行い、様式の統一を図った。

（倫理面への配慮）

例示に際しては、個人情報や個人が特定できるような内容を含まないよう、内容を編集し、十分配慮した。

C．研究結果

小児の死亡例は多くないが、その中でも時に遭遇する頻度の比較的小さい事例や、内因（疾病によるもの）のみならず外因（窒息や溺水など）の関与する事例を中心に、事例を設定し、それぞれについて模範記載例（標準的記載例）と解説を作成した。

D．考察

死亡診断書、死体検案書を作成する際に、日常の診療等で遭遇しにくい事例では、時に記載の際に悩む例も少なくない。また、疾病のみならず窒息や溺水などの外因の関与する事例の場合には、それぞれの病態の関与について、判断が難しく、書類作成時に記載の際に悩む例も少なくない。

死因統計は、わが国の保健衛生行政や社会的にも広く活用されており、保健衛生政策を実施していく上での基盤データのひとつである。一人一人の死亡診断書、死体検案書の記載内容（死因欄に記載された傷病から選択された原死因）が死因統計の分類を行う上での基礎となっており、どのような形で記載内容が統計作成に利用されているかを熟知しておく必要がある。

本研究で作成した教育コンテンツは、実際の事例に即した形であり、模範記載例（標準的記載例）は、講義や研修会等にも幅広く活用できる。

E．結論

日常の診療において遭遇する機会が少ない事例も、死亡診断書・死体検案書作成の際に記載に悩む場合もある。その際に参考になるような、記載についての内容例示を充実させた。本研究で作成した教育コンテンツを用い、原死因を意識して、死亡診断書・死体検案書を作成する機会が増えることで、死因統計の精度向上につながり、ひいては国民の健康増進・福祉の向上に寄与していくことが期待される。

F．健康危険情報

該当なし。

G．研究発表

1．論文発表

なし

2．学会発表

なし

3．関連した実務活動

なし

H．知的財産権の出願・登録状況（予定を含む）

該当なし。





平成29年度厚生労働科学研究費補助金（統計情報総合 研究事業）  
（分担）研究報告書

適切な原死因記載のための教育コンテンツの開発

研究分担者 鷲見 幸彦 国立長寿医療研究センター 副院長

研究要旨

本研究では、原死因を適切に記載するための教育コンテンツの開発を目的とする。教育コンテンツに死亡診断書・死体検案書の標準的な記載例を収載し、適切な原死因の記載の普及・啓発を行う。

本年度は、前年度に作成したe-ラーニングシステムに加え、原死因選択ルールに基づいた模範記載例（標準的記載例）の内容の充実を図った。高齢者に多くみられる神経変性疾患等を中心に、事例ベースの具体的記載例を作成した。記載例の活用により、死亡診断書・死体検案書の適切な記載が増えることが期待される。

A．研究目的

原死因選択のための適切な記載の普及・啓発のための教育コンテンツの開発を目的としており、具体的には、死亡診断書・死体検案書の標準的な記載例を作成し、記載に苦慮する事例についての対応の一助とする。

B．研究方法

過去の経験や学会等で伝聞した情報も含め、比較的典型的な事例および、経過が長く、複数の病態が関与する事例、死亡診断書・死体検案書の作成にあたり、記載のしかたに苦慮する例での活用を主眼に事例を構成する。特に、高齢者医療に関する事項や神経疾患を中心に、専門家でも意見の分かれる事項を選択する。

収集した事例を基に、死亡診断書・死体検案書等を作成する上で問題となる点や課題を抽出し、実際に即した形での模擬事例を作成し、模範記載例（標準的記載例）とその解説を準備し、コンテンツを作成する。

作成した模擬事例と記載例、解説については、様々な領域の専門家から構成される各分担研究者、研究協力者の協力の下、研究班員全員でのブラッシュアップを行い、様式の統一を図った。

（倫理面への配慮）

例示の作成に際しては、個人情報や個人が特定できるような内容は含まない。

C．研究結果

死亡診断書・死体検案書作成の際に、因果関係の記載が困難な例として、経過が長く、複数の病態が関与する事例があげられる。また、専門家の間でも意見の分かれる事項に関しては、単一の模範記載例（標準的記載例）のみならず、複数の記載例を併記した。また、外因による死亡のみならず、疾病による死亡で判断に迷う事例も提示し、教育コンテンツに収載する内容の充実を図った。

D．考察

死亡診断書、死体検案書は人間の死亡の医学的・法律的な証明であり、医師が自らの医学的診断に基づいて作成する。個々の事例における病態の死因に関与する影響についての評価は、患者の生活背景によっても異なることがあり、同一の疾病についても、時に判断が分かれる事もある。そのため、死亡診断書、死体検案書の死因の記載（どの病態を原死因とするか）についても意見が分かれることがある。専門家の間でも意見の分かれる事項に関しては、適切な記載例が複数あり、教育コンテンツの内容は、これらを反映したものとなっている。

死因統計は、わが国の保健衛生行政や社会的にも広く活用されており、保健衛生政策を実施していく上での基盤データのひとつであ

る。その集計にあたっては死因の分類がなされるが、死因欄に記載された傷病から選択された原死因が複数になる場合にも、ほぼ類似の病態の場合には類似のものとする考えも考慮すべきと思われる。

現場で診療や死体検案に従事する医師を対象とした研修会等でも、適切な原死因の選択の考え方は、さらに普及・啓発が不可欠であり、本研究で作成した教育コンテンツの事例集とその模範記載例（標準的記載例）は、内容に関して講義や研修会等でも幅広く活用できるように充実させた。

模範記載例(標準的記載例)を参考にして、死亡診断書・死体検案書の適切な記載が増えることで、死因統計の精度向上を介して、国民の健康増進や福祉の向上に大きく寄与することが期待される。

#### E．結論

死亡診断書・死体検案書作成の際には、同一の疾患であっても病態の死因に関与する影響についての判断が分かれる場合がある。専門家の間でも意見の分かれる事項に関しては、適切な記載例を複数示し、適切な記載についての内容例示を充実させた。今回作成した教育コンテンツを用いて、医師の間での原死因選択に関する認識が増すことで、死因統計の精度向上、ひいては国民の健康増進・福祉の向上に大きく寄与することが期待される。

#### F．健康危険情報

該当なし。

#### G．研究発表

##### 1. 論文発表

なし

##### 2. 学会発表

なし

##### 3. 関連した実務活動

なし

#### H．知的財産権の出願・登録状況（予定を含む）

該当なし。



平成29年度厚生労働科学研究費補助金（統計情報総合 研究事業）  
（分担）研究報告書

適切な原死因記載のための教育コンテンツの開発

研究分担者 横井 英人 香川大学医学部附属病院 教授

研究要旨

本研究では、原死因を適切に記載するための教育コンテンツの開発により、死亡診断書・死体検案書の標準的な記載例集を作成し、適切な原死因の記載についての普及・啓発を目的とする。

本年度は、e-ラーニングによる教育コンテンツのうち、模範記載例（標準的記載例）の内容の充実を図った。前年度に作成したe-ラーニングシステムに改訂を行い、さらに構成を変更し、多数の事例ベースの具体的記載例を作成した。e-ラーニングシステムの活用により、死亡診断書・死体検案書の適切な記載が増えることが期待される。

A．研究目的

死亡診断書・死体検案書の記載に関して、適切な記載、標準的な記載例を作成し、死亡診断書・死体検案書の「原死因」の適切な選択が可能となるような、教育コンテンツを開発する。

B．研究方法

研究開発としては、前年度に作成したe-ラーニングシステムに加え、事例と模範記載例（標準的記載例）を中心とするコンテンツを作成し、追加する。特に、収載する事例については内因死事例から外因死まで、さらに複数の病態が関与する事例や経過が長い事例など、日常の診療や検案で遭遇する機会が多いもの等、幅広く対象とする。

様々な領域の専門家から構成される各分担研究者、研究協力者の協力の下、模擬事例の作成、原死因選択ルールに基づいた模範記載例（標準的記載例）および解説も加えて内容の充実を図った。作成した記載例については、研究班員全員でのブラッシュアップを行い、様式の統一を図った。

作成した事例については、前年度作成したe-ラーニングシステムに追加、改訂を行い、さらに構成を変更し、使いやすくした。

（倫理面への配慮）

例示の作成に際しては、個人情報や個人が特定できるような内容は含まないよう、十分配慮した。

C．研究結果

e-ラーニングシステムの構成を、大きく1. 例示編、2.e-ラーニング編、3.確認問題として、学習者の利便性の向上を図った。また、より多数の事例を設定することにより、様々な事例の死亡診断書・死体検案書の作成にあたる、より多くの医師のニーズに対応できるように努めた。

D．考察

死亡診断書、死体検案書は医師自らが医学的診断に基づいて作成する。記載内容には性別など、選択肢を選ぶ項目もあるが、死因に関する事項は直接記述する項目が多い。そのため、e-ラーニングシステムの導入を行う場合も、それぞれの記載項目の自由度が大きくなるため、クイズ形式の設問を用いる場合には問題設定に大きな制約が生じる。そのため、本年度は、e-ラーニングシステムに模範記載例（標準的記載例）を大幅に追加し、さらに構成を変更することで、学習者の利便性の向上を図った。

死亡診断書、死体検案書の記載内容のうち、死因欄に記載された傷病から選択された原死因を基礎として、死因統計が作成される。死因統計は、わが国の保健衛生行政や社会的にも広く活用されており、保健衛生政策を実施していく上での基盤データのひとつである。一

人一人の死亡診断書、死体検案書のなかの死因に関する記載内容が死因統計の分類を行う上での基礎となっており、医師はどのような形で記載内容が統計作成に利用されているかを熟知しておく必要がある。今回作成した教育コンテンツを活用することで、死因統計の精度向上、ひいては国民の健康増進・福祉の向上に大きく寄与することが期待される。

#### E．結論

今回作成した教育コンテンツでは、e-ラーニングシステムの構成を変えたことで、学習者の利便性の向上を図った。また、より多くの医師のニーズに対応できるように努めた。このシステムを活用することで、記載内容がどのように統計作成に利用されているかについての認識が増し、死因統計の精度向上につながることを望まれる。

#### F．健康危険情報

該当なし。

#### G．研究発表

1. 論文発表  
なし
2. 学会発表  
なし
3. 関連した実務活動  
なし

#### H .知的財産権の出願・登録状況( 予定を含む )

該当なし。





平成29年度厚生労働科学研究費補助金（統計情報総合 研究事業）  
（分担）研究報告書

適切な原死因記載のための教育コンテンツの開発

研究分担者 宮武 伸行 香川大学医学部 准教授

研究要旨

本研究では、原死因を適切に記載するための教育コンテンツを開発し、死亡診断書・死体検案書の標準的な記載例集を収載し、原死因を適切に記載することの普及・啓発を目的とする。

本年度は、原死因選択ルールに基づいた模範記載例（標準的記載例）の内容の充実を図った。疾病による死亡から外因死、さらには両者の関与する事例など、多岐にわたる事例ベースの具体的記載例を作成した。記載例を活用することで、死亡診断書・死体検案書の適切な記載が増えることが期待される。

A．研究目的

死亡診断書・死体検案書の標準的な記載例を作成し、原死因の適切な記載につながる教育コンテンツの開発を目的とする。

B．研究方法

研究開発としては、事例と模範記載例（標準的記載例）および記載事項の解説からなるコンテンツを作成する。特に、記載のしかたに悩む例での活用を主眼に事例を構成する。

過去の経験や学会等で伝聞した情報も含め、内因（疾病によるもの）と外因（外傷や中毒、温度環境など）の両者が関与する事例、さらには多くの病態が関与する例や経過の非常に長い例など、多岐にわたる事例を収集する。それらの事例から、死亡診断書・死体検案書等を作成する上で問題となる点や課題を抽出し、実際に即した形での模擬事例を作成した。作成した模擬事例につき、模範記載例（標準的記載例）を作成し、さらに解説も加えて内容の充実を図った。様々な領域の専門家から構成される各分担研究者、研究協力者の協力の下、作成した記載例については、研究班員全員でのブラッシュアップを行い、様式の統一を図った。

（倫理面への配慮）

例示の作成に際しては、個人情報や個人が特定できるような内容は含めないよう、十分配慮した。

C．研究結果

死亡診断書・死体検案書作成の際に、因果関係の記載が困難な例として、特に、内因と外因の両者が関与する事例や、医学的な因果関係を捉えにくい（記載しにくい）事例、まれな事例があげられる。それらを中心に、多数の事例を設定し、それぞれについて模範記載例（標準的記載例）を作成した。

D．考察

死因統計は、わが国の保健衛生行政や社会的にも広く活用されており、保健衛生政策を実施していく上での基盤データのひとつである。その集計にあたって収集される死因データは、一人一人の死亡診断書、死体検案書の記載内容が基になっており、死因欄に記載された傷病から選択された原死因を基礎としている。そのため、死亡診断書・死体検案書の作成にあたり、どのような形で記載内容が統計作成に利用されているかを十分認識しておくことが重要であるが、現状の意識・認識は必ずしも十分ではない。その結果、原死因を十分考慮していない記載も見受けられる。

死亡診断書、死体検案書の作成に関する事項については、医学部の学部教育のみならず、現場で診療や死体検案に従事する医師を対象とした研修会等での普及・啓発も不可欠である。

本研究で作成した教育コンテンツの事例集とその模範記載例(標準的記載例)は、内容に関しても講義や研修会等でも幅広く活用できるように充実させた。

#### E . 結論

死亡診断書・死体検案書作成の際に記載に悩む例について、因果関係の記載が困難な例を中心に、適切な記載についての内容例示を充実させた。今回作成した教育コンテンツは、どの部分からでも利用可能であり、気軽に眺めるだけでも学修は可能である。教育コンテンツの活用が、死因統計の精度向上を通じ、国民の健康増進・福祉の向上に大きく寄与することが期待される。

#### F . 健康危険情報

該当なし。

#### G . 研究発表

##### 1. 論文発表

Yamamoto Y, Miyatake N, Kinoshita H, Tanaka N, Kuratou R, Katayama A, Fukunaga T. Changes in asphyxia death classified by month in the 23 wards of Tokyo. Curr Study Environ Med Sci 2017; 10: 3-9.

宮武伸行, 田中直子, 木下博之, 福永龍繁: 東京 23 区における凍死者数と気温指標との関連および凍死者数の月別比較 . 地域環境保健福祉研究 . 2017; 20: 27-30.

##### 2. 学会発表

なし

##### 3. 関連した実務活動

なし

#### H . 知的財産権の出願・登録状況( 予定を含む )

該当なし。



別添 5

研究成果の刊行に関する一覧表

書籍

著者氏名	論文タイトル名	書籍全体の編集者名	書 籍 名	出版社名	出版地	出版年	ページ
横田順一朗	救急医療におけるメディカルコントロール	救急医療におけるメディカルコントロール編集委員会	救急医療におけるメディカルコントロール	へるす出版	東京	2017	3-5
横田順一朗	救急医療体制の歴史	救急医療におけるメディカルコントロール編集委員会	救急医療におけるメディカルコントロール	へるす出版	東京	2017	6-18

雑誌

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
木下博之	死亡診断書・死体検案書作成の留意点	香川県医師会雑誌	70 (5)	80-82	2017
Tanaka N, Kinoshita H, et al.	Flunitrazepam in stomach contents may be a good indicator of its massive ingestion.	Rom J Leg Med	25 (2)	193-195	2017
Takakura A, Kinoshita H, et al.	Spectrophotometric measurement of boric acid in a case of accidental ingestion.	The Albanian Journal of Medical and Health Sciences.	48 (1/2)	49-53	2017
Kinoshita H, Tanaka N, et al.	An autopsy case of death by combined use of benzodiazepines and diphenidine.	Soud Lek	62 (4)	40-43	2017
Yamamoto Y, Miyatake N, Kinoshita H, et al.	Changes in asphyxia death classified by month in the 23 wards of Tokyo.	Curr Study Environ Iron Med Sci	10 (1)	3-9	2017

宮武伸行，田中直子，木下博之，ら	東京23区における凍死者数と気温指標との関連および凍死者数の月別比較．	地域環境保健福祉研究	20（1）	27-30	2017
------------------	-------------------------------------	------------	-------	-------	------